
『愚息行状観察日記 = 御母堂さま = 』

猫目石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『愚息行状観察日記』御母堂さま』

【Nコード】

N9246R

【作者名】

猫目石

【あらすじ】

半妖の犬夜叉に対し腹違いの兄である殺生丸は完全なる妖怪。

そんな殺生丸が不思議な因縁から連れ歩いている人間の童女のりん。異種族萌え、年の差萌え、体格差萌えと萌えがテンコ盛りのカップル（殺生丸×りん）の経過を殺生丸の母、御母堂さまが“遠見の鏡”を使って観察します。

(1) 天空の城から

今日も今日とて“遠見の鏡”を使い愚息の行状を観察する。
ンツ？ 愚息は誰かとな。

ホツ、決まっておろうが。

妾一人息子、西国王、殺生丸のことよ。

アア、妾か？

妾はな、殺生丸の生母にして先の西国王妃の狗姫じゃ。

そうさな、人間風に云うと王太后という地位にある。

尤も、堅苦しい呼び名は御免なので通常は“狗姫の御方”と呼ばれておるがな。

マア、そのような事はさて置いて我が愚息の話に戻るとしよう。

あの薄情者め。

西国を出奔して以来、二百年も、この母に消息ひとつ知らせなんだ癖に、ある日、突然、降って湧いたように我が天空の居城に乗り込んできおったのだ。

その前に久々の空中逍遙と洒落込んでおった妾を強引に捉まえてな。そして天生牙の冥道を拡げたいと己の用件のみをほざきおった。

長の無沙汰を詫びもせず時候の挨拶ひとつ口にせずだぞ。

全く我が息子ながら相変わらず煮ても焼いても喰えぬ奴よな。

巷でも言うではないか。

『親しき仲にも礼儀あり』と。

昔から愛想のない子供だったが成長しても、さして変わりが無い。

一体、誰に似たのやら。

ハツ？妾ではないぞ。

父親の鬪牙でもないな。

親父の方は、息子とは違って、これまたエラク愛想が良くてな。

アチコチの女が鬪牙に岡惚れしておったくらいだ。

ムツ、話が飛んだな。

元に戻そう。

殺生丸は父親のせいもあってか極めつけの人間嫌いであったはず。それが、どうした気紛れか、あの時は人間を二匹も連れておつたのだ。

一匹は赤子に毛が生えたような童女、もう一匹は、まだまだ一人前の男には程遠い小僧。

最初は二匹を『餌』にでもする積りなのかと思つたが、そうではないらしい。

マア、とにかくにも、この母を頼って参つたのだ。

望みは叶えてやるう。

今は泉下の鬪牙に頼まれたことでもあるしな。

それに何より面白そうだ。

この冥道石を使つたら何が起きるのかがな。

さて、殺生丸は不測の事態にどう対応するのであるうか。

首飾りに仕立てた冥道石を両手で掴み胸元で構える。

そして徐に冥道石の力を解放してやった。

冥道石から飛び出してきたのは黒い巨大な犬。

冥界の犬だ。

殺生丸に襲い掛かる。

天生牙を抜き放ち冥道残月破で攻撃する殺生丸。

だが、殺生丸の冥道残月破にも冥界の犬はビクともせぬ。

空中を自在に飛び回る冥界の犬。

当然だな、あんな不完全な冥道では。

真の冥道は真円を描くもの。

殺生丸の冥道は大きくはあるものの瘠せこけた三日月の形。すると、冥界の犬め、何を思ったのか。

二匹の人間の子供達を呑み込んで冥道に逃げ込んだのだ。

冥界の犬を追って自ら冥道に入ろうとする殺生丸。

まさか、あ奴が躊躇いもせず冥道に入ろうとするなど、正直、妾も予想せなんだわ。

それも、あれ程、嫌っておった人間の為にとはな。

殺生丸は犬を斬りに行くだけだなどと抗弁しておったが。
フツ、ばればれの口実ではないか。

冥道は虚空に消え失せた。

後は冥道石を使って殺生丸の行動を追えばよい。

『愚息行状観察日記?』に続く

(1) 天空の城から(後書き)

この作品は現在、(41)まで猫目石のブログで公開しています。
興味がある方は【疾風怒濤”劇場】までお越し下さい。
他の作品もございます。

(2) 冥界

殺生丸に付いて来た緑色の小妖怪がなんのканのと騒ぎ立てる。
小煩い奴だ。

名前は・・・何と云ったかな。

マア、そんな事はどうでもいい。

愚息の行動を冥道石で探ってみる。

フム、冥界の犬を癒しの天生牙で斬り捨てたか。

冥界の犬の体内に呑み込まれた人間の小娘と小僧こぞうが出てきた。

ンツッ!? 何と殺生丸が小娘に手を触れたではないか。

それも、やけに優しい手付きで。

これまでの奴なら断じて有るまじき行為。

あの人間の小娘・・・一体、殺生丸の何なのだ?

小妖怪に問い質してみるがサツパリ要領を得ん。

相変わらず小娘は目を覚まさないが小僧の方は気が付いたようだ。

そっこうする内に更に更に冥界の妖あやかしどもが殺生丸達に襲いかかる。

小僧に小娘を背負わせ殺生丸は妖どもの相手を。

手際よく奴らを片付け冥界へと足を進める。

進めば進むほどに戻る道は崩れていく。

そして遂には冥界に行き着く。

暫くして小僧が小娘の異変に気が付いたようだ。

さもありません、冥界の闇の中、人間の子供ごときの命、簡単に尽きてしまおう。

天生牙を抜き放ってみたものの、あの世からの使いが見えず戸惑う
殺生丸。

その時、闇が、冥界の真の闇が黒雲のように覆いかぶさり小娘をか
つ攪ひきたつていった。

小娘を追い冥界の闇の中に踏み込んでいった殺生丸と小僧。

このままでは人間どころか殺生丸の命とて危ぶまれる。

小妖怪も騒ぐことだし、そうさな、この辺りで母の親切を示してやるとするか。

冥道石の首飾りを高く掲げ、冥界の殺生丸の前に現世へ戻る道を開いてやった。

すると、どうだろう、あ奴、この母の親切を無視しおったではないか。

何とまあ、可愛げのない。

フン、勝手にするがよい。

頼まれても、もう二度と母は救いの手など差し伸べてやらぬ。

冥界の主が現われた。

巨大な闇その物のような存在。

小娘が大きな手に、ひっ？まえられておる。

周囲には死人の山。

夥しい数の老若男女の死人どもが山を成しておるのだ。

殺生丸が冥界の主を斬って捨てた。

癒しの刀、天生牙で。

だが、小娘は生き返らない。

おかしいな、何故だ。

小妖怪に訊ねてみる。

成る程、やはり、あの小娘、既に一度、天生牙で甦っていたのか。

それではどうしようもないな。

天生牙で命を呼び戻せるのは一度きりなのだから。

小娘が生き返らなかつたのが、余程、衝撃だったのだろう。

殺生丸が天生牙を取り落としおった。

腑甲斐ない奴だ。

刀の成長の為に冥界に踏み込んだのではなかつたのか。

突如、死骸の山が揺らいだ。

亡者どもが縋るように天生牙を取り囲んでおった。

まるで救いを求めるようにな。

殺生丸が再び天生牙を手にした。

小娘を腕に抱いたまま天生牙を天に向かって翳せば。
眩しい光が満ち溢れ、死人達を浄化していく。
神々しいまでに神聖かつ厳肅な情景。
そして、そのまま冥道を開けば、以前の三日月型とは比べ物にならぬ大きさに拡がっておるではないか。
真円ではないが、それに近い形の冥道。
その中から小娘を抱いた殺生丸と小僧が現世に戻ってきた。

『愚息行状観察日記?』に続く

(3) 蘇生

無事、冥界から戻ってきた殺生丸。

必死に無表情を保とうとしているようだが、どうにも抑え切れないのだらう。

沸々（ふつふつ）と身の内から沸き立つ怒りの炎が見えるようだ。小娘が息絶えたのが、余程、堪えているらしい。

今にもコチラに喰ってかかりそうな気配だな。

フツ・・・青いな、殺生丸。

二百年前の小童の頃に比べれば確かに形は成長したと云えよう。

だがな、妾の目から見れば、そなた如き、まだまだ経験も知識も足りぬ若輩者ぞ。

そなたには、まだ親として教え諭さねばならぬ事が多々ある。

まず、最初に教えてやろう。

天生牙で死人を呼び戻せるのは一度きりなのだ。

そう告げた途端、殺生丸の無表情な面に無念と落胆の色が生じた。

うすうす予期してはいたのだらう。

だが、改めて事実と知らされ、愕然たる思い消し難しといった処か。

殺生丸、そなた、天生牙さえ有れば死など恐るるに足りぬと心得違いをしていたようだな。

愚かな、我ら妖怪には人間が持ち得ぬ力があるが神ではない。

殺生丸、そなたは知らねばならん。

命の重さ、儚さを。

限りある命だからこそ愛しいのだ。

愛しいからこそ失うのが悲しい、恐ろしい。

そこに慈悲が生じるのだ。

天生牙は癒しの刀。

その刀を持つ者は、たとえ武器として振るう時も慈悲の心をもって敵を葬らねばならん。

それが百の命を救い敵を冥道に送る天生牙を持つ者の資格なのだ。亡き夫、鬪牙の言葉を、一字一句、違たがえることなく殺生丸に伝える。流石に父の言葉は身に沁みたのであろう。

あの頑固一徹な殺生丸が神妙に聞き入っておった。

ンツ！？脇を見やれば小妖怪が泣きじゃくっておるではないか。妖怪が泣くとは珍しいのう。

我らは感情に左右される人間と違い、そうそう簡単には泣かぬもの。そんなにも悲しいのかと問うてみれば、何と、小妖怪め、主あしである殺生丸の代わりに泣いておるとな。

目の前の息子は相変わらず無表情のままだが、よくよく見れば、そこに深い悲しみの色が透けて見える。

仕方あるまい、奥の手を使うか。

「・・・二度目はないと思え」

そう、次こそは最後だぞ、殺生丸、心せよ。

冥道石も天生牙と同じだ。

二度は・・・使えぬ。

首飾りを外し息絶えた小娘の首に掛けてやる。

小娘の胸に置いた冥道石から溢れ出す目が眩くらむような目映まはゆい光。

この光こそ冥界に置き去られていた小娘の命その物なのだ。

フム・・・にしても、この光、尋常の輝きではないな。

やはり、この小娘、只の人間とは、到底、思えぬ。

その時、極々、微かすかに何か、妾わいの意識に引ひつ掛かかった。

深い深い潜在意識の底に横たわる小箱の中に封印されてきた真実。数年後に気が付くことになるが、あの時は、さして気にもしなかつた。

アア、これは、いずれ、また別の機会にでも話すことになるう。

今は小娘蘇生の話に戻ろう。

光が消えるとともに小娘に命が宿る。

よし、戻ってきたな。

トクン・・・妾の聡い妖耳に聞こえてきた小娘の心の臓の鼓動。無論、殺生丸の耳にも聞こえておるう。

小娘がつぶらな瞳をゆっくりと開けた。

その様子を瞬きもせずジツと凝視する殺生丸。

冥界で息が止まった小娘。

まだ上手く呼吸しづらいのだろう。

ゴホゴホと小娘が咳き込み涙ぐめば・・・。

何と殺生丸の奴、冥界の中と同じように手を差し伸べておるではないか。

あれ程に矜持の高い奴が膝を折り小娘の頬をソツと優しく撫でておる。

「もう・・・大丈夫だ」などと声まで掛けて。

小娘を蘇生させた妾には目もくれん。

殊勝にも愚息の代わりに小妖怪が妾に礼を述べよった。

フム、この態度は従者の鑑ともいうべきだな。

小妖怪が云うところによると殺生丸は甚く喜んでおるらしい。

それにしても、人間の小娘一匹に、この騒ぎ・・・。

ハア〜呆れたものよ。

変なところが父親に似てしまったな。

もう用は済んだとばかりにサツサと我が城から立ち去ろうとする愚息とその一行。

小娘は殺生丸のすぐ後を、小僧は、その数歩後に付き従う。

小妖怪が主の代わりに妾に頭を下げ退去の挨拶を述べる。

それにしても気になるな、あの人間の小僧。

普通の人間ならば冥界の中で生きていられるはずがない。

にも拘らず生きているということは・・・。

不思議に思い小僧に問うてみたところ、四魂の欠片で命を繋いでおるとな。

そうか、やはり、おまえも尋常な生の有りようではないのか。

ならば、小僧も小娘と同じ、天生牙では救われぬ命。
その事をしかと忘れぬよう小僧に告げおいた。

『愚息行状観察日記?』に続く

(4) 無自覚の恋情

それでな、この城に殺生丸が立ち寄ったあの日以来、折に触れては“遠見の鏡”を開き、愚息の動向を覗き見るのが妾の楽しみ、イヤ、日課となった。

二百年間、消息ひとつ寄こさなんだ馬鹿息子が、いきなり現われたのには、内心、驚かされたが、あれ程、人間嫌いだつた殺生丸が、人間の子供を、それも二匹も連れていたのは更なる驚きだつた。

まず一匹目は赤子に毛が生えたような童女。

二匹目は一匹目に比べれば、多少、大きいが、これも童の域を出ん。どう鼻屑目に見ても一人前とは云えぬ小僧だつたからな。

最初は二匹とも餌にでもする積りなのかと考えたが。

それは、即座に、殺生丸に否定された。

餌でないというのなら、はて、どういう心積りで連れ回しておるのか。

これまでのあ奴の性状からすれば断じて有り得ぬ行為。

だが、そんな事は、まだまだ序の口だつた。

その後の奴の前代未聞の行動の数々に、益々、驚かされることになろうとはな。

正直、あの時は想像もせなんだわ。

それにしても、殺生丸め、無愛想、無礼なところは二百年前の小童の頃と全く変わっておらん。

長の無沙汰を詫びもせず“冥道残月破”なる技の冥道を拡げる方法を教えると己が要望のみを妾に突きつけおつたわ。

あれが二百年ぶりに逢つた親に対する態度か。

フム、まあ、仕方ないか、今更、あ奴が孝心の篤い孝行息子に変わらうはずもない。

それに、極めつけの意地っ張りである殺生丸が妾を頼って来たという事は、余程、進退谷まっていたのであろうしな。

亡き夫、鬪牙から頼まれておったことでもあった。

今にして思えば、鬪牙は、何時の日か、この事あると予想しておつた訳だな。

だからこそ、妾に、この冥道石を託した。

冥道石を使つて殺生丸の冥道を拡げる手助けをしてやれと。

鬪牙から手渡された時は冥道石のみだった。

そのままでは、常時、携行するのに不便だったのでな。

首飾りに仕立てさせ、いつも身に付けておけるようにした。

鬪牙の形見でもあるからな。

そのような経緯しきまつで冥道石の力を解放し愚息の望みを叶えてやったのだが。

結果的に冥道は拡がったが冥界の邪気に侵され人間の小娘が息絶えてしまった。

冥界から戻ってきた際の殺生丸ときたら、これまでに見たこともない顔をしておつたぞ。

あの人間の小娘の死が、あんなにも、あ奴に衝撃だったとは。何とも面妖な、これぞ驚愕の極みだな。

既に一度死んだ身ゆえ、小娘は天生牙では救えぬ。

従つて妾わいわが冥道石を使い小娘を蘇生させた。

冥道石も天生牙と同じだ。

唯一度きりしか使えぬ。

その事、しかと忘れぬよう愚息に釘を刺しておいた。

小娘が生き返つた時、殺生丸め、必死に無表情を保とうとしていたのであるが。

フツッ、あんなにも一心に小娘を見詰めておつたのでは、そなたの思い、誰に云わずとも知れようぞ。

どうやら、殺生丸は父親と同じ道を歩むらしい。

人間の女に心を奪われたようだからな。

とは云うものの、あれは、まだ『女』とも云えぬ童女、鳥たとに喩えれば難ただぞ。

それも尻に卵の殻をくっつけておるような生まれたての・・・な。
あれでは殺生丸の相手になるには、どう少なく見積もっても、たっ
ぷり数年は掛かるう。

マア、執念深い我が息子殿のことだ。

その時が来るまで、只管ひたすら、『忍』の一字で耐えるのであろうよ。

ククツ、あのどうしようもない朴念仁がな、想像するだに笑わせて
くれる。

暫く逢わぬ間に何とも面白みのある男に育ったものよ、殺生丸。

二百年の無聊ぶじょうを一気に慰めてくれたぞ。

実に楽しませてくれるわ。

フフ・・・これだから愚息の行状を追跡するのは止められぬ。

さて、その後、あ奴らは、どうなったかな？

“遠見の鏡”を覗いてみれば、ヤヤツ、あれに見えるは死神鬼では
ないか！？

まだ生きておったのか、あの男。

鬪牙に冥道残月破を奪われ、頭を半分程も吹き飛ばされたというに。

『愚息行状観察日記？』御母堂さま』に続く

(5) 死神鬼(ししんき)

怪しげな童子に誘われるまま殺生丸一行が導かれたのは獣も見かけぬ深山幽谷。

切り立つ岩肌、生い茂る松。

まるで海の彼方の外国を思わせる水墨画のような風景が広がっている。

そこで繰り広げられるは冥道残月破同士の応酬。

アア、だが、些か愚息の分が悪いな。

殺生丸の冥道は死神鬼の冥道に吸収されてしまった。

マツ、仕方あるまい、冥道残月破は、元々、死神鬼の技だからな。

いうならば本家本元、さしずめ愚息は分家かな。

殺生丸の冥道は大きい但未だ不完全。

真円を描いてはおらぬ。

それに引き換え死神鬼の冥道は小型ではあるが完全な真円。

ムッ、新手が駆けつけてきたぞ。

ンンッ、炎のような真紅の童水干、あれは火鼠の衣ではないか。

成る程、あれが鬪牙の・・・。

側に冥加もおることだし間違いないな。

そうか、あの半妖が殺生丸の腹違いの弟か。

名は確か・・・犬夜叉とか申したな。

他の者は人間か、イヤ、子狐妖怪が一匹、紛れ込んでおる。

それに猫又も一匹。

フム、あの様子では殺生丸の奴、満更、半妖の弟を知らぬ訳でもないようだな。

あれの性格と父親の死に到る経緯を考え併せると、どう転んでも兄弟仲良くとはいかぬだろうて。

半妖も腹違いの兄を立てるような性格とは思えん。

相当、利かん坊の顔をしておるしな。

死神鬼が半妖に向かつて冥道残月破を放った。

ホオ、一旦、かわ躲して鉄碎牙で風の傷をお見舞いか。

半妖とはいえ、流石に鬪牙の息子だな。

鉄碎牙を使いこなしておる。

オオツ、殺生丸の奴、又しても冥道を打ち消されたぞ。

こうなつては手の打ちようがないな。

どうする、殺生丸？

このままでは見す見す死神鬼の餌食えじきだぞ。

何やら、死神鬼と、こみいった話をしておるようだな。

殺生丸の表情が苦悶に満ちておる。

ムウ、大方、天生牙が鉄碎牙から切り離された刀だとも教えているのだろう。

チツ、不味いな、あれ程、矜持の高い殺生丸には、かなり酷な事実。

死神鬼め、要らぬ世話を焼きおつて。

自棄やけを起こしたか、殺生丸？

死神鬼の攻撃を避けようとせぬ。

ホツ、半妖の弟が兄を庇つて風の傷で冥道の軌道を逸そらしおつたわ。

だが、今の殺生丸に取つて半妖の異母弟に庇われることほど腹立たしいことは有るまい。

やはりな、半妖を殴り飛ばしおつたわ。

完全な八つ当たりではあるが、あ奴の心情を思うと怒る気にはなれんな。

アア、殺生丸め、完全に堪忍袋の緒が切れたな。

一気に死神鬼の冥道を掻い潜り己が爪で決着をつける積りだ。

死神鬼め、事ここに及んで、遂に固め撃ちをしてきおつた。

一発だけならかわ躲すのも、そう難しくはないが、あれだけ同時に何発も撃たれては！

如何に殺生丸が駿足を誇るつと？まつたら最後、冥道に呑み込まれてしまうぞ。

ンツ、あれは蚤妖怪のみの冥加ではないか。

何やらゴチャゴチャと弁明しておるようだが、無駄なこと。

最早、殺生丸は聞く耳を持つまい。

あ奴は『退く』という事を知らぬ。

所謂、猪武者いのししむしやという奴だな。

フウツ・・・困ったものよ。

いずれ西国を背負つて立つ大将たる身でありながら駆け引きの『イロハ』も使えぬとは。

襲い掛かる冥道を避けつつ死神鬼に迫る殺生丸。

ムツ、左袖部分が冥道に呑み込まれたか。

しかし、不幸中の幸いだな。

どういふ事情でああなつたかは知らんが、殺生丸は隻腕、左腕は既に失われておる。

被害は着物の左袖のみに止とどまった。

勢いのまま死神鬼の懐に飛び込み仮面を被つた奴の顔に一撃を叩き込む殺生丸。

死神鬼の仮面が吹っ飛んだ。

残った顔にも無残なひび割れが生じておる。

それにしても不気味な奴だな、死神鬼は。

血が一滴も出ないとは・・・。

あ奴、本当に生き物なのか！？

妙に作り物めいておる。

死神鬼が渾身の力を込めて冥道残月破を撃つた。

下がれ、殺生丸！

このままでは冥道に呑み込まれるぞ。

流石に兄を見殺しには出来んようだな。

半妖が殺生丸の加勢に入りおつた。

何っ、あの技、金剛槍破ではないか。

鬪牙の盟友、宝仙鬼の技。

ということほだ、半妖は、あの技を宝仙鬼から譲り受けた訳だな。でなければ、あの技を、金剛槍破を使えるはずがない。

だが、冥道残月破には効かぬ。

冥道は冥界に通じる技、現世の物は悉く呑み込んでしまう。
殺生丸と半妖の弟に迫る何発もの冥道。

イカン、数が多過ぎて逃げる隙間さえ見当たらぬ。

このままでは兄弟ともども冥道に呑み込まれてしまうぞ。

と思いきや、何、鉄碎牙と天生牙が共鳴しておるではないか。

殺生丸が何かを吹っ切ったらしい。

天生牙を抜き放ち死神鬼に向けて思いつ切り振り抜いたわ。

すると、オオツ、特大の冥道が死神鬼の頭上に出現した。

それも完全な真円を描く冥道が。

特大の冥道に死神鬼の小型冥道が呑み込まれていく。

それどころか死神鬼までもが周囲の岩石と一緒に吸い込まれ呑み込まれていった。

虚空に消え去った冥道。

後に残ったのは巨大な鎌でスパッと刈り取られたかのような奇妙な岩山の風景。

アチコチに死神鬼によって穿たれた丸い穴が残っている。

殺生丸が立ち去っていく。

左の振袖が肩の下あたりまで冥道に呑み込まれ短くなっておる。

危なかったな、殺生丸。

死神鬼の冥道が、もう一尺（約30cm）ほどズレておいたら、そなたの命は無かっただろう。

天生牙が鉄碎牙の一部と知った今、そなたは何を考えておる、殺生丸？

『愚息行状観察日記？』御母堂さま』に続く

(6) 母の思惑(おもわく)

流石に気になつてな、そのまま愚息の動向を覗き見ておつた。するとな、あ奴、何を思つたのか、万年、火を噴く火山に足を向けおつたのだ。

そのような場所に何があるのかと思つたら・・・。

あれは、刀々齋ではないか。

成る程、あ奴か。

鉄碎牙と天生牙を打ち起こした希代きだいの刀匠。

当然、鬪牙から詳しい内情を聞かされておつたであろうな。

にも拘らず、殺生丸は刀々齋から何も知らされておらなんだと。

フムフム、それで烈火の如く怒り狂つて刀の生みの親に苦情を申し立てにきたという訳だ。

あれもエラクすつ惚とほけた男だからな。

さぞかし生真面目な殺生丸は鶏冠とんかに来ようて。

オゝオゝ怒つておる、怒つておる。

今にも口から火を吐きそうじゃ。

とは云つても、やはり、まだまだ青二才だな。

老獺らつかい極まる刀々齋を完全にやり込めるまでには至らん。

あ奴は相当な喰わせ者だからな。

最後にもう一度、面当てのように冥道残月破を喰らわせてから火山を立ち去る殺生丸。

さてさて、この後、傷心の息子殿は何処へ行くお積りなのかな。

ムツ、先程から筆頭女房の松尾が妾めかけを呼んでおる。

ンツ、筆頭女房の松尾は誰かとな？

松尾はな、昔、妾めかけの乳母めのとをしておつた女でな。

俗に言う『育ての母』という奴だな。

それもあつて妾めかけでさえ、面と向かつてアレに逆らうのは難しい。

仕方がない、一時ほど此の場を離れるとしようぞ。

この城の主としての仕事が待っておる。

それだけではない、妾は西国にも睨みを利かせねばならん。

有能な留守居役が目を光らせているとはいえ、かれこれ二百年も国主不在の状態が続いておるからな。

図に乗った鼠どもが次第に我が物顔にのさばり出してきおった。

「獅子、心中の虫」という奴だな。

チヨロチヨロと妙な策動ばかりしおって小煩くて堪らん。

彼奴らを叩き潰すのは容易いが、それでは、殺生丸の為にならん。

それ故、今は、鼠どもをそ知らぬ顔で泳がしておる。

留守居役の者にも、その旨、シツカと伝達してある。

鼠退治は西国に帰還してからの愚息の仕事ぞ。

さぞかし大捕り物になろうの。

獲物は太らせてから仕留めるが最上というし。

アレが、どのように大鼠どもを捌くのか、お手並み拝見よな。

とは云うものの、今はそれよりも、殺生丸が天生牙を、イヤ、冥道

残月破をどうする積りなのか？だな。

妾が鬪牙から聞いておるのは、殺生丸に冥道残月破を完成させ、そ

のまま技ごと天生牙と鉄碎牙を融合させるという仕儀。

ウ〜〜ム、まんま半妖の丸儲けではないか。

考えれば考えるほど殺生丸に取っては業腹な仕打ちよな。

かといって詳しい内情を教えてやる訳にもいかん。

殺生丸自身が決断し行動しなければ何の証にもならんからな。

そうでなければ、あの刀が出現せぬとはいえ……。

ホッ、鬪牙も随分と酷なことを考えたものよ。

アア、松尾が、また、妾を呼んでおる。

かなり痺れを切らしておるようだ。

仕方ない、では暫し、この場を離れる。

用を片付けたら、また戻ってくるでな。

待っておれよ。

『愚息行状観察日記?』御母堂さま』に続く

(7) 鏡の欠片(かけら)

待たせな。

さてさて、傷心の殺生丸はどうしていようか。

早速、覗いてみるとしよう。

ンツ、これは海だな。

ホオ、我が息子殿は海を前に絶壁で黄昏たそがれておるか。

フツ、青春じやのう。

悩め、悩め、悩み抜いた末に道が見えてくる。

ムツ、あ奴、何者ぞ。

巨大な折り鶴に乗って殺生丸の前に現われた若い男。

形なりから判断するに何処どこぞの若衆わかしゅ侍さむらいか色小姓いろこせいのような感じだな。

それにしても妙に胡散臭さを感じさせる奴だな。

如何なる目的で殺生丸に近付くのか。

あ奴の素性すじょうを知らぬ故、皆目、見当がつかん。

奴が現われるなり、殺生丸が冥道残月破をお見舞いしたということ

は、間違つても好意を抱いてはおらんな。

かといつて完全な敵とも思えんし、さりとて味方でもないようだ。

会話を交わしておる様子から判断して、一応、顔見知りといった程

度か。

何を話しておるのやら。

この“遠見の鏡”は見たいと念じた物を映うつす重宝じゆうほうな鏡だが、生憎、

音声までは伝わらん。

その点が不便といえば不便よな。

いつそ遠鼓えんこの精でも愚息の側に張り付けようか。

さすれば周囲の物音を残さず拾い上げられるのだが。

イヤ、それでは殺生丸に“遠見の鏡”を使用していると覺さとられてし

まうな。

そんな危険は冒おかせん。

止めておこつ。

オオツ、殺生丸が右手で若衆侍を串刺しにした。相当、癪に障ったと見えるわ。

しかし、敵もさるもの引つ掻くもの、分身の術を使っておった。

若衆侍の姿は掻き消すように見えなくなり、後には蓮の花が一輪、燃えて消え落ちた。

蓮の花は、あの若衆侍の幻術の形代か。

ンツ、殺生丸の手に残ったのは何だ。

ちと・・・見えにくい。

「鏡よ、もつと大きく見せよ」

狗姫が“遠見の鏡”に命じると映っていた部分がスツと拡大された。フム、あれは欠片だ、鏡の破片だな。

それを一頻り眺めた後、殺生丸が歩き出した。

表情が先程とは変わっておる。

何かを決したらしいな。

はて、何処へ行く積りなのか。

辿り着いたのは、半妖の弟と、その仲間達が野営を張る場所。

陽は完全に落ち、周囲は暗くなっておるからな。

我ら妖に不自由はないが夜目の利かぬ人間どもは不用心に動かぬ方が良い時分。

ンツ、以前、この城に連れて参ったあの小娘と小妖怪、小僧も一緒に居るな。

すると、殺生丸の奴、いきなり抜刀して半妖に闘いを挑んだではないか。

どうしようというのだ。

半妖も戸惑っておるようだ。

業を煮やしたか、殺生丸め、冥道残月破を喰らわしおった。

完成したばかりの真円の冥道残月破。

大した威力だな。

兄の本気を見せられ流石に覚悟したか。

半妖も鉄砕牙を抜き放つて応じてきた。

ムッ、半妖が鉄砕牙を振るつたが技が出て来んではないか。

何っ！？ 天生牙が鉄砕牙に変化した！

どういう事だ！？

そうか、あの若衆侍が鏡の欠片を殺生丸に渡したのは、これを狙っておつたのか。

あの鏡の欠片は相手の妖力をソックリ奪い取る力を持っているのだな。

まるで鏡に映したかのように。

鉄砕牙に変化した天生牙は、無論、鉄砕牙の妖力を全て奪い取っておるのだらう。

ンッ、先程の若衆侍めが折鶴に乗って、又してもしゃしゃり出てきよつた。

何をやる気だ。

若衆侍が瓢箪ひょうたんを手にシャカシャカと振つたかと思うと中身をバツと大きく円形に撒き散らしおつた。

オオッ、殺生丸と半妖が立っている周囲が地面ごと円形にザックリと抉り取られ、その場から消えた。

どうやら、抉り取つた部分を何処ぞ異次元の世界に飛ばしたらしい。あの若衆侍も用が済んだのかサツサと姿を消しおつたわ。

幻術か、それも相当な使い手だな。

だが、この“遠見の鏡”は見る者が『見たい』と念じた物を映す不思議の鏡。

異次元だとして、それは変わらぬ。

暫時、鏡は曇つたが・・・よし、映つたぞ。

これは、また、異様な場所だな。

周囲は奇妙な形をした妖怪だらけ。

空中には地面をすくい取つたような足場が幾つも浮かんでおる。

そして眼下はゴボゴボと泡を吹き出す瘴気の海。

そこで繰り広げられるは鉄砕牙同士の攻撃の応酬。

ホオ〜半妖の顔が妖怪化しておるではないか。
赤い目、牙、頬には妖線が一筋。

成る程、確かに鬪牙の息子だ。

風の傷、金剛槍破と刃を交えることに半妖の鉄碎牙に妖力が戻って
いく。

当然といえば当然だな。

元々、半妖の持つ鉄碎牙こそが本物。

さあ、どうする、殺生丸？

オオツ、遂に冥道残月破を撃つたぞ！

冥道に呑み込まれていく半妖。

この窮地を凌げぬようでは半妖に冥道残月破を受け継ぐ資格はある
まい。

それが判っているからこそ、敢えて殺生丸も冥道残月破を繰り出し
たのである。

『愚息行状観察日記？』御母堂さま』に続く

(8) 冥道の中の兄弟

巨大な冥道に呑み込まれていく半妖。

それを見て殺生丸が鉄碎牙に変化した天生牙を捨てた。

黒い冥道に引き寄せられ呑み込まれていく天生牙。

天生牙が冥道に入った瞬間、鉄碎牙が共鳴した。

ムツ、半妖の鉄碎牙が、また変化したぞ。

今度は刀身をビッシリと覆う緑色の鱗。

鱗の形状からして、あれは竜もしくは竜人の物だな。

どうやら、あれも半妖が会得した技と見える。

随分と多彩な技を駆使するものよ。

鬪牙が鉄碎牙を所持していた頃は風の傷と爆流破だけであったが。

ンツ、鉄碎牙が変化したと同時に妖気が。

あれは半妖の妖気だな。

中心に妖穴がある。

何と、半妖が己の妖穴を斬りおった。

一気に大きくなっていく半妖の妖気の渦つよ。

冥道が半妖の妖気に侵食されていくではないか。

この分なら半妖が冥道から脱出するのも時間の問題だろうと思った

矢先、背後から金剛石の槍が嵐のように襲いかかってきた。

半妖の背中に金剛石の槍が、二本、命中した。

鉄碎牙に変化した天生牙からだ。

天生牙も鉄碎牙と同じく鬪牙の牙から打ち出された刀。

謂わば鬪牙の分身と云ってもよい。

その刀が己が息子を害そうなどとする筈がない。

ということはだ、あれは、あの鏡の欠片を操る者の意思だな。

いかん、瘴気が金剛石の槍から放散された。

半妖の妖気が弱まっていく。

それを見て殺生丸が即座に動いた。

自ら冥道の中に乗り込んでいく。

弟を助ける積りか。

変化した天生牙を掴んだ殺生丸が大きく振りかぶった。

受けて立つ半妖の弟。

見かけはソックリ同じ鉄砕牙と鉄砕牙の打ち合い。

打ち合うのが兄弟なら刀までもが兄弟剣。

奇しき運命めいめいよな。

火花が飛び散るような激しい一撃。

その衝撃で殺生丸の刀を覆っていた鏡の欠片が掃はらわれた。

変化が解けた。

元の天生牙だ。

幅広の鉄砕牙と違い細身の美しい刀。

それが・・・折れた。

イヤ、あれは、わざと折りにいったな。

殺生丸の表情を見れば判る。

遣る瀬無さと惜別の情が緬な交まぜになった複雑な思いを宿す目。

そうか、殺生丸、冥道残月破を自ら半妖に譲るか。

覚悟の上で天生牙を折ったのだな。

そなたらしい、今、この場で、あの技を半妖にくれてやるとは。

天生牙が折れた途端、鉄砕牙が変化した。

今までに見たこともない黒い刀身、冥道残月破を取り込んだ鉄砕牙だ。

ンツ、半妖は瘴気にやられ気を失ったようだ。

あの瘴気は半妖の身には流石にきつかるうな。

ホッ、殺生丸が弟の背中に突き刺さった金剛石の槍を抜いてやりおった。

あれにも少しは兄らしいことが出来るのだな。

だが、半妖は目を覚まさない。

どうするのか？と思ったら、殺生丸の奴、すかさず半妖に一発喰らわしおったわ。

さしずめ、兄から弟に対する辛口の教育的指導とでも言えばよいのか。

妾には兄弟姉妹が居らぬので良く判らんが男兄弟とはああいうものなのか。

何とも、まあ、荒っぽいのう。

とは云うても兄弟揃って未だ冥道の中。

早く脱出せねば、そのまま、両名とも、あの世行きだぞ。

ほれ、もう身体が消えかけておる。

半妖が意を決して黒い鉄砕牙で冥道を斬った。

ヨシッ、冥道が下界に向けて開いたぞ。

ンッ、冥道から何かが落ちた。

光に煌めいて、あれは……。

半妖は気力・体力が限界にきておっいたらしいな。

転がるように冥道から落ちていく。

それに比べ殺生丸の方は悠然と何事も無かったかのように地面に降りていく。

何とも対照的な兄弟だのう。

刀々斎が殺生丸に何やら話しかけておる。

チッ、こういう時こそ会話を聞きたいのだがな。

だが、まあ、何となく推測はつく。

冥道から落ちてきた天生牙を持っていけどでも云うておるのだろうて。

不思議だな、あの時、折れたと思った天生牙が無傷で冥道から出て来るとは。

全ては鬪牙の望んだままに物事が推移したということかな。

でなければ天生牙が元通りのままの筈がない。

冥道残月破を鉄砕牙に譲った以上、もう天生牙に攻撃能力はない。

尤も厳密に云えば違うがな。

天生牙は、この世のモノこそ斬れぬが、あの世のモノは斬れるのだから。

刀々斎を無視してズンズン歩いていく殺生丸。
それを必死に追う小妖怪。

ンツ、あの小娘が天生牙を刀々斎から受け取ったぞ。
フツツ、それでよい。

そなたからなら殺生丸も天生牙を受け取るであろう。
いずれ天生牙が役立つ機会も巡ってこよう。

必ずしも敵がこの世のモノだけとは限らぬからな。
さて、それでは、仕事に戻るとするか。

明日、また暇を見つけて覗いてみるでしょう。
云っておくが、まだまだ愚息の観察は終わっておらんぞ。

『愚息行状観察日記？』御母堂さま』』に続く

(9) 松尾と権佐(じゅんざ)

あの男・・・やはり気になるな。

何故、殺生丸に関わるのか。

執務の合間に浮かんでくる疑問に“狗姫の御方”は独りごちた。

ここは天空に浮かぶ城、先の西国王妃の住いである。

因みに当代の西国王妃はいないというか存在しない。

当代の西国王、殺生丸が独身だからである。

というよりも問題は肝心要の当代が二百年前に西国を出奔して以来、未だ生国に戻ってこないことにある。

先代の鬪牙王は既に身罷って久しい。

当然、嫡子である殺生丸が当代として跡を継ぎ西国を統治するのが本筋である。

にもかかわらず、殺生丸は先代の逝去と、ほぼ時を同じくして西国を出奔した。

理由は先代が残した刀にある。

先代、鬪牙王の残した名刀、鉄碎牙。

その刀に並々ならぬ執着を示していた殺生丸は鉄碎牙の探索の為、遙々、人界にまで赴き今もそのまま留まっているのだ。

従って政務は、実質、西国の留守を預かる留守居役と王太后に当たる“狗姫の御方”によって為されてきた。

「仕方ない。あ奴を使うか」

狗姫は腹心の部下、松尾を呼びつけた。

「松尾！ 松尾はおらぬか！」

「お呼びにございますか、御方さま」

執務室の重々しい扉を開け人間なら三十台の半ばとも思える女が入ってきた。

結い上げた銀灰色の髪に緑の瞳、筆頭女房の松尾である。名前通り松の文様の打ち掛けをはおっている。

一見、伶俐な美貌の妙齡の女。

とはいえ妖怪である。

見た目通りの年齢であるはずがない。

狗姫自身、千年以上の齡よわいを経ている。

松尾は、その狗姫の乳母めのとを務めていた。

当然、狗姫以上の寿命を誇る。

乳母めのとであったせいか、松尾は、主である狗姫に遠慮なく物が言える数少ない存在でもある。

「松尾、権佐ごんざは、今度は、何時、来る？」

「今日辺りに。多分、あと一刻（＝約二時間）もすれば参りましょ
う」

「そうか、此度こたびは、あ奴に頼みたいことが有るのでな」

「御方さまが、直接、権佐殿に頼み事とは珍しゅう御座いますな」

「ちと、愚息の関係で気になることがあってな」

「はて、若さま、あいや、殺生丸さまのことに御座いますか」

「あ奴、人界で妙な男に絡まれておってな」

「妙なとは？」

「ウム、敵ではない。さりとて味方でもない。これがハツキリと断
定できぬのだ。それで、そ奴の素性を、一度、洗い出してみようと
思ってな。権佐が来たら、この執務室ではなく、直接、妾の部屋に
通してくれ」

「畏まりました」

狗姫と松尾の会話に出てきた権佐とは、西国城の庭全体を管理・統
轄している、お庭番の頭領である。

権佐は、顔が犬で、身体は人型の斑のぶち犬である。

茶色に黒、黄色に白と様々な色が混ざりこんだ毛色をしている。

その斑な毛色から通称を“斑の権佐”、妖界において三本の指に数
えられる凄腕の妖忍である。

殺生丸が西国を出奔して以来、二百年この方、天空の城と西国とを
足繁く行き来するのが権佐の日常となっている。

狗姫と留守居役との連絡役を果たしているのだ。

松尾の云った通り、一刻ほどして権佐が天空の城にやってきた。

西国城の留守居役からの書状を携えて。

主の言い付け通り、松尾が権佐を狗姫の私室に案内する。

「久しいの、権佐」

「御方さまには、ご機嫌麗しゅう」

「ああ、挨拶の前口上は良い。早速、本題に入りたい」

「御方さま、書状は、どうされます」

「そなたが預かっておいてくれ、松尾。後で読む」

「仰せのままに」

権佐から松尾が書状を受け取り、そのまま側に控える。狗姫が権佐に声をかけた。

「近う寄れ、権佐。そなたに見せたい物がある」

「ハッ、御前、失礼致します」

“遠見の鏡”を覆っていた布を狗姫が取り権佐に鏡を覗くように促す。

権佐が鏡を覗きこむと若い男の姿が映し出されていた。

「権佐よ、この“遠見の鏡”に映った男の素性を探つて参れ」

「はて、この若衆侍にございますか。場所は・・・妖界ではございませんな」

「その通りだ、権佐。こ奴、人界をほつき歩いている愚息に纏わり付いておつてな。それが敵とも味方とも思えぬ風情なのだ。実に胡散臭い。どうも気になつてならん」

「何と、若さま、イエ、殺生丸さまにですか」

「こ奴の背後関係も含めて綺麗に洗い出してくれ」

「ハハッ、承知いたしました」

「頼むぞ、権佐。出来るだけ早く知りたいのだ」

「御意ごい、しからば、これにて御免候ごめんこう」

探索に向かう為、退出した権佐は、すぐさま掻き消すように姿が見えなくなった。

『愚息行状観察日記？』御母堂さま』』に続く

(10) 四魂の玉

年中、霧が立ちこめる薄暗い場所に存在する瘴気の沼。

ビッシリと藻が蔓延り沼の水は不気味な緑色に濁っている。

水辺には沼の毒気にやられたのだろうか。

骨と化した動物の死骸が転がっている。

ゴボゴボ・・・ゴボツ・・・

澱んだ水の中から奇妙な物体が浮かび上がってきた。

ツルリと長大な禿げ頭、白い髭、長い耳、手には杖。

一見、七福神の寿老人を思わせるような容貌。

だが、決定的に違うのは、その身に纏う清浄とは言い難い饑えた瘴気。

光を通さぬ盲いた目、大きな耳。

そして、何よりも特徴的なのは老人の巨大な耳朶。

身体の半分以上もの長さがある。

「久し振りだな、耳千里」

濁った水の中から現われた奇怪な老人に権佐は声をかけた。

「“斑の権佐”か。さては奈落と夢幻の白夜のことだな」

「誰だ、それは」

「けへへ・・・権佐、お主の雇い主、西国の当代さまに絡んでおる輩よ」

「やはり知っておったか」

「ひよほほ・・・わしの耳はこの世のあらゆることを聞き取るからな」

「ならば話は早い。そ奴らについて詳しく聞かせてくれ。報酬はそちらの望むままに」

「要らぬよ。お主には借りがあからな」

「そうか、すまん、耳千里」

耳千里は旧知の仲である西国お庭番の頭領“斑まだらの権佐”に自分の知る限りのことを教えた。

四魂の玉の由来、奈落誕生の経緯いきさつ、それに奈落の分身、夢幻の白夜について。

知りたい情報を全て手に入れた権佐は耳千里に礼を云うが早い、即、西国へと取って返した。

目にも留まらぬ速さで権佐は、走る、走る、ひた走る。

一日を待たずして権佐は天空の城に帰り着いた。

門番は前まへ以もつて言付かっていたのだろう。

すぐさま、権佐を城内に通した。

そのまま、奥にある主の部屋に案内される。

部屋の中では狗姫と筆頭女房の松尾が待ち構えていた。

「ご苦労であったな、権佐。して首尾は？」

「上々にございます、御方さま」

「そうか、では、早速、聞かせてもらおう」

「ハイ、その前に、まず若さま、イエ、殺生丸さまが、あの若衆侍

と拘りを持つ切欠になった四魂の玉についてお話しねばなりません」

「四魂の玉？ アア、五百年ばかり前に、突然、人界に現われたという奇妙な玉のことか」

「その通りにございます。御方さまは、あの玉が人間の巫女と数多の妖怪の魂が混じり合って生じたという事は御存知でしょうか？」

「イヤ、それは初耳だぞ、権佐」

「これは某が、ある事情通より聞き出してきた話でございますが。四魂の玉は五百年前、人界が貴族によって支配されていた時代に忽然と出現しました。当時の人界は天変地異が相次ぎ人心著しく乱れ、所謂乱世でございますな。丁度、戦国と呼ばれる今の時代と良く似ております。そして、乱世には多くの低級妖怪どもが人界に現われます。それは御存知のように人界と妖界を隔てる結果が緩むからにございます。結界の緩みに乗じて人界になだれ込んだ低級妖怪どもは人間を襲って喰らい肥え太り、益々、数を増やし人の世を脅かしました。されど、人間達とて我ら妖怪に対して全く対抗手段を持たぬ訳ではありません。靈力に優れた僧侶、巫女、武士が妖怪退治に当たりました。その中でも翠子と申す巫女は極めて高い靈力を誇り一度に十体もの妖怪を屠る能力を有していたそうです。その靈力に怖れをなした妖怪どもは巫女を葬らんと画策し、巫女に懸想する人間の男に目を付けました。その男の邪心につけ込み男の身体を乗っ取り、男の魂を核に数多の妖怪が融合したのです。そして巫女と融合した妖怪との戦いが、七日七晩、続いたそうです。遂に力尽きた巫女が妖怪に喰われそうになった時、巫女は最後の力を振り絞って妖怪の魂を己が魂の中に取り込み、玉にして体外に排出して絶命。勿論、妖怪も巫女同様、死に絶えました。そして巫女が体外に排出したその玉こそが四魂の玉なのです」

「何とも壮絶な由来を持つ玉だな」

「仰せの通りです。そうした経緯いきざしから四魂の玉は、それを所有する者に強い力を与えます。その為、人間、妖怪を問わず多くの者が先を争って奪い合い所有者は転々と変わりました。最後に四魂の玉を所有していたのが桔梗という人間の巫女でございました。五十年前のことです。四魂の玉を浄化する為に退治屋の首領より預かっていたのです。この巫女に懸想した男がおりました。鬼蜘蛛という野盗にございます。尤も、こ奴が巫女と知り合った時、鬼蜘蛛は大火傷を負い足の骨が砕けて歩くことすら保まもならない状態でした。ですから巫女が情け心を起こして洞穴に匿かくまい世話してやったのでしよう。そこで更に事情をややこしくするのが巫女と当代さまの異母弟、犬夜叉殿が恋仲だったことです」

「あの半妖とか？」

「ハイ、そして、ここからが肝要でございます。一人の女に二人の男、世に言う三角関係という奴でございますな。しかし、鬼蜘蛛は、全身、醜く焼け爛ただれ歩くことすら出来ない身。通常なら諦めるしかないでしょう。しかし、この男の巫女に対する妄執は凄まじかったようです。その執念に妖怪どもが引き寄せられる程に。鬼蜘蛛は身動きさえ出来ない己が身を妖怪どもに差し出すことによつて巫女と自由な身体、それに四魂の玉を望んだのでございます」

「それで、そ奴の望みは叶ったのか？」

「叶ったとは申せませんな。鬼蜘蛛の魂を核に数多の妖怪が融合して奈落という半妖が誕生しました。この奈落が画策して、巫女と犬夜叉殿、双方に互いに相手が裏切ったと思わせ殺し合うように仕向

けました。巫女は死に犬夜叉殿は神木に封印されました。そして、どうした仕業か、四魂の玉が巫女の死とともに消えています。これが五十年前の出来事にございます。驚くほど奸智に長けた輩でございます。奈落という半妖は」

「したが、権佐、犬夜叉はピンピンしておるではないか」

「封印が解かれたのが、ごく最近なのでございます。不思議なことに犬夜叉殿の封印が解かれるのと同時に四魂の玉も五十年ぶりに出現致しました。しかし、その後、不測の事態により破魔の矢で打ち砕かれ何千何百と知れぬ欠片に分かれました。とはいえ、例え、ひと欠片でも、有する力は大きく妖怪も人も先を争って求める事態となっておりました。そんな中、先程も申し上げました半妖の奈落が散らばった数多の欠片を回収して、ほぼ完全な四魂の玉を所有しております。残る欠片は後ひとつ」

「その奈落とやらは四魂の玉を完成させて何がしたいのだ？」

「さあ、それは某には判りかねます。唯、奈落は殺生丸さま、犬夜叉殿と浅からぬ因縁がございます。特に犬夜叉殿とは亡くなった桔梗という巫女を巡って恋敵だったせいで両者の間には激しい怨恨の情が存在すると思われれます」

「殺生丸と奈落との関わりは？」

「当代さまの場合は鉄砕牙絡みにございます。殺生丸さまが二百年もの間、探し求めていた鉄砕牙の在処、これは犬夜叉殿の右目に隠された黒真珠に入り口がございました。当代さまは、それを突き止め、今は亡き父君の形見を手にされようとなりましたが、結界に阻まれました。あの刀は異母弟の犬夜叉殿に譲られた物にございますか

ら。されど、それに納得されなかつた殺生丸さまは、その場で変化され犬夜叉殿と闘われたのです。その際、犬夜叉殿に左腕を斬り落とされました。当代さまが隻腕なのは、そのせいです」

「何とまあ、殺生丸め、益体やくたいもない兄弟喧嘩で左腕を失ったか」

『愚息行状観察日記？』御母堂さま』』に続く

(11) りん

「左腕を失いながらも、尚、殺生丸さまは鉄碎牙を諦めようとはな
さいませんでした」

「そうだろうな。あ奴は一旦こうと決めたら、まず退^ひつとはせん。
トンデモモナイ頑固者だ」

「そんな当代さまに甘言をもって近付いたのが奈落にございます。
四魂の欠片を仕込んだ人間の腕を殺生丸さまに差し出し犬夜叉殿と
闘うように仕向けたのです」

「フム、奈落とやらの誘いに乗ったか。あれの性格なら面白い趣向
とでも思っただのであろう」

「左様にございます。しかし、その企みは犬夜叉殿に退^{しりぞけ}られ成功
しませんでした。そして、三度目、当代さまは竜の左腕を繋^{つな}いで挑
まれました」

「我が息子ながら実にしつこい奴だな。好い加減、諦めればよいも
のを」

「三度目は、遂に、犬夜叉殿が風の傷を会得されまして、まともに
喰らっていれば当代さまの御命は無かったでしょう。しかしながら、
この時は天生牙が初めて结界を張って殺生丸さまを守りました。当
代さまは瀕^{ひん}死の重傷を負われたものの御命だけは何とか取り留めた
のでございます」

権佐の話を聞いて狗^{いぬ}姫が溜め息を吐いた。

「ハア・・・本当に馬鹿息子だな。そんな事をしておったのか。呆あきれて物が言えん」

「天生牙は当代さまを闘いの場から少し離れた森の中にお連れしました。そこで殺生丸さまは、りんという人間の童女と出会われたのです」

「その小娘ならば知っておる。つい先日、あ奴が、この城を訪れた時に見た。冥道残月破の冥道を拓げる為に乗り込んできおつてな。その際、極めつけの人間嫌いであつたはずの殺生丸が人間の子供を二匹も連れておつた。何の間違いかと最初は思ったが。餌にでもするのかと殺生丸に訊けば即座に否定しおつた。ならば単なる気紛れかとも思つたのだが、それも違つておつた。小僧の方は確かに殺生丸に臣従しておつたようだが、小娘の方は・・・ム~~~~何と云えばよいのか。やはり、こう云うしかあるまい。あれは姫だ、殺生丸のな。肝心の小娘が幼すぎて、今はアアだコウだとは言えんが、ま
ず間違いなかるう」

「御方さま、それは真まことにございますか」

筆頭女房の松尾が驚いて口を挿はさんできた。

「ああ、十中八九間違ちがいない。近い将来、あの小娘は殺生丸の妻になるだろう。少なくとも殺生丸はその気だろうな」

「まあまあ、何とした事。若さまが、この城を御訪問なさつた時、不在だったことが悔やまれてなりません。松尾、一生の不覚にござ
います」

「アア、あの時、そなたは用があつて西国へ行つておつたな」

「もし、若さまが姫君をお連れしていると知つておりましたならば、不肖、松尾、万難を排してでも城に詰めておりましたものを」

「マア、そう落胆いたすな、松尾。いずれ逢う機会も巡つてこよう」

「コホン、話を続けてよろしゅうございますか」

権佐が女同士の話に割つて入った。

「ンツ、すまん、すまん。つつい内輪の話に夢中になった。続けてくれ、権佐」

「その童女を奈落が、イエ、配下の者が攫つたことが有るのです。目的は当代さまの力を取り込むことにありました」

「取り込むとな？」

「奈落は数多の妖怪の融合体、目を付けた妖怪を己が体の中に溶かし込み妖力を奪つのでございます。そうですね、判りやすく言えば文字通り『喰らう』のでございます」

「ホッ、さすれば奈落とやらはトンデモナイ悪食だな」

「無論、当代さまは奈落のような下賤げせんの輩に取り込まれたりはしませんでしたが。奈落の奴め、その腹いせからか、卑怯にも童女を自分の配下の者に殺させようとしたのです」

「成る程、それで殺生丸が奈落を仇と付け狙うようになったのだな」

「左様でございます」

「あの殺生丸が、そんな事をされて黙っているはずがない。あの小娘は殺生丸に取って今や天生牙よりも大切な存在なのだからな」

「おつ、御方さま、それは、どういう意味でございますか？」

松尾が狗姫の発した言葉に驚き疑問を投げかける。

「言葉通りの意味よ、松尾。先程も申したように愚息は冥道残月破の冥道を拓げるために、この城にやって来た。だから、妾は鬪牙から預かった、この冥道石を使って冥界の犬を呼び出したのだ。そうするように鬪牙から言付かっておったからな」

首から下げている首飾りの冥道石を手に狗姫が先日事情を知らない松尾と権佐に説明する。

「殺生丸の操る冥道残月破の冥道は痩せ細った三日月のような形だな。到底、真円からは程遠い代物だった。あれでは、あ奴が納得せぬのも道理。冥界の犬にも全くの効果無しだった。すると何を思ったのか、冥界の犬め、人間の子供を二匹とも呑み込んで冥道へと逃げ込んだのだ」

「それで、若さまは、如何されたのでしょうか？」

「フツ、殺生丸の奴はな、躊躇いもせず冥道に踏み込んでいこうとしおったわ」

「何とっ！」「」

「流石に妾も、それは予想しておらなんだ。だからな、一応、止めはしたのだ。だが、あ奴、妾に何と答えたと思う。『犬を斬りに行っただけだ』だぞ。ハッ、見え見えではないか。殺生丸が冥道に入っただのは断じて犬なんぞのせいではない。小娘を救う為よ。小僧は、まあ、ついでといった感じだったかな」

『愚息行状観察日記？』御母堂さま』』に続く

(12) 冥界の殺生丸

「それで、御方さま、冥界の犬に呑み込まれた子供達は、どうなったのでございますか？」

「いぬぎ狗姫の話聞いたせいだろうか。

松尾は、殺生丸が大事にしているという人間の童女の安否が、どうなったか気になるらしい。

「せ狗姫に話の先を続けるよう急かした。」

「殺生丸は冥界の犬を癒しの天生牙で斬り捨て子供達を救出した。だがな、小娘の息は間もなく止まってしまった。はかな無理もない。儂い人間の身、まして脆弱な雛鳥にも等しい幼子おさなごが冥界の邪気に耐えられるはずもない。そんな小娘に対し、小僧の方は、何故か冥界の中でもピンピンしておったな。生身の人間では、到底、有り得ぬことだ。不思議に思って、後で、その事について小僧に問い質してみた。すると四魂の欠片で命を繋いでいると申してな」

権佐がピクリと『四魂の欠片』という言葉に反応した。

「四魂の欠片・・・やはり、その人間の小僧も奈落と何らかの関わりがあるようすな」

「だろうな。そうでなくば殺生丸が傍に置くはずもあるまい。話を続けるぞ。息を吹き返さない小娘にさしもの殺生丸も、どうすればよいのか困り果てておった。そこへ冥界の常闇とこやみが押し寄せ小娘をかつ攫っていったのだ。冥界を支配する主ぬしの許へな。そうそう、あの時だったな、わい妾が冥道石を使って現世への道を愚息に開いてやったのは。なのに、殺生丸め、折角の母の親切を完璧に無視しおった。」

昔からそうだった。あ奴は本当に可愛げがない」

そこへ松尾が、すかさず合の手を入れる。

「御方さま、お腹立ちはご尤もですが、ここは話を先へ進めて下さいます」

「ム・・・判った。冥界の奥へ踏み込んだ殺生丸と小僧は、小娘を右手に掴んだ巨大な冥界の主を見つけたのだ。周囲は積み上げられた死人どもが山を成す荒涼たる風景でな。見るだに芬々（ふんぷん）たる死臭が漂ってきそうであった。冥界の主は小娘を死人の山に放り込む積りだったのだろう。それを見て取った殺生丸が素早く天生牙を抜き放ち冥界の主を腕ごと斬って捨てたのだ。天生牙に斬られたせいで冥界の主は消滅。小娘を掴んでいた腕も霞のように消え失せた。落ちてくる小娘は殺生丸が天生牙を握ったまま右腕で抱き上げた。あの世の使いどもの首魁である冥界の主を斬ったのだ。当然、小娘は目を開けるはずだった。なのに、一向に小娘は目覚める気配がない。これは流石に可笑しいと思つてな。殺生丸が連れていた小妖怪に訊いてみたのだ。もしかして小娘は天生牙で既に甦った事があるのでは？と。案の定、小妖怪の答えは妾が予測した通りであった。殺生丸は知らなんだようだな。天生牙で死者を呼び戻せるのは唯一度きりだと。どうあつても目覚めない小娘に絶望したのである。殺生丸が天生牙をポロリと取り落としおつた。刀の成長の為に冥界に踏み込んでおきながらな。取り落とされた天生牙は、そのまま冥界の地面に静かに突き刺さった。天生牙の刀身がボウと朧に光を放ち始めた。するとな、物音ひとつしなかつた周囲の死人の山が反応し始めたのだ。ザワザワと生きておるかのように蠢きだしたのだ。山が、イヤ、死人どもが地滑りのように雪崩れ込み、天生牙の周囲、つまりは殺生丸と小娘の周りを取り囲んだのだ。その様は、あたかも亡者どもが天生牙に縋っているかのようにあつたな。イヤ、

事実、縊っていたのであろう。救われない成仏したいと。その様相に何かを感じたのだろう。殺生丸が小娘を抱いたまま膝を折って天生牙を拾い上げ天に向けて掲げたのだ。一際、眩しい清浄な輝きが天生牙からあふれ出し昏い冥界くわいを照らし出し、それと同時に亡者どもが、その浄化の光に導かれ静かに消滅していった。あれこそ慈悲の光であろうな。亡者どもが完全に浄化されたと同時に冥道が開いた。以前の痩せこけた三日月とは明らかに違っていた。真円ではないが、それに近い形にまで広がっていた。そこから小娘を抱いた殺生丸と小僧が現世に戻ってきたのだ」

「それで、御方さま、童女は、どうなったのでございますか？」

「慌てるな、松尾、それを今から話す」

『愚息行状観察日記？』御母堂さま』』に続く

(13) 慈悲の心

「小娘を抱いて殺生丸は現世に戻ってきた。あ奴、見た目は無表情だったが、内心、腸が煮えくり返っておったろくな。出来るものならば泣き叫びたいくらい的心情だったろう。だが、小娘の死という不測の事態を招いたのが己である事は、奴自身、百も承知。従って妾を責めることもならぬ。フツ、己の不甲斐なさを怒りに摩り替えて今にも喰い殺しそうな目でコチヲを睨んでおったわ」

「御方さま・・・」

息子の苦悩を愉しんでいるような狗姫の言葉に松尾が責めるような目で見た。

言葉こそ発さないが権佐の心情も似たようなものらしい。両者の非難を物ともせず狗姫は話を続けた。

「そこで、まず、妾は殺生丸に天生牙の効力が一度きりだという事を教えてやった。あ奴は勘違いしておったようだからな。天生牙さえ有れば何度でも死人を呼び戻せると。そんな風に考えること自体不遜極まりない。命とは、殺生丸が考えるほど軽々しい物ではない。確かに我ら妖には唯人になんか力がある。されど万物を生み出す万能の神ではないのだ。殺生丸は命を軽々しく考えておったから、ああも簡単に他者の命を奪えた。それを深く憂慮したからこそ、鬪牙はあのような仕掛けを施しておいたのだらう。命を愛おしむこと、それを失う悲しみと怖れを殺生丸が知るように。それを知った時、初めて慈悲の心が生じる。天性牙は癒やしの刀。何時如何なる時であらうとも慈悲なくして振るってはならぬ。死人を呼び戻す時も敵を葬る時でさえもな。命の重さを知らぬ者に天生牙を持つ資格はないのだ。小娘の死によって殺生丸は骨身に沁みて感じたであろうよ。」

命の重さ、儂さ、慈悲の心の何たるかを」

「それで、御方さま、そのまま童女は息絶えてしまったのですか？」
今度は松尾の代わりに権佐が口を挟んできた。

「権佐よ、妾は、それほど薄情ではないぞ。正直、殺生丸の涙を見てみたい気がせんでもなかったが、あ奴は筋金入りの強情っ張り。期待するだけ馬鹿を見る。すると供の小妖怪が大泣きしおつてな。聞いてみれば主である殺生丸の代わりに泣いていると言っではないか。中々、見上げた僕根性だったな。そ奴の涙に免じて小娘の命を助けてやることにした」

「どうなさったのでございますか？」

童女の命を気遣う松尾が蘇生方法を狗姫に尋ねた。

冥道石を手に狗姫が説明する。

「この冥道石を使ったのよ。小娘は既に天生牙で甦ったことが有る身。他の方法でなければ効果がない。小娘の胸に冥道石を置いて冥界に置き去りにされていた命を呼び戻したのだ。（それにしても、あの時の光は尋常ならざる輝きだった。並みの人間の放つ光ではない。何なのだ。思い出す度に妙に気にかかる）」

「本当に良うございました。童女の命が助かって」

内心の疑問などおくびにも出さず狗姫は松尾に応えた。

「小娘が助かったのは良い。だがな、松尾、殺生丸の奴、小娘が目

を開けた途端、どうしたと思う？すぐさま、小娘の側に寄り添い頬をソツと撫でてやったのだぞ。その上、今まで聞いたこともないような優しい声で言葉まで掛けてやってな。あの朴念仁の殺生丸が、だぞ。信じられぬであろう。小娘を救ってやった妾には目もくれず、勿論、礼の一言もない。尤も、あの小妖怪が愚息の代わりに妾に丁寧に礼を述べはしたがな。ともかくだ、人間の小娘一匹に、あの大騒ぎ。全く、我が息子ながら妙な処が父親に似てしまったものよ。どうだ、これで判ったであろう。童女が殺生丸の姫だと云った妾の言葉。両名とも納得がいったか」

「「ハイ、確と」」

『愚息行状観察日記？』御母堂さま』に続く

(14) それぞれの意図

頷いた松尾と権佐に向かい狗姫は話を続ける。

「とまあ、以上が、先日、この城を殺生丸が訪問した際の事の顛末だ」

「それで御方さまは暇を見つけては“遠見の鏡”で若さまの動向を探っていらつしやったのですね」

松尾が空かさず狗姫の行動を指摘した。

「まあな、この二百年、これといった動きがなかった殺生丸が、やっと本格的に動き出し始めたのだ。物事は、一旦、動き出すと坂から石が転げ落ちるように次々と動き出す。これは目が離せぬと、ここ最近、愚息の行動を覗いておったのよ。さすれば、この城を辞去した直後、今度は死に損ないの死神鬼が、殺生丸に絡んできおったわ。大方、鬪牙への怨みを息子である殺生丸に向けて晴らす積りだったのだろうが、お門違いも甚だしい。死神鬼め、殺生丸を甚振る為だろう。天生牙が鉄砕牙から切り離された刀だと暴露しおったわ。お陰で殺生丸が鬪牙の真の意図に気付いてしまった。冥道残月破を完成させた上で天生牙を鉄砕牙に吸収させるといふ、アレに取っては屈辱的な目論見をな」

「若さまは、さぞかし憤っておられましたでしょうなあ」

「まあな、松尾。アレの矜持は昔から高すぎる程に高かったからな」

「それで、御方さま、殺生丸さまは、その事実を知って、どう決断

されたのでしょうか」

「権佐よ、アレの気性を熟知しておるそなたなら、殺生丸が、どうしたか予測がつくであろう」

「ということは、冥道残月破ごと、そっくりそのまま弟御に天生牙を……」

「その通りだ。いずれ手離さねばならぬモノなら、もう一時も手許に置きたくなかったのである。例え、それが、どれ程の辛苦の果てに会得した技であろうと……な」

「当代さまは、文字通り、苦渋の決断をされたのですな」

「誰よりも誇り高い若さまらしゅうございます」

権佐と松尾が、各々（おのおの）感じたままを言葉にする。

兩名とも殺生丸が幼い頃から仕えてきた生え抜きはの家臣である。

その分、殺生丸に対する思い入れも強い。

「それでな、とどのつまり、冥道残月破は半妖の弟が持つ鉄碎牙に吸収された。だが、何故か、不思議なことに天生牙は鉄碎牙に吸収されず“癒やしの刀”として残ったのだ。まあ、それは別に構わん問題は、殺生丸に絡んできた妙な男の事だ。そなた達も“遠見の鏡”で見たであろう、あの若衆侍。彼奴きやつの敵とも味方ともつかぬ態度それが気になって権佐に調べさせたのだ」

「御方さま、あの者は“夢幻の白夜”と申しまして奈落の手の者にございます」

「それは真か、権佐」

「ハイ、しかも、“夢幻の白夜”は奈落の分身にございました」

「分身とな？」

「ハッ、先程も御説明申し上げたように奈落は数多の妖怪どもの融合体。次から次へと妖怪を喰らい己が身に取り込んで力を増幅させてきました。それが、先頃、ほぼ完成に近い四魂の玉を手に入れたからは、今度は分身を生み出すことまで出来るようになったのです。とはいえ、これまで生み出された分身は大半が犬夜叉殿に倒され、残りは奈落に殺されるか吸収されたりしました。今現在、残っているのは“夢幻の白夜”のみです」

権佐の話に疑問を感じた狗姫が口を挟む。

「権佐よ、奈落の分身を半妖が倒すのは判るが、何故、奈落が己の分身を？」

「分身だからこそでございます。奈落は猜疑心が強く誰であろうと容易に信用しません。そして、非常に用心深い。おまけに、この上なく奸智に長けております。犬夜叉殿の例を見れば判るように一筋縄ではいきません。二重・三重の罠を張るといって怖ろしく巧妙な手口を駆使します。策を弄し他者を陥れることを何とも思わぬ輩なのです。弱者を嘲笑い強者に阿り、裏切りを常とする、それが奈落です。そうした奈落の気質を色濃く受け継いでいる分身です。相手が何者であろうと隙あらば何時なりと襲いかかってきましょう。本体だけは裏切らないという保証がどこにありますでしょうか。奈落自身が、その危険性を、誰よりも知り抜いております。だからこそ自ら手を下し保身を図るのでございましょうな」

「成る程な。では奈落なる輩は殺生丸を使つて半妖を殺させる積りだったのだな。イヤ、下手をすると殺生丸もろとも兄弟の相討ちさえも企んでおつたのだらう」

「何とつ!？」

権佐と松尾の両名が衝撃を受け驚きの声を発した。

「半妖と闘う前に、奈落の分身である、その“夢幻の白夜”とやらが殺生丸に妙な鏡の欠片を渡しおつたのだ。当然、奈落の差し金だらう。その鏡の欠片はな、敵の妖力を、そうさな、まるで鏡に映したかの如く奪い取ることが出来るのだ。その欠片を纏つた天生牙は半妖の持つ鉄碎牙と見た目は全く同じに変化した。無論、鉄碎牙の技ごと奪つてな。兄弟同士の争いを見かねた者達が必死に闘いを止めさせようとしたのだが、そこへ、その若衆侍、奈落の分身が現われてな。頼みもせぬのに殺生丸と半妖を異次元に移動させたのだ。兄弟で殺し合わせる為にな。だが、事は奈落の思惑通りには運ばなかつた。殺生丸は半妖を殺さず冥道残月破は首尾よく鉄碎牙に吸収された。全て鬪牙の望んだままにな。後は、あの刀が出現するのを待つばかりよ」

『愚息行状観察日記?』御母堂さま』に続く

(15) 曲靈(まがつひ)

狗姫いぬぎの言葉に権佐と松尾の両名が反応した。

「では、やっと・・・」

「若さまの悲願が・・・」

両者の言葉に狗姫が頷き言葉を繋いだ。

「とはいえ、何時、現われるのかは、まだ判らん。だから、この“遠見の鏡”でズツと探っておるのだが。どうやら殺生丸が冥道残月破を失ったことは瞬またたく間に妖怪どもに知れ渡つたらしい。『悪事、千里を走る』とは良く云つたものだ。ここ数日、功名心に駆られた雑魚妖怪どもが引つ切り無しに殺生丸に挑んできよるわ。愚息の命と小僧の四魂の欠片を狙つてな。宛あたかも死骸たかに集る蠅はえのようだ。煩いことよ」

掛け布を取り払い“遠見の鏡”を覗いた狗姫が声を上げた。

「何だ、こ奴は!？」

権佐と松尾も“遠見の鏡”を覗き込んだ。

鏡の中、殺生丸と男が対峙している。

奇妙な感じを与える男である。

容貌は、まず腰まである長い白髪、頬には一筋の妖線、何本もの妖線が走る腕、赤い瞳。

そして、何より、三白眼から発散される強烈な悪意が見る者をしてたじろがせる。

見た目は人型であるが右腕は三本の大きな鎌のような形状に変化した触手。

明らかに妖怪である。

三白眼の男の鎌状の触手が伸びてきた、瞬時に。

殺生丸の後方に控えていた人間の小僧を目掛けて。

小僧は双頭竜に飛び乗り、乗っていた小娘ともども空中に逃げ難を逃れた。

更に小僧を狙おうとする男に殺生丸が挑みかかる。

岩をも砕く爪を武器にして。

だが、俊敏さを誇る殺生丸の攻撃さえ軽く躲す三白眼の男。

それだけではない、隙を見て殺生丸の妖鎧に触手で穴を開けたではないか。

物音が、一切、伝わらないので何を云っているのかはサツパリ判らないが、あの男の様子、明らかに殺生丸を（あざけ）っておる。

この手の挑発に殺生丸が黙っているはずがない。

案の定、殺生丸は鎌状の触手を爪で薙ぎ払って懐に飛び込み男の胸元深く右手を突き入れた。

ヨシッ、これで三白眼の男は仕留めた。

心の臓を抉った上に殺生丸の毒を流し込めば如何なる敵といえども一溜まりも……。

何とっ!？

あの男、胸元を貫かれているというのに苦しそうな顔ひとつ見せん。それどころか薄気味悪い笑みさえ浮かべておるではないか。

ムッ、三白眼の男の両腕が変化した!

片腕が三本、両腕にして六本もの鎌状の触手に。

六本の鎌が蠅螂のように殺生丸を挟み千切り殺そうと狙う。

フウッ、間一髪、逃れたぞ。

だが、殺生丸の右腕が焼け爛れているではないか。

三白眼の男の胸元深く埋められていた右腕。

本来なら殺生丸の猛毒に侵されて奴は内部から溶け落ちるはず。

にも拘らず、三白眼の男は溶けるどころか逆に殺生丸の右腕に損傷を与えた。

ということは・・・あの男の毒の方が殺生丸の毒よりも強いというのか。

この眼で見たのでなければ信じられなかっただろうな。

妖界でも屈指の毒性を誇る化け犬が毒負けするなど。

一体、あ奴は何者なのだ？

またも鎌状の触手が殺生丸を襲う。

右肩を覆う毛皮が大きく抉られ焼け焦げた。

奴の狙いは殺生丸の右腕だな。

殺生丸は隻腕だ。

右腕さえ封じてしまえば戦闘能力を失う。

主の危機を見かねたのか人間の小僧が空中から三白眼の男に攻撃を

仕掛けた。

小僧が投げた鎖鎌が男の頭にめり込む。

しかし、三白眼の男は痛みを感じておらぬのか。

全く意にも介さんようだ。

寧ろ、顔の周りに飛び交う小虫風情にしか感じておらぬだろう。

小僧、何をする気だ？

無謀にも小僧が双頭竜から跳び下りおった。

何か勝算でもあるのか。

あれでは三白眼の男の格好の餌食になるだけではないか。

鎌状の触手が伸びて小僧の項付近に突き刺さった。

大方、四魂の欠片とやらが埋め込まれている場所だろう。

邪気にやられたのか。

小僧がガクリと項垂れた。

チツ、小僧め、余計な真似をしおって。

小僧を救う為に殺生丸が動けば否応なく隙が生じる。

そこに敵が乗じてくる。

アアッ、言わぬことではない。

小僧に伸ばした殺生丸の右腕が串刺しに！

「若さまっ!!」

「殺生丸さまっ!!」

両脇の松尾と権佐が悲鳴のような声を上げる。

無理もない。

あ奴が、ここまで追い込まれるところなど今まで一度も見ることが無いからな。

無残だな、三本もの触手が右腕に突き刺さっている。

それにしても、あの三白眼の男の体は、どうなっているのだ？
触手が見る間に大きく広がっていくではないか。

まるで体内に何体もの妖怪を隠し持っているかのようなのだ。
通常の妖怪では有り得ぬことだ。

この危機的状況を、どう乗り切る、殺生丸!?

『愚息行状観察日記?』御母堂さま』』に続く

如、鮮やかな紅くれないの衣ひるがえが翻ひるがえった。

次の瞬間、懐かしい幅広やいばの刃やいばが男の絡みつくような触手を断ち切っていた。

鉄碎牙、今は亡き夫、鬪牙の牙から打ち出された刀。

それを軽々と振るう生意気そうな顔こわっばの小童。

殺生丸と同じ白銀の髪、金色の瞳が両者の血の？がりをマザマザと見せつける。

「御方さま、あの火鼠ひねずみの衣は・・・」

松尾が声を発する。

「そつだ、松尾。あの半妖こわっばの小童が殺生丸の弟、鬪牙のもう一人の息子、『犬夜叉』だ」

兄を助けに来たのか、半妖。

半妖の仲間、人間どもも駆け付けてきたな。

相對する兄弟、だが、殺生丸は半妖の弟に助けられたのが不満のようだ。

フム、気合で腕の傷ふたを塞ふさぐか。

ムツ、殺生丸の目が赤くなった。

変化する積りだな。

そこまで追い詰められているのか。

殺生丸が右腕で攻撃すると見せかけ、一気に巨大な化け犬の本性を頭あたまにしおった。

そして、そのまま男の頭部を喰いちぎった。

当然、これで男は絶命すると誰もが思っただろう。

だが、男の体からは見るだに濃厚な瘴気が溢れだし周囲に充満する。あの瘴気の濃度、到底、か弱い人間どもの身では耐えられまい。やはりな、人間達が堪らず空中に逃げ出した。

法師は気絶した小僧を連れ小娘とともに双頭竜に騎乗。

女退治屋は同じく気絶した巫女を乗せ子狐妖怪と一緒に猫又に。

首を？がれた体から何本もの極太の触手が生えてきた。

通常ならば殺生丸に首を噛みちぎられた時点で男は死んでいる筈。にも拘らず、三白眼の男は生首だけで生きて今も何か喋っているらしい。

化け犬に変化した殺生丸の口中に銜えられたままの状態だな。

クツ、音声が拾えないのが悔やまれてならぬわ。

それにしても実に不気味な存在だな。

あ奴には痛覚が無いのか。

殺生丸の牙が顔に喰い込んでいるというのに。

薄気味の悪い笑みが貼りついたように消えない。

極太の触手が何本も大挙して半妖に襲いかかる。

宝仙鬼から譲り受けた金剛槍破で迎え撃つ半妖。

しかし、金剛石の槍は標的を貫くことなく虚空に飛び散った。

不気味な触手だらけの体は宙に浮かび半妖の攻撃をやり過ごしたのだ。

そのまま触手は覆いかぶさるように化け犬の殺生丸に巻きつきギリギリと締め上げている。

銜えられていた生首までもが変化し触手が生え出した。

今しも殺生丸の牙から逃れ口から這い出ようとしておる。

獲物を離すまいと殺生丸がグツと力を込めて噛みしめる。

だが、殺生丸の牙が、どれほど深く喰い込もうと、生首は一向に痛痒を感じておらぬようだ。

あの男、本当に生き物なのか？

触手に締め付けられる兄を助けようと半妖が鉄砕牙を振るおうとする。

しかし、あの生首が殺生丸に絡みついておっでは手も足も出せぬ。チツ、一難去つて、また一難か。

奴め、このまま殺生丸を絞め殺す気だな。

殺生丸に巻きついた触手が更に数を増し完全に愚息を覆いつくしてしまった。

殺られたか！？

イヤ、そうではない。

流石に形勢不利と見て取ったのだろう。

変化を解いた殺生丸が人型に戻り、辛くも触手地獄から脱出した。

フウツ、冷や冷やさせおるわ、頑固者め。

松尾も権佐もハラハラしながら状況を見守っておる。

だが、こうまで追い込まれながらも、殺生丸は、やはり殺生丸だった。

退く気など一切皆無。

またしても触手だらけの化け物に向かつていきおる。

爪で触手を薙ぎ払えるだけ薙ぎ払うが、如何せん、数が多過ぎる。

それ見たことか、アツという間に触手に絡め取られかけた。

半妖が、それを見て急いで触手を斬り落とし兄に助太刀する。

ムツ、鉄碎牙の刃の色が黒く変わった。

遂に出すのか、半妖、殺生丸から譲り受けた冥道残月破を。

だが、『敵も然る者、ひっかくもの』ぞ、半妖の行動に即座に対応してきた。

瞬時に自らの操る体を四方八方に分散させたのだ。

あれでは冥道残月破は撃てん。

仮に撃つたとしても殆ど効果がない。

不味いな、このままでは各個撃破するしか道がないではないか。

そんな状況下にあつて殺生丸が動いた。

まず小娘が乗っている双頭竜を狙った触手を爪で薙ぎ払った。

フム、やはり、そなたの姫を庇うか、殺生丸。

その上で先陣を切つて飛散した妖怪の体をつ切り、人間どもを一

箇所に寄り集めさせた。

成る程な、これならば同士討ちはない。

次はどう動くのかと思ったら、何と、殺生丸の奴、そのまま空中に浮かぶ生首に突っ込んでいくではないか。

無謀だ、殺生丸、あの男にはそなたの爪も毒も利かん。

見す見す死に行くようなものだ！ 戻れっ！ 殺生丸！！

『愚息行状観察日記？』御母堂さま』』に続く

(17) 爆碎牙の出現

宙に浮かぶ生首めがけて突っ込んでいく殺生丸。
有象無象の触手が愚息を搦め捕らんと一斉に蠢き出す。

それらを躲し生首の近くに辿り着いた殺生丸が思いもかけない行動を取った。

天生牙を抜いたのだ。

冥道残月破を鉄碎牙に譲った今、天生牙に攻撃能力はない。
有るとすれば、それは、あの世の者を斬る能力。

そうか、あの生首の男、この世の者ではないのだな。
殺生丸が天生牙で虚空を斬り裂いた。

オオツ、現われたのは憎悪に燃える巨大な顔。

天生牙に斬られて左目が傷付いている。

あれこそが生首の本体なのだろう。

すると、あ奴は生身（なまみ）を持たぬ悪霊なのだな。

だからなのか、操っている体が、どんなに破損しようと些かも堪えなかつたのは。

尚も悪霊を天生牙で攻撃しようとする殺生丸。

だが、敵は、それを阻もうと触手で即席の防御壁を作り出す。

分厚い防御に攻撃を弾かれる殺生丸。

天生牙に現世のモノは斬れない。

悪霊は瞬時に天生牙の弱点を見破り手を打ってきた。

グウツ、前と後から、極太の触手が、妖鎧を打ち破って殺生丸の胴体を串刺しに！

「ヒツ、若様！」

「殺生丸さまっ！」

松尾がこらえ切れずに小さな悲鳴を漏らす。
権佐も信じられぬとばかりに声を上げる。

我ら化け犬一族は心の臓を傷つけられぬ限り、命に別状はない。
だが、如何に強靱な体力を有する化け犬といえど、あれほどの重傷を負って平気なはずがない。

殺生丸を串刺しにした二本の触手に加えて他の触手がグルグルと覆い被さるように巻きつき、完全に殺生丸の姿が見えなくなってしまった。

兄の惨状に堪らず半妖が飛び出し、猫又に跨って悪霊の生首を両断する。

半妖は飛べぬからな。

そのまま半妖は猫又から触手の塊の上に跳び下りた。

怒り狂って鉄砕牙で触手を斬りまくる半妖。

そうこうする内に切断された悪霊の生首が修復され元に戻った。

何とも憎々しい、その表情。

悪意に満ちた嘲りの言葉が鏡のこちら側にいる我々にまで聞こえてきそうだ。

触手が半妖を捉えた。

このまま兄弟揃って悪霊の餌食になってしまうのか。

そう思った次の瞬間、光が！

殺生丸を覆いつくしていた触手の塊の中から強烈な光が溢れ出した。稲妻のように眩しい光が触手を切り裂いて四方に八方に拡がっていく。

破壊された触手の中から現われたのは・・・殺生丸！

妖鎧には二ヶ所も穴が開き毛皮は焼け焦げ着物の両袖は肩の辺りまで千切れている。

当然、右腕はむき出しで天生牙を握り締め、残骸の中、仁王立ちしておるわ。

惨憺たる有り様だな、殺生丸。

だが、とにもかくにも生きておる。

ホウツ・・・思わず知らず小さな安堵の溜め息が漏れたわ。
よもや、我が息子が、こんなことで死ぬとは思わなんだが、流石に
ヤキモキさせられた。

あれは何だ！？

半妖に左腕を斬り落とされて殺生丸は隻腕だったはず。

その失われたはずの左腕部分から激しく放電しているではないか。

バチバチと空中に走る電光の凄まじさ。

本当に音が聞こえるような錯覚を起こしそうだ。

ムッ、悪霊の後方に見覚えのある黒雲が出現した。

三つ目の妖牛に跨る惚けた顔の刀鍛冶。

そうか、刀々斎のお出ましか。

ならば、あれは・・・。

「松尾、権佐、よく見ておけ。いよいよ現われるぞ、殺生丸の刀、
爆碎牙が！」

“遠見の鏡”から目を離すことなく狗姫いぬめきは声を張り上げた。

上方から触手が四本、殺生丸を狙って今にも振り下ろされようとして
いる。

刀々斎が駆け付けてきたことに殺生丸も気付いたらしい。

殺生丸が無かったはずの左腕を鋭く振るった。

闇を切り裂く雷光のような輝きと共に凄まじい衝撃が殺生丸を狙っ
ていた触手に走る。

眩しい光の中、浮かび上がってきたのは細身の刀を握った殺生丸の
左腕。

刀身と柄をビッシリと覆い尽くす雷紋が刀の性質を物語る。

“爆碎牙”その名の通り爆発的な破壊力を秘めた殺生丸の刀。

殺生丸本人さえ知らなかった殺生丸の中に隠されてきた刀。

その破壊力の余りの凄まじさに父である鬪牙が封印した刀。

殺生丸自身に、爆碎牙を振るうに相応しい器量が、大妖怪としての

度量が生じるまで、存在その物が秘匿ひたくされてきた究極の破壊力を有する刀、爆碎牙。

その秘刀が、遂に失われた左腕とともに現われたのだ。

「長かったな、殺生丸・・・もう現われないのかと思ったぞ」

「御方さま・・・おっ、おめでとうございます」

松尾が目を潤ませながら寿いそぎを口にする。

「私からも・・・おめでとうございます」

権佐も感極まったのか上う擦ずる声で祝いの言葉を述べ頭を下げる。

「喜ぶのは、まだ早い。殺生丸は、まだ、あの悪霊を倒しておらんぞ」

そつだ、爆碎牙の出現を祝うには、まだ早い。

あの悪霊を倒さねばな。

爆碎牙の攻撃を受け浮力を失って地に叩きつけられる触手。

すると新たな妖怪どもが触手の残骸を取り込んで新たに合体しようとし始めた。

またしても融合して新たな触手が出現するのか？

何っ！ 何が起きているのだ！？

信じがたい現象が繰り広げられていた。

残骸を取り込んだ妖怪どもが悉いたく破壊されていく。

文字通り完全に塵ちりとなるまで。

そつか、爆碎牙は一度振ひるえば攻撃対象を再生不能なまでに破壊する。

更に、爆碎牙の攻撃を受けた残骸を取り込めば無傷の敵までもが同

様に破壊されるのだ。

何という怖るべき破壊属性を持った刀だ。

まるで神の怒りその物ではないか。

闘牙が嚴重に封印するはずだな。

あんな刀を以前の非情な殺生丸が持ったら破壊王にしかなれなかっただろう。

悪霊の生首を殺生丸が爆砕牙で斬り捨てた。

だが、本体は逃げおおせたようだ。

『愚息行状観察日記？』御母堂さま』』に続く

(18) 指示

殺生丸の新しい刀、“爆碎牙”に両断されて物騒な悪霊は消えた。生憎、本体のほうは仕留められなんだがな

ホホオ〜小娘と小妖怪が慌てて殺生丸に駆け寄りおるわ。

小僧と面妖な衣装の巫女は気を失ったままか。

そうだな、丁度よい、ここで両名に殺生丸の“姫”を覚えておくとするか。

「松尾、権佐けんさ、良く覚えておけ。この人間の小娘が殺生丸の“姫”だ」

両者が身を乗り出し妾めかけの両脇から鏡を覗きこむ。

台座にドッシリと据えられた大きな楕円形の魔鏡、“遠見の鏡”。

鏡の中央に映し出されているのは、見るからに幼い人間の童女。松尾が、その姿を見て納得したのか、感じたままを言葉にする。

「御方さまの仰おしった通り、本ほんに幼い姫にございますな」

「その通りだ、松尾。まるで雛鳥も同然であろう。だが、この小娘故に、殺生丸は冥府にまで赴おもむき、冥界の主を斬ってまで取り戻そうとしたのだ」

「お名前は何と仰るのでしょうか？」

「名か、名は……ムツ、そうだ、殺生丸が『りん』とか申しておったぞ」

「りん様ですか、可愛らしい名にございますな」

権佐が小娘よりも更に小さな妖怪を指して尋ねた。

「して御方さま、この小妖怪は？」

「殺生丸の供の者だ。随分とチンチクリンな奴だろう。だが、殺生丸が人頭杖を与えたということは、それだけ、こ奴を信頼しておるという事であろうな。確かに主に対する心遣いは中々見上げたものがあつたぞ」

「この者の名は？」

「覚えておらぬ」

名前を訊ねる権佐に対し、妙にキツパリと狗姫いぬめきが断定した。

「……左様でございますか」

昔から狗姫は興味が無いモノは全く覚えようとしない。その点、殺生丸も同様である。実に良く似た母子である。

「若さまに取って掛け替えのない姫なのでございますね」

松尾がりんを見て感慨深げしんげに呟く。
やっと、殺生丸に、そうした存在が出来たのが嬉しいのだろう。

「では、この先、何としてもお守りせねばなりませんまい」

権佐が、陰の守りとして今後のことを想定して口に出す。

「そちのいう通りだ、権佐」

狗姫は“遠見の鏡”に布をかけ、少し後ろに控えた腹心の部下である両者に向き直った。

そして、まず自分の乳母めのとでもある松尾に第一の指示を与えた。

「松尾、そなたは、西国に出向き留守居役の尾洲と万丈に伝えてくれ。殺生丸の刀“爆碎牙”が出現したとな。そうさな、鼠どもに、この事が知れると厄介だ。いずれは判ることだが、彼奴きやつらが知るのは少しでも遅いほうが良い。余計な警戒をさせたくないからな。フム、表向きは、そなたの孫息子の木賊こくそくに逢う為とでも称して婿の万丈を訪ねるのが良かるう。万丈に逢えば、当然、尾洲も同席する。なにせ西国の“二本柱にほんばしら”だからな。鼠どもは、この頃、スツカリ警戒心が弛ゆるんで忍びの者を張り付かせてはおらんようだが……。念の為だ、松尾、この扇を持ってまいれ」

狗姫が、そう云って懐から一本の扇を取り出した。

それは、通称“聞かすの扇”と呼ばれる狗姫愛用の妖具であった。表は蝶が華やかに舞い飛ぶ図柄ながら裏には「見ザル、聞かザル、云わザル」の三猿が象徴的に描かれている。

微弱な妖気を発して周囲一間（いつけん＝1.82m）の物音は全て聞こえないようにする妖扇あきあひせんである。

それに因ちなんで付けられた銘が“密ひそ”、密談にはもってこいの扇である。

通常、妖道具は発する妖気が強ければ強いほど優れた道具と賞される。

しかし、この“聞かすの扇”は、それを逆手に取っている。

妖気が、極々、微かすかなので殆どの者に妖具と悟らせないのだ。

誰もが、何の変哲もない扇と思ひ警戒心を緩ゆるませる。

それこそが、この妖具の最も優れた点なのであった。

“聞かすの扇”を受け取り松尾が頭を下げる。

「畏まりました」

今度は権佐に向かい第二の指示を下す狗姫。

「権佐、聞いた通りだ。西国への使いは松尾が引き受ける。そちは
急ぎ人界に赴き、先程の悪霊の素性を洗ってくれ」

「ハッ、仰せのままに」

両者は与えられた使命を果たすべく速やかに退出した。

そして、各々（おのおの）全く違う方角へ向けて出発した。

松尾は極秘の朗報を携え西国へ、権佐は奇怪な悪霊の素性を糺すべく人界へと。

『愚息行状観察日記？』御母堂さま』へと続く

(19) 岩虫(いわむし)

ストツ・・・上空から一人の男が大地に降り立った。

とはいえ、その風体は、到底、人間には見えない。

体型は人型なのだが、頭部は、茶や黄、黒が雑ざった斑な毛色の犬。西国お庭番の頭領を務める権佐である。

通称“斑の権佐”、妖界では三本の指に数えられる凄腕の妖忍である。

権佐は腰に差した小太刀を抜き取り、腰を屈めて片膝をつき、鞘ごと軽く大地を突いた。

トン・・・ボコツ・ボコツ・・・ボコボコ・・・

ギシギシ、ギシツ、ギシギシ

奇怪な虫のようなモノが地面から湧いて出てきた。

岩を擦るような耳障りな鳴き声を上げる。

岩虫と呼ばれる地に潜む下等な妖怪である。

「岩虫よ、つい半日前に、この地で起きたことを教えてくれ」

「何者が現われ、何を語り、そして如何様に戦ったのか」

「ここで起こったこと全てを包み隠さずワシに語ってくれ」

権佐に求められるままに、岩虫は、先日、この地で起きた戦いの様相について語った。

岩虫自身には理解できなくとも、現われたモノ達の名前、会話、使われた武器について、残っている記憶に従い在るがままに詳細に語り尽くした。

岩虫の話聞き終わった権佐は立ち上がって懐に手を入れ小さめの巾着を取り出した。

そして、徐に巾着の口を開け、中身を岩虫達の前に振り撒いた。
パラパラ・・・と地面に零れ落ちたのは色取り取りの瑪瑙の小粒。

「これは礼だ」

ギシギシ・・・ギシツ・・・ギシギシ・・・

岩虫どもが目の前に落ちた瑪瑙にモゾモゾとにじり寄る。

そして我先にと瑪瑙を食べ始めた。

瑪瑙は岩虫の大好物なのだ。

権佐が知れたかった情報は岩虫のおかげでスンナリと手に入った。

ワザワザ人界にまで足を延ばした甲斐があったなと権佐はひとりごちた。

もう用は済んだ、長居は無用。

早々に天空の城に戻らねば。

トン・・・権佐は軽く地を蹴って空中に浮かんだ。

と思う間もなく疾風のような速さで走り出した。

黄、茶、黒、の毛色が雑ざりあって一陣の風となる。

斑の風が目にも止まらぬ速さで天空の城に向かう。

俊足の権佐なら天空の城から人界までの往復に一日もあれば事足りる。

事実、その日の夕刻には、もう天空の城に帰り着いていた。

門番は権佐を見るなり誰何もせず城内に通した。

そのまま権佐は狗姫の御方の私室に通された。

案の定、女主は“遠見の鏡”を眺めつつ部屋の中で権佐を待ち構えていた。

「御方さま、只今、戻りましてございます」

「ご苦労だったな、権佐。して首尾は？」

「上々にございました。松尾殿は？」

「暫く西国に逗留だ。此度の訪問の名目は松尾が可愛がっている孫息子に会う為となっておるからな。少なくとも四・五日はアチラに留まらねば格好がつかん。そうでないと溝鼠どもが不審に思うだろ
う」

「確かに。では、松尾殿には、後程、拙者から詳しく。それでは、まず、彼の悪霊についての御報告を。あ奴の名は曲霊。長年、四魂の玉に封じ込められてきた妖怪どもの邪念にございました」

「曲霊・・・とな。又しても四魂の玉絡みか」

「はい、御方さまも既に御存知のように、四魂の玉は古の巫女と妖怪どもの魂が凝って出来た物にございます。直霊である巫女の魂、妖怪どもの邪念が凝り固まった曲霊。四魂の玉は、この相反する霊からなる矛盾の塊り。それ故、今も、あの玉の内部では巫女と妖怪どもの魂が戦い続けていると伝わっております」

「その曲霊が、何故、今回、ワザワザ、四魂の玉から出てきたのか？」

「恐らくは最後の欠片を取り込む為ではないか・・・と」

「最後の欠片というと・・・殺生丸が連れていた、あの人間の小僧の首に仕込まれておった物だな」

「御意」

「小僧は、先日の戦いで、その曲霊なる悪霊に四魂の欠片を穢され

て気を失った。その後は縁者らしき者に連れられ今は人里におるぞ。
（あの女、小僧と似たような戦装束を着ておったからな。それに顔も似ておった。血の？がりが近いのだろう）殺生丸も先程まで其処におった。刀々斎が爆碎牙の鞘を拵えておったからな」

「何と、あの御仁が直々（じきじき）にですか？」

「ウム、どうやら朴仙翁に頼み込んで枝を分けて貰ったようだ。爆碎牙の鞘にする為にな。フッフ、刀々斎め、今回は中々に用意周到だな。まあ、考えてみれば無理もないか。爆碎牙は鉄碎牙や天生牙以上に扱いが難しい刀だ。あれほど爆発的な破壊力を抑え込むには、どうしても朴仙翁の枝でなくてはならん。さもなければ、到底、鞘の任に堪えられまい」

「それは重畳。では、これで名実ともに爆碎牙は殺生丸さまの愛刀にございますな」

「そうだな、まずは目出度い。それでな、権佐、殺生丸の奴、爆碎牙の鞘が出来上がったかと思いきや、即、あの悪霊を追って里を出たのだ」

「殺生丸さまの御気性から鑑みて、当然、曲霊を追って討ち果たす所存でおられますような」

「だろうな。その後は、この“遠見の鏡”を使って殺生丸の動向を探っておるのだが、今のところ、これといった動きがないのだ。暫く、あの悪霊との追いかっこが続きそうだな」

【誰何】：「誰か」と声をかけて名を聞くこと。

【縁者】えんじや …縁続きのもの。親戚。

【重畳】ぢゆうじやう …良いことが重なって、この上なく満足なこと。または、そのさま。

【鑑みる】かんが …手本や先例に照らして考える。

『愚息行状観察日記?』御母堂さま』』に続く

「……可笑しい」

玉座に頼杖をついた狗姫いぬめぎの御方が何気なく洩しらした咳せききに松尾が反応した。

「御方さま、どうなさいました？」

昨日、松尾は、西国から天空の城に戻ってきた。表向きは孫息子の木賊とくさに逢う為の西国訪問である。

名目上、そそくさと辞去する訳にもいかず、結果的に一週間も西国に留とどまることになった。

その間、西国に戻った権佐から彼の悪霊とその後の経過について詳しく報告されたので主との話に齟齬そごはない。

西国と天空の城との往復は、今回、別段、急ぐ必要がなかったので、ほぼ二日を要した。

往復に要した日数が二日、西国滞在が七日、締めて合計が九日。

つまり、今日で殺生丸が彼の悪霊、曲まが霊つひの追跡を開始して十日目になるのだ。

「あの悪霊の動きだ。あ奴、アチラコチラと右往左往しおって。そうだな、この動きは、まるで……」

「まるで？」

松尾が合の手を入れてきた。

「恐らくは・・・陽動」

狗姫が答える。

「陽動。では、彼の悪霊は殺生丸さまを謀たくらっているのをごぞいますか？」

松尾の言葉に呼応するように“遠見の鏡”に変化が生じた。

「ムッ、あ奴が出てきたぞ。あの若衆侍めが！」

狗姫の指摘通りに、鏡の中に折鶴に乗った夢幻の白夜が映し出された。

そして、殺生丸の前に立ちはだかる。

巨大な顔面の悪霊、曲霊を連れて。

すぐさま天生牙を抜き放ち曲霊を斬り付ける殺生丸。

だが、何故か、曲霊は、斬られた当初はボウツかすと霞むものの、すぐに元通りに復元するではないか。

「やはりな、あれは偽物だ」

“遠見の鏡”をジツと凝視しながら狗姫が自分の考えを口にする。

「御方さま、あれが偽物ならば、本物は、一体、何処に？」

「何処に？ 松尾よ、悪霊が望むモノは何だ？」

「それは、勿論、四魂の欠片にございましょう。・・・となれば！」

「そうだ。あの小僧がいる人里だろうな」

「見る、松尾。どうやら、殺生丸も気付いたようだぞ」

“遠見の鏡”の中、殺生丸が折り鶴に乗った夢幻の白夜に迫る。

何時の間にか天生牙は鞘に収められている。

鋭い爪が夢幻の白夜を襲う。

慌てて殺生丸の攻撃を躲す夢幻の白夜。

瓢箪が爪で破壊された。

その中から出てきたのは・・・肉片！

大気に触れると同時に雲散霧消していった。

「まんまと騙されたようだな、殺生丸。あの悪霊め、随分と悪知恵に長けておるわ」

「御方さま、あの曲霊なる悪霊が己が肉片を使って殺生丸さまを惑わしたのは判ります。ですが、何故、あ奴は殺生丸さまを十日間も引き回していたのでございましょう」

「単純に時間稼ぎだろうな。松尾よ、覚えておろう。あの悪霊は天生牙で左目を斬られた。如何に霊体とはいえ傷を癒やす時間が必要だったのだろう。正体を明かしたのは、その必要がなくなっただからだろうな」

鏡の中に夥しい数の妖怪が映し出された。

ザツと軽く見積もっても千匹は下らないだろう。

殺生丸の周りをビッシリと取り囲んでいる。

夢幻の白夜はここで殺生丸を足止めする積りなのだ。

「さて、どうする、殺生丸？」

すると殺生丸が爆碎牙を抜き放った。

ほんの一振り。

唯の一撃。

それだけで雷鳴が轟き千匹もの妖怪が瞬時に抹殺された。
正しく“瞬殺”。

「本に爆碎牙は凄まじい刀にございますなあ、御方さま」

「ウム、そちのいう通りだな、松尾。全く・・・呆れるばかりの破壊力だ」

自分の母親と側近が、“遠見の鏡”の前で、そんな会話を交わしているとも知らず、殺生丸は神速ともいえる凄まじい速さでその場を後にした。

無論、夢幻の白夜になど、一切、目もくれなかった。

【齟齬】：（上下の歯がくいちがう意から）意味や物事が食い違つて合わないこと。

【陽動】：陽動作戦の意味。（陽は偽りの意）。わざと目的とは違うことをして敵の注意をその方面に向けさせ相手の判断を誤らせること。

『愚息行状観察日記（21）』御母堂さま』に続く

(21) 急変

“遠見の鏡”の像がぶれている。

殺生丸の移動速度が速すぎて捉えきれないのだ。

「フム、今の殺生丸は尻に火がついたように先を急いでおるからな。彼の悪霊に一杯喰わされて、相当、鶏冠とさかに来ておるだろうし」

「・・・となると。御方さま、若さまは、あの人里に向かつておられるのでございますか？」

「いや、違うな、松尾。あの若衆侍は時間を稼ぐ為に殺生丸を騙してきた。わざわざ悪霊の肉片まで使つてな。つまり、我ら犬妖族の最大の特徴、鋭敏なる嗅覚を逆手に取つたのだ。小僧の四魂の欠片を、あの悪霊めが手に入れられるようにな。それを止めたという事は・・・多分、今、現在、彼の悪霊は何らかの方法で小僧を手中にしたと考えて良からう」

狗姫いぬめきは“遠見の鏡”に向かい命じた。

「“遠見の鏡”よ、小僧を映し出せ。以前、この城に殺生丸に伴われてやって来た、あの人間の小僧だ」

暫時ざんじ、鏡が曇つたが、直ぐさま元に戻つた。

鏡の表面には狗姫が命じた通りに、人間の少年、琥珀が映っている。それも尋常な状況とは、到底、思えない場面が。

少年は異様な太さの触手に片足を取られ宙吊りになっている。

周囲は切り立つ岩場、眼下には千尋の谷が広がっている。

「やはり、捕われておったか」

「御方さま、あの不気味な触手は奈落なる者の・・・」

「その通りだ、松尾。小僧の周囲には半妖達もおるようだぞ」

良く見れば鏡の縁に小さく犬夜叉や仲間が映っている。

邪悪な本性を剥きだしにした巨大な顔面の曲霊まがつひが空中に浮かんでいる。

悪霊が勝ち誇ったように嘲笑を浮かべている。

完全に小僧を捕らえた悦に入っているのだろう。

万事休す！と思ったその時、悪霊の左眼が斬られた。

“遠見の鏡”の中に殺生丸が出現するや否や天生牙で曲霊を斬ったのだ。

「よし、間に合ったな、殺生丸」

「流石は若さま、実にお速い。もう、現場にご到着遊ばすとは」

狗姫と松尾が交互に言葉を掛ける。

すると、悪霊を援護するかのように極太の触手が何本も殺生丸に襲いかかってきた。

奈落の攻撃だ。

殺生丸は悠然と構えている。

徐おもむに天生牙を左手に持ち替えたかと思うと、右手に爆砕牙を握った。殺生丸が爆砕牙を軽く一振りする。

それだけで、あっけなく奈落の触手は爆砕牙に破壊され粉々に砕け散っていく。

勿論、琥珀を捕らえていた触手も爆砕牙の破壊効果が波及して消滅した。

そのまま、空中に投げ出された琥珀を雲母ウンボに乗った珊瑚が救出した。爆砕牙を鞘に納め、改めて曲霊と対峙する殺生丸。

「何やら悪霊とゴチャゴチャと喋っておるようだな」

「出来れば側で聞いてみとうございますな、御方さま」

「フン、どうせ殺生丸のことだ。負け惜しみでも言っておるのである」

狗姫と松尾が、そうこう云っている内に、悪霊は、殺生丸が無造作に振るった天生牙に斬られアツサリ虚空に消え去った。

これで、ひとまず片がついたと思いきや、どうも様子が可笑しい。

女退治屋が殺生丸に近付き必死に何か訴えている。

すると、殺生丸が顔色を変えた。

すぐさま踵かかとを返し、再び最速で何処いずこかへ飛び去っていく。

「何か起きたようだぞ、松尾」

「左様にございますな、御方さま。若様が、ああも急がれるとは」

「殺生丸が血相変えて急ぐようなこと……。ムッ、小娘に関する何か！」

「りん様が!？」

狗姫は急ぎ“遠見の鏡”に向かい命じた。

「“遠見の鏡”よ、今一度、命じる。小妖怪を映せ。小僧と同じく殺生丸に伴われておった、あの緑色の矮小わいしょうな小者だ」

「御方さま、小妖怪とは、先日、聞かせて頂いた若さまの従者にございますな」

「その通りだ、松尾。お世辞にも見栄えが良いとは云えん奴だったがな、あ奴の主思いには見上げた物があつた。殺生丸が小娘を人里に置いてくるに当たつて、あの小妖怪が守役の任を命じられたらう事は必定。小娘は小妖怪と共にある筈だ。さもなければ・・・」

“遠見の鏡”が先程と同じように曇る。

曇りが消えると、小妖怪が映し出された。

見るからにワタワタと慌てている。

やはり様子が可笑しい。

随分、緑色の顔が蒼ざめておるな。

予想した通りに好くない事が起きてしまったようだ。

小妖怪が年老いた巫女と法師の形をした若い男に向かい何か喚き立てている。

小娘は見当たらない。

という事は・・・考えられるのは拉致だな。

悪知恵に長けた、あの悪霊のことだ。

殺生丸の最大の弱点となる、あの小娘を攫つたか。

ホッ、殺生丸が小妖怪の背後に現われおつたわ。

だが、小娘が居ないことを確かめるなり、すぐさま飛び去っていった。

「やはり、小娘は攫われたようだぞ、松尾」

「何と！では、若さまは、りん様を取り戻しに行かれたのでござい
ますか？」

「そつだろつな。あの悪霊と奈落とやらは結託しておるようだから。大方、殺生丸の刀、爆碎牙と天生牙を封じる為の措置であろう。小娘を人質に取られては、殺生丸は手も足も出せんだろつからな」

『愚息行状観察日記（22）』御母堂さま』』に続く

(22) 大蜘蛛

小娘が拉致されて数日、コレといった動きはなかった。だが、ソロソロ何か起きてもいいはずだ。

そう思つて“遠見の鏡”を見ていた矢先、それは起こつた。夥しい数の妖怪が集結し始めている。

圧倒的なまでに膨大な数量の妖怪。

空一面を覆い尽くすほどの凄まじい数だ。

その中心部には巨大な大蜘蛛が陣取っている。

見るからに邪気に塗れた汚らしい姿。

実に醜悪極まりない。

その大蜘蛛を眼下に見据える位置に殺生丸がいる。

という事はだ、あの大蜘蛛が、奈落なる半妖の変化した成れの果てという訳か。

狗姫は傍らに控えている松尾に声をかけた。

「やっと物事が始まりそうだと、松尾」

「若さまが動かれますか、御方さま」

鏡の中の殺生丸に妖怪どもが無謀にも襲いかかる。

苦もなく爆砕牙で奴らを破壊し粉碎していく殺生丸。

そんな殺生丸の背後に例の若衆侍、夢幻の白夜が姿を現した。

何事か話しかけているようだ。

やはり敵とも味方とも思えぬ風情。

「何を喋っておるのやら」

「左様でございますな、御方さま。遠鼓えんこの精でも張り付いておれば私どもにも聞けましたでしょうに」

「まあな、そうしてみようかとも思ったのだが・・・止めた」

「何故にございますか？」

「考えてもみよ、松尾。あの並外れて気配に聡さとい殺生丸に気付かれずに済むと思うか？」

「無理でございましょうなあ。若さまが相手では」

「だろう。だから止めておいたのだ」

ここで遠鼓の精なるモノについて説明しておこう。

“遠鼓の精”とは大きな長い耳を持つ山彦の精である。見た目はウサギに似ている。

普段は白い体毛の遠鼓の精だが必要に応じて体色を自在に変化させ周囲に溶け込むという特性を持っている。更に殆ど気配を感じさせない。

結果、非常に気付かれにくい。

その為、権佐など妖忍に飼われ敵方の情勢を探る際に良く使われる。通常、二匹を一对で使役する。

一匹が遠方で聞き取った音声を山彦で伝送、もう一匹が受信するのだ。

丁度、現代の携帯電話と同じような機能を持っていると思えば良い。手っ取り早く云うなら狗姫しぬきは盗み聞きを断念したのであった。

大蜘蛛が糸を吐いた。

瘴気その物で出来た蜘蛛の糸だ。

蜘蛛の糸に触れた妖怪どもは、皆、体を溶かされ奈落に取り込まれていく。

大蜘蛛が体を開いた。

自ら敵を体内に迎え入れるかのように。

真つ先に殺生丸が飛び込んでいく。

何の躊躇ちゅうしゆもせずに。

余程、小娘のことが気懸かりらしい。

次いで半妖が奇妙な形なりをした巫女とともに飛び込んでいった。

猫又に乗った法師と女退治屋が後に続く。

目当ての人物を取り込んだからだろう。

大蜘蛛が開いた口を閉じた。

それから四対の脚を折り曲げピッタリと体に密着させた。

まるで玉のような形状。

巨大な黒い玉と化した大蜘蛛が空中に浮かんでいる。

「さて、殺生丸は、あの大蜘蛛の体内に率先して飛び込んでいった。このままでは見えんな。「遠見の鏡」よ、大蜘蛛の体内にいる殺生丸を写せ」

狗姫いぬぎの命令に“遠見の鏡”が曇る。
暫くすると薄暗い大蜘蛛の体内を歩く殺生丸が映った。

「フム、見た目よりも大蜘蛛の体内は広いようだぞ、松尾」

「左様にございますな、御方さま。あの奈落とかいう半妖、想像以上の数の妖怪を取り込んでいるものと推察されます。恐らくは万単位。ほんの一部分だけで、この広さと奥行きです。恐らく全容は巨大な城にも匹敵するかと思われれます」

「ムツ、女が倒れているぞ、松尾。あれは・・・半妖と一緒にいた巫女ではないか。どうした事だ」

「右腕に怪我を負っているようでございますな。着物に血が滲にじんでおります」

血の匂いに惹きつけられたのだろう。

雑魚妖怪どもが集まってきた。

それを見た殺生丸が巫女に襲いかかろうとする雑魚どもを爪で引き裂く。

何の術てらいもなく無造作に。

「フ〜ム、殺生丸の奴め、小娘の時も思ったが、随分と優しくなったものだ」

狗姫が少し驚きながら言葉を紡ぐ。

「真に驚かされますな。昔の若さまでしたら、あの巫女が襲われても眉ひとつ動かされなかったでしょうに」

松尾も幼少の頃から殺生丸を知っている。

その驚くほど狷介孤高けんかいここうな激しい気性を。
だからこそ、かごめを庇かばう姿に驚きを隠せない。

「ホッ、巫女が目を覚ましたぞ、松尾」

「あの様子だと、巫女は、どうも、若さまと顔見知りのようですね
いますな」

「フム、どうやら、巫女は殺生丸に付いていくようだぞ」

「それが最上の策にございますな。奈落なる敵の体内にございます。
誰よりも強い若さまのお側が最も安全な場所にございましょう」

【狷介けんかい】：頑固で自分の意思を堅く守り、人と打ち解けないこと。

また、そのさま。

【孤高^{ここう}】：唯ひとり、世俗とかけ離れて高い理想を抱いているさま。

『愚息行状観察日記（23）』御母堂さま』に続く

(23) 殺生丸の対応

「確か、あの巫女は半妖の連れだったな。という事はだ、殺生丸とは顔見知り程度の知己ちきと考えれば良いのか」

「そうでございますな、御方さま。拝見した処、あの様子では、それ程、若さまと親しいとは感じられません」

大蜘蛛の体内にボウツと童女の姿が映し出された。

「ムツ、見よ、松尾、あの小娘が！」

「御方さま、若さまが全く見向きもされません。という事は、あれは恐らく幻にございましょう」

「そうだな、人間である巫女は騙だませても我ら犬妖は騙せまい。特に殺生丸の嗅覚の鋭さは一族の中でもずば抜けた精度を誇るからな」

そのまま巫女を連れ化け蜘蛛の体内を歩く殺生丸。不意に殺生丸が歩みを止めたと思いきや、飛んだ！ それこそ矢のような速さで。

巫女はといえば離されまいと殺生丸の毛皮に必死にしがみ付いている。

それを見た狗姫いぬきが何気なく呟つぶやいた。

「小娘とは扱いが全く違うな」

「と申しますと？」

「殺生丸はな、松尾、以前、この城を訪れた時、冥界の邪気に触れて息絶えた小娘を、それは大切そうに隻腕に抱いておったのだ。あの時とは違い、今の殺生丸には両腕が揃っている。にも関わらず、あの巫女を腕かひなに抱いて移動しようとはせん。つまり、そうした考えが殺生丸の頭には露つゆほども思い浮かばん訳だ」

「若さまに取って、りん様だけが、真に愛おしい存在だからにございましょうな」

「あの時の殺生丸の様子が思い出されるわ。冥界から、この城に戻ってきたものの、小娘は息絶えたまま。更に妾わいわから天生牙の効力は一度きりと知らされ、あ奴、内心、茫然としておつたらしいぞ。どうすれば良いのか判らぬ程にな。だが、殺生丸は極めつけの強情っ張りだ。必死に無表情を装っておった。それでも、妾わいわが冥道石を使って小娘が息を吹き返し目を開けた時は、流石に己おのが真情を堪こえきれなかったのだろくな。隻腕を伸ばし小娘の頬を撫なでておつたわ。それも、この上なく愛おしそうにな。フツッ、あんな殺生丸を見ては誰も奴の小娘に対する思いを否定できまい。それにしても、あれ程、他者に触れる事を厭いとうておつた我が息子殿がな。変われば変わ

るものだ」

「私めも、その場において、この目で見とっございました、御方さま。本に口惜しゅうございます」

「拗ねるな、松尾。いずれ、そうした機会も巡ってこよう」

殺生丸が目標の場所に着いた。

小娘が、今しも肉塊に吞まれようとしている。

必死に殺生丸に向かい手を伸ばそうとする小娘。

だが、その前に半妖が立ちはだかる。

アアッ、完全に肉塊に吞み込まれ姿が見えなくなってしまった。

ムッ、半妖の様子がおかしい。

明らかに顔が変わっている。

目は赤く染まり頬には一筋の妖線。

爪も長く鋭くなっている。

妖怪化している。

「どつした事だ。半妖め、変化しておるぞ」

「恐らく奈落の強い毒気に吞まれたのでございましょう。若さまと
違ひ弟御は半妖。その分、邪気に影響されやすいかと」

睨み合う兄弟。

片親だけ同じ異母兄弟とはいえ、やはり血筋か。
良く似ている。

父譲りの見事な白銀の髪に金の瞳。

何だ、何かが、半妖の上に覆いかぶさるように透けて見える。
アレは……？

「松尾、半妖は何かに取り憑かれておるようだ」

「アレは……。御方さま、あ奴にございます！ あの曲靈まがつひなる悪
霊！」

半妖が鉄砕牙を抜いた。

殺生丸は、爆砕牙を、イヤ、違う、天生牙を抜いた。

そうか、あの悪霊は天生牙でなければ斬れない。

そして、天生牙に生身の者は斬れない。

半妖が鉄砕牙を黒く変化させ冥道残月破を撃った。

だが、狙いは大き^{はず}く的を外れた。

イヤ、それも違う。

あれはワザと的を外したのか。

いきなり触手が半妖を下から突き上げた。

鉄砕牙を触手が半妖から取り上げる。

半妖は触手に掴まれたまま肉塊に呑み込まれ姿を消した。

(24) 激突

殺生丸と巫女が肉塊に隠れた半妖を追う。
鉄碎牙は巫女が拾った。

殺生丸は鉄碎牙に触れることが出来ない。
父である鬪牙が封印を施しておいたからな。

厚い肉壁を爪で抉る殺生丸。
肉壁の向こうに半妖がいるのだろう。

ほどなく貫通した。

殺生丸が肉壁の外側へ出た途端、半妖が襲い掛かってきた。
長く鋭い剥きだしの爪。

襲う弟、躲す兄。

半妖の隙を衝いて殺生丸が透かさず弟を殴り飛ばす。

それぞれ足場を固めて対峙する兄弟。
空中で激しくぶつかりあう兄と弟。

拮抗する力、爪と爪の応酬。

ムッ、殺生丸の着物の右袖が裂けた。

やるな、半妖。

殺生丸が天生牙を抜いた。

ここで一気に片を付ける積りか。

何と！半妖めが天生牙を驚掴みにしおったではないか。

不味い、あ奴め、天生牙を叩き折る気だ。

そうはさせじと殺生丸が大きく踏み込み半妖を押し出す。

追い詰められる半妖、睨み合う兄と弟。

その最中、巫女が動いた。

鉄碎牙を半妖に渡さんとしたのだろう。

だが、足場の悪い大蜘蛛の体内。

案の定、足を踏み外し落ちかけた。

すると驚いたことに巫女が持っていた鉄碎牙を肉壁に突き立て踏み

とどまったのだ。

巫女の身体の重みで裂けていく肉壁、ずり落ちていく巫女。怪我をした右手で鉄碎牙を掴んでいる巫女。

傷口が開いたのだろう。

鮮血が着物に滲む。

半妖に鉄碎牙を渡そうとする巫女の意図を察した奈落が、そうはさせじと動いた。

肉壁を触手に変化させ巫女を弾き飛ばしたのだ。

辛うじて肉壁に突き刺さっていた鉄碎牙は押し出され、巫女も虚空に投げ出されてしまった。

落ちていく巫女と鉄碎牙。

それを見た半妖が天生牙を手離し巫女を追う。

悪霊の呪縛から解放されたのか。

殺生丸も半妖を追う。

半妖が巫女に追いつき抱きとめた。

鉄碎牙は、そのまま落ちていく。

ムッ、悪霊が分かたれ一部が巫女に移ろうとしている。

今度は巫女を支配しようというのか。

悪霊の意図を察した半妖が巫女から急いで離れようとする。

その時、何と、鉄碎牙が、半妖めがけて飛んできた。

主の危機に反応したのか。

半妖の手に戻ってきた鉄碎牙。

戻ったと同時に鉄碎牙が変化した。

アレは・・・竜の鱗が浮き出た刃。

以前、冥道の中で見た竜鱗の鉄碎牙！

何だ、悪霊の様子が可笑しい。

動こうにも動けないように見える。

「あの悪霊、どうやら動けないらしいぞ、松尾」

「左様にございますな、御方さま。恐らく変化した鉄碎牙が曲靈まがつひの動きを封じ込めているのではないかと思われれます」

竜鱗の鉄碎牙のせいなのか。

まるで縫い止められたかのように身動き一つできない悪霊。必死にもがく悪霊を殺生丸が天生牙で斬り捨てた。

あの場にいたら、きつと悪霊の断末魔くつがえが聞いたのだろうな。

それほどまでに己の絶対的優位を覆くつがえされたのが信じられなかったのだろう。

驚愕の表情を貼り付けたまま悪霊は消え失せた。

綺麗に影も形も残さずにな。

あれほど挺子ていす摺すらされた割には、随分と呆気あっけない最期だった。少し拍子抜けしたぞ。

「よしつ、やっと悪霊を倒したな、殺生丸」

「お見事にございます、若さま。文字通り一刀両断にございますな」

もう用は済んだとばかりに、サツサとその場を後にする殺生丸。

半妖と巫女を一顧いっこだにせん。

悪霊を倒した以上、一刻も早く小娘の許に駆けつけたいのだろうな。我が息子ながら、こういう処は実にハッキリしてある。

愛想もへったくれもない。

相変わらずだな。

「さて、松尾よ、殺生丸は今度こそ悪霊を倒した。次は小娘の救出だな」

「仰る通りにございます、御方さま。さぞかし、今の若さまは気が急いでおられましような」

小娘の居場所が特定できたのだろう。

殺生丸の動きが先程までとは、まるで違う。全く迷いがない。

まっしぐらに突き進んでいく。

そんな殺生丸の行く手を阻む何本もの触手。そのまま爪で強行突破しようとする殺生丸。

だが、思いの外、邪気が強まっているらしい。

触手に触れた殺生丸の爪が焼け爛れている。

殺生丸が己が妖気を高めた。

再度、爪で触手を攻撃する殺生丸。

今度は難なく触手を破壊した。

尚も小娘を捜して先を急ぐ。

(25) 姦計(かんけい)

遠見の鏡”に飛び込んできたのは衝撃的な光景だった。

小娘は長身の男の腕に抱かれていた

いや、正確には違うな。

男の腕は小娘には触れていないのだから。

つまり、小娘は空中に浮いているのだ。

手甲に具足、豪華な陣羽織を纏まとった武将姿の若い男。

長い黒髪は束ねず総髪のまま。

それ自体、命を持つかのように空中でうねる黒髪。

見た処は人間、だが、その男の背後から伸びる何本もの禍々(まがまが)しい触手。

そして、何よりも男の前に小さな玉が浮かんでいる。

邪気に満ち満ちた黒い玉。

察する処、あれが四魂の玉であろうな。

となると導き出される答えは一つ、あの男が半妖の奈落という訳だ。

その奈落に向かい女退治屋が武器を投げ付けた。

あれは手裏剣のように敵に投げつける飛び道具。

それも、あの大きさからして殺傷力は手裏剣とは比べ物にならぬほど大きいはず。

まともに喰らえば命がない。

間に合わぬ!

奈落もろとも小娘が殺される!

そう思った刹那、小娘を抱いていた男が消えた!?

幻!?

だからか、小娘に男の手が触れていなかったのは。

髪一重の差で飛び道具は小娘から逸それた。

落下していく小娘は何処から湧わいたのか、あの人間の小僧が助けた。運良く双頭竜に騎乗していた小僧が、そのまま空中で小娘を受け止

めたのだ。

狗姫いぬぎは堪こえていた息を吐いた。

傍かたわらの松尾の顔も心なし青褪あせめている。

胸元を掴つかんでいる手の微かすかな震えが動揺うごの激しさを物語る。

「フウツ・・・危あなかつたな」

「間に合わないかと・・・思おもいました、御方ごさま。もう・・・肝かんが潰つぶれるかと」

「そのような事ことになつていたら・・・想像するだに怖おそろしいな。もし小娘こ娘ねが死しんでいたら殺生丸ころんの心は闇やみに沈しんでしまつただろう。憎にく悪あく一色いっしきに染しまり、手てに入いれた爆碎ばくさい牙がで破壊はくわいの限かぎりを尽つくすだろう。それこそ敵てきも味方あつち方も区別くわくべつせぬほどに・・・な」

「そんな事ことにならなくて・・・本ほん当とうに宜よろしゅうございました」

奈落ななる者ものの幻まぼろしが消きえたと同時に、あの若衆侍わかしゅじの左腕ひだりうでが肩口かたぐちからもぎ取とられていた。

あ奴やつは奈落なの分身ぶんしんと聞きいている。

つまり、本体ほんたいが損傷そんじやうを負おつたから、当然たうぜん、分身ぶんしんである若衆侍わかしゅじも同じ傷きずを受けたという訳わけか。

次の瞬間つぎのしゆんかん、女退治屋おんなたいぢやの飛とび道具たぐいが風かぜを切り戻かえつてきた。

飛とび道具たぐいは若衆侍わかしゅじをスレスレすに掠かすめて肉壁にくへきに突き刺ささり止とまつた。殺生丸ころんが投なげ返かえしたのだ。

己の目の前で大事な小娘が殺されかけたのだ。
今、アレの心の内に燃え盛る怒りの炎の激しさは如何ばかりか。

「怒っておるだろうな、殺生丸」

「それは当然でございますよ、御方さま。りん様が殺される処だつたのでございますから」

「フ……ム、あの女退治屋、命乞いをしている様子はないな。もし、あの女が自分の命を惜しんで哀れっぽく泣いて縋ったりしようものなら、殺生丸のことだ。瞬時に己が爪で抹殺しただろうな」

対峙する殺生丸と女退治屋、鏡を通してさえヒシヒシと伝わってくる無言の重圧、息詰まるような緊迫した場面だ。

そんな中、不意に薄暗い大蜘蛛の体内に光が差し込んできた。肉壁に生じた綻びから洩れてきた光だ。

殺生丸が光の差す方向へ飛んでいく。

小僧と女退治屋も後に続く。

ひとまず女退治屋への詮議は『お預け』らしい。

「まずは当面の敵を片付けてからといった処かな、松尾」

「そうでございますな、御方さま。ともかく今は奈落を倒すのが先決かと」

光の差す方向へと急ぐ殺生丸と他の面々。

小僧は双頭竜に小娘と共に、女退治屋は猫又に騎乗している。

大蜘蛛の体内が、アチコチで破綻を見せ始めている。

肉壁が裂け凝縮した妖毒が溶岩のように噴き出す。

そのまま気体となり撒き散らされる瘴気。

あの色から判断するに並の濃度ではないな。

我らは、ともかく、人が吸い続けられれば正気を保つことさえ困難になるだろう。

そう、有害な瘴気を防御する術か、または防毒面でも無ければな。

すると、あの女退治屋、何を思ったのか、己の命綱ともいうべき防毒面を小娘に装着させたのだ。

そして、自分は防毒面なしで猫又を急かし、宿敵の奈落の許へと駆けていった。

狗姫はポツリと呟いた。

「・・・不退転の決意」

「御方さま？」

「あの女退治屋、死ぬ積もりだな。敵の中核に近付けば近付くほど瘴気は更に強くなる。脆弱な人間の身には、到底、耐えられぬ程にな。にも拘らず女退治屋は小娘に己の防毒面を譲った。それは取りも直さず二度と戻らぬ決死の覚悟の現われだ。壮絶だな」

【詮議】^{せんぎ} …？評議して物事を明らかにすること。？罪人を取り調べること。

【中核】^{ちゅうかく} …物事を中心となる重要な部分。

【対峙】^{たいじ} …？高い山などが向かい合って聳^{そび}えること。？人や軍勢がにらみ合ったまま動かないでいること。当作での使用は？の意味。

【不退転】^{ふたいてん} …？【仏】修行の過程で、既に得た悟りや徳を失わないこと。不退。必定。？堅く保持して動じないこと。屈せず頑張ること。当作での使用は？の意味。

『愚息行状観察日記（26）』御母堂さま』に続く

(26) 崩壊

女退治屋は、小娘に防毒面を譲って、一人、猫又を急かし駆けていった。

アツという間に見えなくなった、その姿。

殺生丸達も同じように後に続こうとしたのだろう。

だが、何本もの触手が行く手を阻む。

まるで、女退治屋の後を追わせまいとするかのように。

ビッシリと前方を覆い尽くしているのは鋭い槍の穂先のように尖った

巨大な触手。

以前のモノと比べれば、硬度も毒性も格段に高いのだろう。

周囲に瘴気が充満してきた。

ここが先途と見切ったか。

遂に殺生丸が爆碎牙を抜いた！

雷の刃が触手を斬る！

轟音とともに破壊されていく触手。

見る見るうちに道が開かれていく。

何度、目にしても凄まじい。

実に怖るべき破壊力だ。

一度振るえば攻撃対象を文字通り粉々に粉碎し終えるまで持続する

破壊効果。

爆碎牙だけが持つ特殊な破壊属性が津波のように速やかに波及して

いく。

今、この瞬間にも、大蜘蛛の体内では休むことなく破壊が拡がっているのだろう。

背後に小娘と小僧を乗せた双頭竜を従え、殺生丸が先陣を切って走っていく。

ムッ、何だ！？

殺生丸が何かを踏みつけたぞ。

あれは、小妖怪ではないか！
あ奴、あんな処にまで来ておったのか。
ホッ、上手く双頭竜の鞍の辺りに蹴飛ばされおったわ。

「御方さま、今、若さまが踏みつけたのは従者の邪見殿では？」

「そのようだな」

「……………」

先を急ぐ殺生丸を、尚も阻止せんとするのか、数本の触手が襲いかかってきた。

無駄なことを、諦めが悪い輩だな、奈落。

小娘を救出した以上、もう、殺生丸に爆碎牙を封印する理由はない。これまで自重してきただけに、思う存分、爆碎牙を振るう殺生丸。更に破壊が増幅されていく。

大蜘蛛の体内を悉く破壊しながら進む殺生丸。

遂に中核の奈落本体に辿り着いた。

半妖が、巫女が、法師が、女退治屋がいる。

仔狐は大玉に変化して空中に浮き半妖と巫女を乗せている。

猫又は法師と女退治屋を騎乗させている。

殺生丸は、勿論、自力で浮遊だ。

小娘と小妖怪、小僧は、双頭竜に騎乗している。
勢揃いだな。

決着の時がきたようだ。

あれが奈落の本体か。

不気味な奴だな。

殆ど頭部だけではないか。

何と、あ奴、爆碎牙の破壊から逃れる^{のが}ために体を切り離しおった。オオツ、変化した！

肌色は、どす黒い焦げ茶色に、黒髪は白髪に、丸い耳は尖った妖耳へと変わった。

眼から直ぐ下を耳まで走る妖線。

最早、人とは呼べぬ容貌。

完全に妖怪と化したようだな。

瘴気の塊り、瘴気弾を奈落が何発も撃ち出してきた。

半妖が冥道残月破を……。

何だ、あの冥道の形は！？

まるで刃^{やいば}のようではないか。

「御方さま、あれも冥道なのでしょうか？」

「どうやら、そうらしいな。殺生丸のモノとは形が違う。恐らく、あれが鉄碎牙の真の冥道なのだろう」

刃の形の冥道が何発も奈落を襲う。

真円の冥道と違い攻撃範囲が格段に広い。

奈落を砕いているのだが、又、元のように復元していく。

四魂の玉の力か！？

下から瘴気弾が小娘達を狙って撃ち出されてきた。

無論、殺生丸が爆碎牙で破壊する。

だが、何かに気付いたのか。

殺生丸が小妖怪^{けち}に下知を。

どうやら奈落の体内からの脱出を命じたようだ。

主の命に従い、急いで脱出を図る小妖怪。

そこへ外から瘴気弾が！

飛び道具が、それを打ち砕いた。

女退治屋の武器だ。

小娘が女退治屋に防毒面を返す。

小僧も法師に防毒面を譲った。

そして、小娘達は奈落の体内から脱出した。

女退治屋と法師は戦線に復帰していった。

尚も続く激しい攻防。

奈落の瘴気弾が乱れ飛ぶ、迎え撃つは半妖の冥道残月破、殺生丸の爆砕牙、女退治屋の飛び道具、法師の風穴。

あれほど冥道に砕かれ続けているというのに奈落は死なない。

「奈落め、しぶといな」

「御方さま、あ奴は、どうして死なないのでございましょう」

「多分、四魂の玉のせいだろうな。それにな・・・松尾」

「それに？」

「何かを待っているようなのだ。奈落めの、あの余裕の表情、一体・・・」

半妖が奈落を睨んでいる。

攻撃したいのに出来ないらしい。

何故だ!?

その時、殺生丸が奈落に迫り、もんどうつむやうし問答無用で一氣に両断した。

崩れ落ちていく大蜘蛛の体。

外部に出てみれば・・・。

オオツ、人里に向かって落ちていこうとする大蜘蛛の体というより
残骸。

雨のように降り注ぐ瘴気の塊り。

それらを風穴で必死に吸い込む法師。

地面に降り立った半妖が落ちてこようとする大蜘蛛を冥道残月破で
攻撃した。

大蜘蛛の体は殆ど冥道に吸収された。

だが、完全には消滅しない。

渦を巻く巨大な瘴気の玉に変わった。

『愚息行状観察日記(27)』御母堂さま』に続く

(27) 奈落の死と四魂の玉

極限にまで膨張した瘴気が渦をまく大玉。

巨大な瘴気の渦玉が宙に浮いている。

奈落の成れの果て。

肉眼では見えないが、その中心に位置するだろう四魂の玉。

破魔の巫女が矢を番えた。

狙うは、唯ひとつ、瘴気の中に存在する小さな黒い禍玉。

全ての禍の源、四魂の玉。

撃った！

瘴気の大玉に向かい真っ直ぐ飛んでいく破魔の矢。

消えた！？矢が！？

一体、何処へ！？

次の瞬間、大玉が破裂した。

ギリギリで内部に留められていた瘴気が炸裂する。

四方八方に飛び散る瘴気の渦。

瘴気の渦が波のように巫女に襲いかかる。

半妖が巫女を抱えこみ急ぎ飛び退く。

次第に薄れていく瘴気。

急激に場が収束していく。

視界に飛び込んできたのは頭部のみで奈落と矢で串刺しにされた四

魂の玉。

古びた井戸の上に浮かんでいる。

破魔の矢に射抜かれたせいだろうか。

闇色に染まっていた四魂の玉が無色透明になっている。

もう体が残っていないのだろう。

奈落の頭部には脊髄が繋がるのみ。

虫の息だな、奈落は。

だが、あそこまで追い込まれながら、尚も、あ奴の表情に敗北は感

じられぬ。

一体、何を話しているのだろうか？

クツ、奈落と半妖どもの会話を聞けないのが、こつも、もどかしいとは。

遂に奈落が消滅した。

髪の毛一筋残さず奴は消えた。

まるで大気に溶け込むかのように。

だが、あ奴の最後の笑みは何を意味していたのだろうか。

何！？

巫女の背後に真円の冥道が出現した。

息を呑む間もなく巫女が漆黒の冥道に呑み込まれる。

半妖が慌てて後を追ったが間に合わなんだ。

巫女を吸い込んだ冥道は掻き消すように消えてしまった。

奈落は、これを狙っていたのか。

「御方さま、四魂の玉が見当たりません。それに、井戸もです」

「ムツ、確かに。そなたの言う通りだな、松尾」

巫女の消失に茫然とする半妖と仲間達。

それだけではない、井戸までもが最初から無かったかのように消えていた。

つまり、あの井戸に意味があるということか？

その場にいる全員に拡がる戸惑いの表情。

異常な事態に、どうするのかと見ておつたら、半妖め、鉄碎牙を抜き冥道残月破を撃つたではないか。

そして、冥道を出現させ、そのまま、冥道に飛び込んでいったのだ。

「フツ、やはり兄弟だな。殺生丸と同じように己おのが姫を助ける為、躊躇ちゅうちゅうせず冥道に飛び込むか」

となれば殺生丸の時のように冥道石を使うしかあるまい。
如何に“遠見の鏡”といえど映せるのは現世のみ。

冥界に続く冥道の内部まで映すことは出来ん。

狗姫いぬぎは冥道石を手に取り中を覗いてみた。

冥道が映る。

漆黒の闇色の冥道。

巫女は闇に捕らえられ虚空に浮いている。

気絶しているらしい。

目は固く閉じられている。

半妖の方とは念じれば、ボウツと冥道石が光り、別の場を映し出す。
フム、巫女を探し求めて闇の中、必死に駆けずり回っておるわ。

冥道石をジツと凝視していた狗姫は妙な違和感に気付いた。

この冥道・・・どこか可笑しいな。

冥界の犬も鳥も竜も出て来ない。

あれは冥界ではないのか!?

では、冥界ではないとしたら、何処だ?

もしかすると・・・イヤ、多分、間違いない。

あの冥道は四魂の玉の中に続いていたのだ。

そのまま冥道石で巫女と半妖の様子を観察し続けたが何の変化も起こらない。

「このままでは埒らひが明かな」

狗姫が焦れて呟いた。
その時、部屋の外から上臈女房が狗姫に声をかけてきた。

「御方さま、権佐殿が参られました」

「権佐が？ 通せ」

「失礼致します」

部屋の中へ権佐が入ってきた。

「丁度良い処に来たな、権佐」

「ハッ？」

「報告に来たのだろう。尾洲と万丈に頼まれ殺生丸に西国への帰還を促す為、人界へ向かうと」

「流石は御方さま、お見通しでございましたか」

「当然の帰結だな。爆碎牙が出現した以上、もう鬪牙の遺言を守る必要はないからな。留守居役の両名が殺生丸に帰国を要請するだろうことは必定」

「仰る通りにございます」

「本来、国主が国元に不在など許される事ではない。だが、爆碎牙が出現するまでは断じて帰国を促してはならぬと先代国主である鬪牙が遺言を残している。それに逆らうことなど家臣に出来よう筈もない。殺生丸は気付いてもおらんのだらうな。二百年の間、あ奴が人界を彷徨う勝手気儘かってきまづが通ったのは亡き父のお陰であるなどと。その件は了承した。それでな、権佐、お主に人界へ赴く前おもむに、ある処に寄ってもらいたいのだ」

「ある処とは？」

「先見よしみの巫女の許へ」

狗姫はニヤリと笑って権佐に命めいを下くだした。

(28) 先見の巫女

深い深い地の底に権佐は向かっていった。
有り体に言えば足から落下しているのである。

地下に続く一本道の穴の底に向かつて。

こんな真つ直ぐな深い穴が自然に出来ようはずもない。

明らかに何者かの手によって穿たれた垂直の縦穴。

かれこれ半時(約一時間)ほど地に潜っただろうか。

不意に仄かな光が見えてきた。

光が射すはずもない大地の奥深い場所。

まるで権佐の訪問を知っていたかのようにポオ・・・と淡い光が拡がりだした。

光苔だ。

ポツカリと柔らかな光に包まれた空間が出現した。

権佐は落下する速度を意識的に緩めフワリと降り立った。

透き通った玉が見える、水晶だ。

それも生半可な大きさではない。

直径にして一間(いつけん=1.82m)はあろうかと思われる水晶玉。

巨大な水晶玉は底に紫の座布団を宛てがわれ黄金の台座に据えられている。

その水晶玉の前でとぐるを巻く白い大蛇が、徐に首をもたげ眠たげに目を開けた。

白い大蛇の意識がユツクリと覚醒する。

キン・・・と空気が張り詰めた。

血のように赤い目が権佐を見据える。

紅玉のように輝く澄んだ眼。

フツと厳しい雰囲気が和らいだ。

白蛇の前に恭しく跪き権佐は頭を垂れた。

直接、妖忍の頭の中に白蛇の言葉が響いてくる。
精神感応、心話、現代風にいうならテレパシーだ。

『久しいですね、権佐殿』

『ご無沙汰しております、先見の巫女、粹晶さま。一別以来、かれこれ二百年ほどになりました。夢見の眠りをお邪魔して申し訳ございません』

『フツッ、それは何時ものことでしょう。狗姫の御方さまは息災でおられますか？』

『ハイ、今日、ここに参りましたのも御方さまの命によります』

『となると・・・当代の西国王、殺生丸さまに関わる事柄ですね』

『ご推察通りにございます』

『それで、何が知りたいと。権佐殿も御存知のように私に答えられるのは未来に支障をきたさない瑣末なことのみ』

『ハッ、それはもう、重々、承知の上でございます。実は、殺生丸

さまの弟御である犬夜叉殿が冥道に踏み込んだまま戻ってこられないのです。果たして戻られるのでしょうか？また戻ってこれるとして、それは何時になるのでしょうか？」

『犬夜叉殿？ ああ、鬪牙さまが人間の貴族の姫との間に儲けられた半妖の御子のことですね』

白蛇がソツと目を閉じた。

瞬時に、権佐の質問に対し、考え得る全ての可能性について思考を巡らせ検証を重ねているのだろう。

今この時にも熟考に次ぐ熟考が繰り返されているのは間違いない。

暫しの時の後、白蛇は静かに目を明けた。

煌めく紅の瞳。

結論が出たらしい。

『・・・数日後に』

「ハッキリした日数は判らないのでしょうか？」

『権佐殿、先程の答えが私に答えられるギリギリです。御存知でしょう。未来について妄りに言いふらしてはならぬと。因果の糸を徒に揺らすのは天に叛く事なのだ』

「ハッ、浅慮にございました。それでは、これにてお暇致します。」

かように慌しい訪問の無礼の段、平に御容赦下さい」

『殺生丸さまの許へ行かれるのですね』

「ハイ、爆碎牙出現により正式に西国王の地位に御就任いただく為にも早急に御帰還下さいますようと、留守居役の尾洲様、万丈様、ご両名より申し付かっております」

権佐が礼を尽して去った後、白い大蛇は一頻り回想に耽った。脳裏に浮かぶのは、嘗て在りし日のこと。

二百年前、西国の先代国主、鬪牙王が身罷った。

時を同じくして“先見の巫女” 粹晶は最大の危機に遭遇していた。先見、即ち、未来を視る能力を妖界の各国に狙われたのである。

長年、“先身の巫女” 粹晶は先代の西国王、鬪牙に擁護されてきた。鬪牙王の崩御に伴い後ろ盾を失った粹晶は今しも賊に拉致されようとしていた。

そんな粹晶を救ったのが権佐と松尾を連れた狗姫の御方だった。

忽ち、賊を蹴散らし、鬪牙王亡き後も“先見の巫女” 粹晶は、西国の、イヤ、狗姫の御方の庇護の下にあると自ら宣言してくれたのである。

西国王妃、直々（じきじき）の宣言。

それが、どれほど強力な守護を意味するか。

鬪牙王に匹敵するとまで云われた妖力の持ち主。

かてて加えて、その智略、縦横無尽とまで謳われた伝説の軍師“白銀の狗姫”。

今も鮮やかに当時の記憶が甦る。

この場所で、これまで通り先見の夢見を許された粹晶は大恩ある御

方に礼を述べていた。

『狗姫の御方さま、有難うございます』

「フツ、妾は鬪牙の遺言に従ったままでに過ぎん。礼は要らんぞ」

『イエ、それでも、貴女さまが遺言を反故にしようとする文句を言う者は誰ひとりとしてはいはずです。にも拘らず私をお救い下さった。どうして感謝せずにおれましょうや』

「フツ、そう思うなら、“先見の巫女”、粹晶よ。いずれ妾が知りたいと思う事が出てこよう。その時、そなたに取って差し支えない程度に答えてくれればよい」

『それだけで宜しいのですか？』

「ああ、充分だとも」

そう云って狗姫の御方は莞爾と微笑んだ。

妖界きつての美姫と称えられた彼女の女の微笑みは豪奢な華のように艶やかだった。

『狗姫の御方さま、西国に新しい時代が始まります。おめでとございます。粹晶めは、この大地の奥深くより、ご嫡男、殺生丸さまの国主御就任を言祝ことほがせて頂きます』

…【注釈】…

この後、権佐は、兄上に逢いに行きます。

西国帰還の話をする為に。

そう、第58作の小説『決断』へと続いていくんです。

話の流れから、どうしても、権佐が、誰から情報（犬夜叉が冥道から何時戻るか？）を入手したのか書かざるを得なくなりました。

そういう已やむに已やまれぬ事情から出来上がったのが“先見の巫女”の粹晶です。

久々のオリキャラ創作で、結構、苦労しました。 m (o) m

『愚息行状観察日記（29）』御母堂さま』』に続く

(29) 四魂の玉消滅のその後

「んっ?」

「どうされました、御方さま」

権佐の報告を受けてから狗姫は冥道石を手にズツと半妖と巫女の様子を窺^{うかが}っていた。

狗姫の指示に従い“先見^{さきみ}の巫女”白蛇の粹晶^{すいしゅう}に逢^あってきた権佐。

具体的な日数こそ粹晶は教えてくれなかったが、ともかく半妖が戻ってくることは判った。

真円の冥道に呑み込まれた異形の巫女。

巫女を救う為、半妖が冥道に入ったのが三日前。

不意に冥道石を覗^{のぞ}いていた狗姫^{いぬき}が声を発した。

当然、筆頭女房にして狗姫の乳母でもある松尾が何事かと問いかける。

「やっと動き出したようだぞ、松尾。半妖が巫女を見つけた」

三日間、冥道石を凝視し続けていた狗姫が少し興奮気味に答える。

「オオツ、四魂の玉が消滅したぞ。終わったな。これで四魂の玉の因縁^{いんねん}は断^たられた」

狗姫の言葉に松尾が応える。

「四魂の玉が出現したのは、確か、人の世を貴族が支配していた時代でございましたな。それから、かれこれ五百年、時は移り今は侍の時代にございます。その間、人と妖怪、双方に働きかけ争いの種を蒔き続けてきた悪しき因縁の玉。こうなつて良かったのではございませんか」

「そうだな。これで殺生丸も半妖も四魂の玉の因縁から解き放たれた訳だ」

徐に狗姫は立ち上がり、「遠見の鏡」に掛けられていた布を取り去った。

狗姫の思念に反応して鏡面が揺れる。

暫く後に映し出されたのは見覚えのある人里。

奈落が滅したと同時に巫女が冥道に呑み込まれた場所。

そして巫女が消え失せた途端、井戸も消滅した場所だ。

驚いたことに井戸が戻っているではないか。

何事もなかったかのように。

松尾が驚きの声をあげる。

「御方さま、井戸が！」

「戻っておるな、元通りに」

再び出現した井戸から緋色の衣を纏う半妖が出てきた。火鼠の毛で織った赤い童水干は否応なく目を惹く。どうした事だ、半妖め、巫女を連れておらんぞ。井戸の周囲に集まっているのは老いた巫女、法師、女退治屋、子狐妖怪、猫又、それに小僧。半妖は一同に何かを告げ、そのまま、その場から逃げるように走り去った。走り去った半妖の代わりに現われたのは殺生丸。小娘と小妖怪を連れている。

「やはり来たか、殺生丸」

「御方さま、『やはり』とは、若さまが現われると予想しておられたのですか」

「まあな、奈落を滅した今、アレの最大の関心は小娘の事だろうし」

殺生丸が年老いた巫女と話をしている。どうやら話がついたようだ。小娘が殺生丸に縋って泣きじゃくっている。

「どうしたのでしょうか、御方さま。りん様が泣いて若さまに何か訴えておられるようですが・・・」

「恐らく、殺生丸は、あの老いた巫女に小娘を預かるよう申し出たのだからな」

「何故、そのような事を！」

「考えてもみよ、松尾。殺生丸は西国に帰還したら鼠どもの駆除みじくに全力を挙げねばならんだぞ。そんな処に小娘を連れ帰ったならば、即刻、鼠どもの餌食えじきになりかねん。小娘は殺生丸の唯一にして最大の弱点だからな。まして、脆弱なる人間の身、おまけに天生牙と冥道石で既に二度も生き返つておる。もし襲われ殺されでもしたら蘇生はできん。今度こそ確実に死ぬ。無理だな。どう考えても今の時点で小娘を西国に伴うなど危険すぎる。鼠どもを完全に放逐でもせん限り」

「だからでございますか。あの巫女に、りん様を託すと」

「そうだ。それに、小娘は人の仔だ。人として知らねばならん事が多々ある。人の事は人でなければ教えられぬものだ。それにな、あの村には半妖が住み着いておるらしい。半妖とはいえ鬪牙の妖力を受け継いでおるのだ。その力は、人間は、勿論、並の妖怪の及ぶところではあるまい。半妖だけではない。あの退治屋と法師、人間としては尋常ならざる強さを有している。微力ながら子狐妖怪もいる。つまり、未だ乱世の人の世にあつて、あの人里は、最強の用心棒達に守られた村という訳だ。そうした事情を考慮して殺生丸も小娘を

託そつと思つたのだらうな」

「言われてみれば確かに……」

「それにな、まだある。松尾、あの巫女を見よ」

「はい」

「年老いておろう、然も、巫女。そなたなら何を連想する？」

「そうでございますな。通常、巫女は神に仕える未婚の女性。あの老齡ならば親族も少のうございましょう」

「その通りだ。だからこそ、殺生丸は、あの巫女に小娘を託せる。男の影がないからな」

「ハッ？ 御方さま、今、何と……」

「『男の影がない』だ。そなたも覚えておろう、松尾。昔から殺生丸は何か執着すると、よほどの事がなければ諦めようとはせん性質^ちだった。良い例が鉄碎牙だ。次期国主ともある者が西国を出奔^{わす}僅かな手がかりを頼りに二百年も人界を探し回りおつてからに。ア

レが執拗なまでに執着した『力』の象徴である刀。だが、そうした刀への執着さえも、あの人間の小娘に比べれば何程のことはない。殺生丸に取って小娘は『唯一無二』にして『不可欠』の存在なのだ。その大切な小娘の身近に男の影が見え隠れでもしてみよ。アレが許せると思うか」

「無理でございましょうなあ。これまでの若さまの行状から鑑^{かん}みて、ようやく狗姫の言わんとすることに得心がいった松尾は頭を振り振り言葉を返した。

『愚息行状観察日記(30) 御母堂さま』に続く

(30) りんの処遇

「おつ、御方さまっ！」

「ほほお〜」

“遠見の鏡”に写し出された光景に松尾が驚いて声を上げた。

よくよく見ると鏡の中の者ども、井戸の周囲に集まっていた法師や女退治屋、巫女、子狐妖怪も、皆、一様に驚愕ききょうの表情を浮かべている。

まあ、無理もないか。

あの殺生丸が人間の小娘の前に膝をついているのだからな。

妾わらわは既に見たことがあるが他の者達は初めて目にする光景であろう。ンツ、いつ見たかだと。

ほれ、皆も覚えておろうが。

まだ天生牙が冥道残月破を纏っておった頃、冥道を拡げんが為、殺生丸が、妾わらわに、その方法を教えろとこの城にやってきた時のことをあ奴のたつての頼みで冥道石を使って冥界の犬を呼び寄せてやったのだが。

冥界の犬は殺生丸の冥道残月破を喰らいながら冥道に呑み込まれもせず平然としておった。

まあ、あんな細い瘦やせこけた三日月の冥道ではな。

現世の者ならばイザ知らず、冥界の者を呑み込むことは不可能だった。

拳句、冥界の犬め、小娘と小僧を呑み込んで冥道の中に逃げ込んでしまったのだ。

それで殺生丸も犬を追って冥道の中に踏み込む羽目となった。

あの時は、随分、驚かされたな。

極めつけの人間嫌いであった殺生丸が、人間の子供を二匹も伴って、

我が城を訪問したただけでも驚きだったのに、あろう事が、それらを助けようとしたのだからな。

結果、天生牙の冥道は拡がりはしたのだが、冥界の邪気に触れ小娘が絶命してしまった。

か弱い人間の身に冥界の邪気は強すぎるからな。

冥界に入った途端、小娘は本当に呆気なく事切れてしまった。にも拘らず一緒にいた人間の小僧の方はピンピンしておった。

不思議に思ってから後で小僧に聞いてみたら四魂の欠片で命を繋いでおると云う。

それを聞いて納得した。

つまり小僧は死人なのだ。

だから冥界の中にあっても何ら影響を受けない。

既に死んでおるのだからな。

冥界の主を斬り亡者どもを浄化して殺生丸は戻ってきた。

息絶えた小娘を隻腕に抱いてな。

フツ、妾を仇のように睨みつけておったわ。

余程、小娘が死んだのが許せなかったらしい。

事の成り行きに憤る殺生丸に道理を説くは親の務め。

天生牙が死者を呼び戻せるのは一度きりと教えてやった。

殺生丸め、その事実には愕然としておったわ。

あの時、初めて、殺生丸は愛しい命を喪う怖れと悲しみを知ったの
だろうな。

然も、己には、どうすることもできないときておる。

心底、途方に暮れておっただろうな。

筋金入りの頑固者ゆえ殆ど表情を動かさしはせなんだが。

その代わりに従者の小妖怪が涙にくれておった。

アレの心情を代弁すると申してな。

こんな悲しいことはないとはかりに悲嘆にくれておったわ。

だから妾が冥道石を使い小娘が蘇生させてやった。

思いつくすな、あの時、殺生丸は小娘が目を開き息を吹き返すのをジ

ツと凝視していた。

するとな、急に氣道が回復したせいか、小娘が咳き込んだのだ。

一度は完全に途絶えた氣道が再び開いたせいだろうな。

咽て苦しかったのだろう。

小娘は涙目だった。

そうしたら、何と、殺生丸の奴、徐に小娘を寝かせた玉座に近付き、

スツと膝を折って跪いたのだ。

些かも躊躇せずにな。

そして隻腕を伸ばし小娘の頬をソツと撫でてやったのだ。

妾は初めて見たぞ、あ奴が、あんなにも優しく他者に触れるのを。

凡そ、妖怪であれ何であれ、容易に他者に触れる事も触れさせもしない息子だった。

幼い頃から己の力に頼むところが強く並々ならぬ矜持の高さを見せ

てきた殺生丸。

狷介孤高な気性も相まって母である妾は勿論、あれ程に慕っていた父親の鬪牙にさえ滅多なことでは膝を屈しなかった。

その誇り高き男が、“戦国最強”とまで謳われた大妖怪が、何の力も持たぬ小さな人間の童女の前に跪いているのだ。

あの小娘が殺生丸に取って如何なる存在であるのかが一目瞭然であるろう。

前回に引き続き今回で二度目になるな。

それにしても、あの氣位の高い殺生丸に、ああまでさせる事が出来るのは、きつと、後にも先にもあの小娘だけだろうな。

鏡に映る场景は、まるで誓約を交わしているかのように厳かだった。イヤ、事実、そうなのだろう。

“遠見の鏡”を通して見ているので殺生丸と小娘が何を喋っているのかまでは判らぬ。

だが、こうしているだけでも、見交わす殺生丸と小娘の間に結ばれた絆の強さが目に見えるかのようだ。

神気が漂う。

それを感じ取ったのだろうか。

老いた巫女が殺生丸に向けて深々と頭を下げた。

申し出に対する承諾の印しるしだろう。

言の葉を越えた神聖なる契約の証あかし。

鷹揚に頷き踵かかとを返そうとする殺生丸に女退治屋が必死の形相で声を掛けた。

だが、殺生丸は振り向くことなく何か言い返したようだ。

泣き崩れる女退治屋を法師が抱きとめている。

という事はだ、我が息子殿は、あの女退治屋に『お咎めなし』の沙汰を下した訳だな。

ンツ、小僧も殺生丸に何か言っておるな。

小僧にも同様に言葉を返した殺生丸。

その後は、もう振り返ることなく小妖怪を伴って双頭竜に乗り、その場から姿を消した。

パサツ・・・

狗姫いぬぎは“遠見の鏡”に布を掛け覆い隠した。

松尾が話しかけてきた。

「若さまは、あの女退治屋を許されたようでございますな、御方さま」

「どつやら、そのようだな。フフツ、あ奴も随分と丸くなったものよ」

「りん様のお陰でございましょうな」

「何はともあれ、これで、あ奴も心置きなく西国へ戻れるだろう」

「はい、それにしても長い放浪にございました。二百年に亘る国主わたの不在、正統なる主の御帰還に、さぞや西国の民草が安堵する事で

「いざいままじゅう」

『愚息行状観察日記（31）』御母堂さま』に続く

(31) 威嚇と牽制

“遠見の鏡”から掛け布を取り去る。

そのままならば台座に据えられた単なる大型の鏡。

だが、一度、鏡面に向かい思念を凝らせば、どれほど遠方であろうと見たい対象が映し出される不思議な鏡。

その所以から“遠見の鏡”と呼ばれる。

これは西国の国宝の一つにまで数えられる鏡である。

ひと月ぶりに狗姫は“遠見の鏡”を覗いていた。

それは、つい先程、権佐が西国から火急の用を携えて飛び込んできたせいであった。

部屋に通されるなり、権佐は困りきつた顔で狗姫に訴えたのだ。

「御方さま！」

「一月ぶりだな、権佐。殺生丸はチャンと国主の仕事をこなしておるか」

「それが・・・殺生丸さまは、未だ、西国に戻ってこられません」

「何と!？」

「それ故、こうして御方さまにお願いに参上しました。何卒、殺生丸さまに西国に御帰還遊ばすよう催促して下さいませ。留守居役の

尾洲さま、万丈さま、ご両名からのたつての要請にございます」

それで、今、こうして“遠見の鏡”を眺めているのであった。待つほどもなく目当ての人物が映し出された。

場所は周囲の様子から判断して、どうやら殺生丸が小娘を預けた人里に近いようだ。

狗姫は思わず言葉を漏らした。

「あ奴、一体、何をしておるのだ？」

殺生丸は小妖怪とともに物影に隠れているようだった。

とはいっても木陰から目立つ風体を殆ど隠しきれていない。

見事な白銀の髪、豪華な毛皮、白皙の美貌、長身の体軀。

それにも拘らず、少し前にいる小娘や人間の小僧どもは殺生丸と従者の存在に全く気付いていない。

何故だろうか。

強いて言うなら殺生丸と従者の周辺を霧が薄く覆っているのが気に掛かる程度だ。

筆頭女房にして狗姫の乳母でもある松尾が口を挟んできた。

「御方さま、どうも、若さまは“隠形の術”を使われているようです」

“隠形の術”とは忍者が姿を隠す為につかう術である。

物影に潜む【観音隠れ】、地面に伏せて身を縮め気配を消す【鶉隠

れ】、木に登って隠れる【狸隠れ】、水中に飛び込んで身を隠す【狐隠れ】など様々な隠れ方がある。

しかし、殺生丸の場合は、そうした人間の忍者が使う術とは根本的に違う。

妖力を以って自分と小妖怪の周りに霧を作り出し自らの姿を隠しているのだ。

霧が鏡のように作用して周辺を映し出し、結果的に、殺生丸と小妖怪の姿は見えない。

現代風に言うなら『光学迷彩』とでも呼ぶべきだろうか。

「松尾よ、“隠形の術”は判るが、何故、殺生丸は、あんなことをしているのだ？」

「恐らくは……りん様を守る為ではございませんでしょうか」

「守る？」

鏡の中に映る小娘に目をやる。

小川に掛かった橋の前に人間の小僧どもが陣取っている。

状況から判断して、どうも小娘は小僧どもに“通せんぼ”をされているらしい。

「はい、御覧下さいませ、御方さま。りん様を囲んでいる人間の男の子どもを。あれは、明らかに、りん様を意識している様子。あの状況から察するに、橋を渡ろうとするりん様に意地悪をして通すま

いとじているようです」

「何故、そんなことをするのだ？」

「好きな子に意地悪をして意識させたいのでございますよ。若輩ゆえの稚拙な愛情表現とでも申し上げれば宜しいかと。何しろ、りん様は、大層、愛らしい女の童わらわにございますから。早速、男おの子どもに目を付けられたかと」

「成る程、それですか。殺生丸が、あんな可笑おかしな真似まねをしているのは」

尚も鏡面を見ていると、遂に、殺生丸の堪忍袋の緒が切れたらしい。纏まとっていた霧を払って正体を現した。

小娘を庇かばうように前に乗り出したかと思うと、人間の小僧どもをギロツと睨にらみつけたではないか。

いきなり現われた殺生丸に驚いた人間の小僧どもは暫しばし固まっていたが、正気づくなりワツと蜘蛛の子を散らすように逃げ出していた。

それを見て狗姫は堪たまらず笑い出した。

「クツクツ・・・ア~~~~ツハハハハ・・・ああ、可笑しい。愉快、愉快、松尾よ、見たか。殺生丸の奴、人間の小僧どもをシツカリ威嚇しておったぞ」

「左様にございますな。尤も、男の子といえども男には間違ひございません。先々の事を考えれば若さまの行動は的確であったかと。今から、りん様に手を出さないよう先手を打たれたのでございませう」

「クククツ・・・威嚇と牽制か。松尾よ、殺生丸が、ああも独占欲が強いとは思わなんだぞ」

「これまで、りん様ほどに執着する存在が無かっただけにございませう」

「それにしても、あれでは、まるで過保護な父親のようではないか。それも、“超”が付きそうな」

「若さまに取っては、それほどまでに、りん様が大事なのでございませう」

「ンツ？ちよつと待て。ということとはだ、殺生丸の奴、この一月、ズツと小娘の側でああして見張っていたという訳か。呆れたな、あれでは西国に戻ったとしても屢城を抜け出して小娘に逢いに行きそうだな。フフツ、見ておれ、松尾。その内、今度は殺生丸が人里へ通い過ぎると尾洲や万丈が泣きついてくるに違いないぞ」

「・・・・・・・・」

「クツクツ・・・いずれにしても、まだまだ、これから色々と楽しませてくれそうだな、我が愛しの息子殿は」

数日後、殺生丸が西国に帰還したと権佐が報告にやってきた。

そして、狗姫の予想通り、西国の新しい国主は三日おきに人里へ通うのが通例となった。

『愚息行状観察日記（32）』御母堂さま』』に続く

(32) 禁色(きんじき)の少女

誰が想像するだろう。

巨大にして壮麗な城が蒼穹そらに浮かんでいるなどと。

だが、実際、妖界でも最大領土を有する西国の前王妃にして当代国主である殺生丸の生母、狗姫いぬぎの城は高い空の上にある。

自由奔放な主の気性そのままに城は風の吹くまま自由に所在を変え場所を特定するのさえ難しい。

おまけに厚い雲が城を覆い隠し目晦めくらましの役目を果たす。

生半可な妖力の持ち主では到達すら不可能な城。

その上、更に主が作り出した強力な結界に守られている。

優美な外観に反して堅固な要塞としての機能をも備えている。

神出鬼没にして難攻不落な天空の城。

それが嘗て“白銀の狗姫いぬぎ”と呼ばれた伝説の軍師の居城である。

そんな城の奥まった一室で女主と御付きの女房が話に興じている。

女房の名は松尾、筆頭女房にして城主の狗姫いぬぎの乳母めのとでもある。

ここ数年、狗姫が“遠見の鏡”を覗のぞかない日はない。

それは、つい三年前、二百年ぶりに西国に帰還し国主の座つに就いた息子の殺生丸を見る為ではない。

狗姫が“遠見の鏡”を通して眺ながめているのは妖界ではなく人界である。

それも殷賑いんしんを極める都ではない。

華やかな都から遠く離れた東国の鄙ひなびた人里。

鏡面に映し出されているのは未だ幼さが抜けきらない人間の少女である。

その姿を見れば誰もが『愛らしい』と思うだろう。

大きな黒目がちの目、長い睫毛、形の良い眉、小ぶりな可愛い鼻、花の蕾のような唇が小さな顔に絶妙に配置されている。

白地に薄紅を刷はいた白桃のような肌が艶つややかな漆黒の黒髪に映える。

『鄙へんには稀まれな美形』、この言葉が、これほど似合う少女も他にいない。

少女は鮮やかな紫色の小袖を纏まとっている。

それが、どれほど高価な品か、認識している村人が果たはたして何人いることが。

恐らく殆どの者が気付いていないだろう。

その価値を知るのは、村に住み着いた法師と退治屋、それに少女の養い親の巫女くらいなものだろうか。

本来、こんな鄙へんびた人里では目にすることも出来ないはずの紫の色。『紫むらさき』、それは古来から『貴色きしき』とも『禁色きんしき』とも呼ばれ尊とうばれてきた色。

高貴な身分でなければ身に纏まとうことさえ許されなかった色。それ故にこそ『禁色きんしき』と呼ばれてきた『貴色きしき』であった。

小袖の贈り主は、それを意図していたのだろうか。

“禁色の小袖を纏まとう少女には何人なんびとたりとも触れること罷まがり成らぬ”と。

紫の小袖を纏まとう少女の横を連れ立って歩いているのは紅白の巫女装束を着込んだ老女。

少女の養やしない親である。

眼帯代わりに刀の鍔で右目を覆っている隻眼の巫女。

否いやが応にも強烈な印象を与える異形いぎやうの老女である。

そんな厳いかめしい容貌にも拘らず巫女の醸かもし出す雰囲気は暖かく養やしない仔の少女が老女を慕こっている様子が良く判る。

まるで婆様と孫のような微笑ましい情景である。

巫女は包みを抱えている。

今から二人して何処かへ出かけるらしい。

少女が老女を急せかしている。

誰か急病人でも出たのだろうか。

こんな鄙へんびた村里に医師がいようはずもない。

巫女は、この近在の村々の薬師くすりしも兼ねている。

病人を診れば子供を取り上げる産婆役もこなす。

少女は、そんな養い親に付き従い甲斐甲斐しく助手役をこなす日々を送っている。

狗姫が、そんな二人を見て口を開いた。

「松尾よ、こうして見ると、この三年間で小娘は随分と娘らしくなってきたな」

「はい、御方さま、喜ばしいことに、りん様は、大層、健やかにお育ちです」

「クククツ、殺生丸め、あの紫の小袖は、わざとだな。相変わらず嫉妬深いことだ」

「左様にございますな。あの禁色の小袖の意味、判る者には判りませう」

「フフツ、あの小袖も、小さくなってきたな。松尾よ、そろそろ新しい物を誂えるよう相模に申し付けておいてくれ」

「畏まりました。今度は季節に合わせて桃色の小袖など、どうぞしませう」

「そうだな、地の色はそれでいい。柄は・・・ウム、手毬尽くしにしよう。小娘の早急なる成長を願ってな。まだまだ先は長そうだ。クツクツ、さぞや殺生丸が焦れておるうて」

狗姫が冥道石を手に眺めつつ面白くて堪らぬとばかりに笑う。

絶世の美貌を誇る佳人が溢す笑みは艶麗で百花繚乱を思わせるほどに華やかだった。

「御方さま、相模殿が、早く、りん様にお逢いしたいと申しております」

「フフツ、だろうな。相模は殺生丸の乳母、アレの育ての親ともいうべき存在だ。小娘に逢いたがるのも道理。とはいえ、小娘は未だ初潮も迎えておらぬ子供。当分、お預けだな」

「それにしても、御方さま、当初、“遠見の鏡”で拝見していたのは若さまの筈でしたのに、何時の間にか、りん様の成長を眺める仕儀になりましたな」

「まあな、だが仕方ない。あんなニコリともしない無愛想極まる息子を眺めておっても少しも面白くない。どうせ、西国でも鹿爪らしく執務をこなしておるのだろうよ。それよりは表情豊かで愛くるしい小娘を見ておる方が遥かに楽しい」

「そうかもしれないな」

「それにな、松尾、あの小娘を見守ることは必然的に殺生丸を助けてやることに繋がる、違うか？」

「仰せの通りになります」

『愚息行状観察日記（33）＝御母堂さま＝』に続く

(33) 三年後

「おやつ、小娘と巫女は何処へ行くのか？と思っっていたら・・・。
あれは法師の家ではないか」

「御方さま、そう言えば法師の妻である女退治屋が臨月でございま
した。多分、産気づいたのでございましょう」

「そうか、だから、使いの者が来たのだな」

真新しい茅葺きの屋根、木の香がしそうな新築の家の中、女退治屋
が大きな腹を抱えて蹲すまっている。
必死に痛みに耐える女の顔が見える。
間違いなく陣痛が来ている。

瓜二つの童女、双子が母の横に心配そうに張り付いていた。
家の中に入った小娘と巫女は、すぐさまテキパキとお産の準備を始
めた。

巫女は女退治屋を床に寝かせ、小娘は双子を落ち着かせてから竈かまどで
湯を沸かし始めた。

その後、一時（いつとき）約二時間）ほどして女退治屋は子供を産
み落とした。

赤子は元気な男の子だった。

巫女が慎重に生まれたばかりの赤子を抱え産湯うぶゆに浸ける。

すると、まるで、その時を計っていたかのように法師が帰ってきた。
法師の横には半妖の姿も見える。

半妖は大の大人でさえ往生する米俵を軽々と三俵も抱えていた。
相変わらぬ馬鹿力だ。

また法師と組んで何処ぞで荒稼ぎをしてきたようだ。

あの法師は口八丁手八丁で相当な甲斐性がある。

この近在で妖怪退治を請け負って家族を養っているらしい。

今回の報酬は米俵三俵か、あれだけ有れば、親子五人、自分、喰うには困らないだろう。

小娘と巫女が後産の始末をして帰っていく。

行きも帰りも因縁の、あの“骨喰いの井戸”の横を通って。

狗姫いぬぎが井戸を見て何か思いついたのだろう。

松尾に話しかけてきた。

「それにしても、松尾よ、あの奇妙な衣装の巫女は、どうなったのであるうな」

「奇妙な衣装の巫女？ ああ、犬夜叉殿のお連れにございますな。

そつでございますね、一体、何処ゆくえへ行方を晦くらましたのやら。この三年、全く、姿を見かけません」

「奈落の死とともに出現した冥道に、あの巫女は呑み込まれ姿を消した。すぐさま半妖が後を追ったが、結局、戻ってきたのは半妖だけだった。あの時、妾わらわはズツと冥道石を覗いておったからな。首尾よく巫女が四魂の玉を消滅させたまでは知っておる。だが、その後、半妖と巫女は、何処いすこへともなく姿を消した。両名の間は何が起こり、何故、半妖だけが戻ってきたのか、妾わらわには、その理由が、どうしても判らなんだ」

「確かに御方さまの仰る通り、戻ってきたのは犬夜叉殿のみ、巫女

は戻ってきませんでした。当事者ではないので、どのような事情があつて、そうなったのかは、皆目、見当もつきませんが。それにしても、今、思い返してみても、あの巫女の衣装の奇天烈なこと。私も、結構、長く生きておりますが、あんな奇妙な装束を目にしたのは初めてでございました。そもそも男ならイザ知らず、女子が、あのように脚を諸だしにするなど許されることではございません。実に破廉恥極まりない格好にございます。尤も、巫女が、異界から来たことと、あまりに堂々とした態度だったので、そういうものなのだろうと自分に言い聞かせておりましたが。あの井戸は異界を繋ぐ通路の役割を果たしていたと聞いております。巫女が、異界から、この世界に来たのは四魂の玉を滅するのが目的、それを消滅させた以上、もう役目を終えた訳でございます。ですから、元の世界に帰り、コチラに戻ってこなかったのでは？」

「フム、やはり、そなたも、そう考えるか、松尾」

「はい」

「ならば、巫女は、もう戻ってこないと考えるべきだろうか？」

「巫女の役目が、それだけでしたら……。ですが、四魂の玉を滅する事だけが巫女殿の役割だったのでしょうか。まだ、何か、他の役割が残っているのではないかと思えてなりません。というよりも、そう信じたいのでございます」

「信じたい？」

「はい、若さまが、りん様と運命の出逢いをしたように。犬夜叉殿と巫女の邂逅も目に見えぬ因果の糸に導かれていたと思えてならないのでございます。正しく出逢うべくして出逢った宿命の恋人。それに両名の間には四魂の玉との因縁も加味しております。悲運の中で散った前世の巫女の悲願が今生でこそ叶えられるのではないかと」

「だが、巫女は戻ってこなかったぞ」

「試されているのではないでしょうが、天に。両者の覚悟が、どれほどのものか」

「では、二人の意思が天に通じた時、巫女は帰ってくると」

「そうであって欲しいと私は願っております」

「そうだな、そうなるといいな」

どうやら、半妖と巫女の願いは天に聞き届けられたらしい。ひと月後、よく晴れた麗らかな春の日に巫女はヒョッコリ戻ってきた。

小娘が、巫女の帰還を、大層、喜んでいた。

勿論、老巫女も、法師と女退治屋も、それから子狐妖怪も。
だが、とりわけ誰よりも半妖が喜んでいただろう。
己が魂の半身を取り戻したのだから。

『愚息行状観察日記(34)』御母堂さま』』に続く

(34) 待つ者、待ち続けた者

三年ぶりに戻ってきた巫女は老巫女の跡目を継ぐことになったらしい。

あの奇妙な衣装を脱ぎ捨て紅白の巫女装束を纏っている。

その姿は何ら違和感を感じさせない。

寧ろシツクリと馴染んでいる。

まるで、昔から、ズツとその格好だったかのように。

恐らく、異界の衣装を脱ぎ捨てることによって、巫女は、嘗ての^{かつ}世界を捨て、これからは、この世界で生きていくのだという覚悟の程を皆に示しているのだろう。

巫女は老巫女の許へ、毎日、修行に来るようになった。

薬草を煎じたり神事を手伝ったりと。

これまでは小娘が介助してきた老巫女の仕事の全てを巫女が引き継ぐことになったらしい。

巫女が戻ってくるまでは、小娘に跡目を継がせたいような意向を、老巫女を含め周囲の者達から、それとなく感じたが、殺生丸がいる限り、それが叶えられるはずもない。

老巫女も、後継者の心配が無くなり、内心、ホッとしているのではないだろうか。

晴れて半妖と夫婦^{めおと}になった巫女は、今の処、法師の家に仮住まいしている。

巫女と半妖の住まう家が村総出で建てられている真っ最中だ。

法師が、米俵を一俵、気前よく村の衆に手間賃として差し出したせいもあるだろう。

通常では考えられないような突貫工事で作業が進められている。

後二・三日もすれば建ちあがりそうだ。

殺生丸が新しい小袖を携えて小娘に逢いにきた。

従者の小妖怪が包みから小袖を出し得意気に小娘に見せている。

桃色の地に様々な色合いの手毬が躍る小袖。

さぞや少女に良く似合うだろう。

贈られた小袖を手に少女が満面の笑みを浮かべている。

春の柔らかな陽射しの中、嬉しそうに笑う少女は花の精のように愛くるしい。

“遠見の鏡”に映し出された少女に狗姫いぬめきは愛おしそうに目を細め口を開いた。

「松尾よ、小娘は本ほんに愛らしいな」

「はい、御方さま、花が綻はなぶような笑顔とは、当まにりん様のごに
ごぞいますね」

「相模は、コチラの注文通りに小袖を仕立ててくれたようだな」

「勿論にごぞいます。りん様は若さまが寵愛する大事な姫君。その
姫が身に纏う衣装を御方さまが直々（じきじき）に指示されたので
す。相模殿も、さぞや、気合を入れて用意されたことにごぞいまし
よう」

「フツ、それにしても、小娘に初潮が来るまで、後、何年かかろう
か」

「左様にごぞいますね。如何に人の仔の成長が早いと申しましても・

「……りん様の様子から判断して少なくとも、後、数年は掛かるかと」

「気の長い話だ。殺生丸も辛いところだな」

「“待てば海路の日和あり”でございませよ、御方さま」

「あ奴の心情を思うと一日も早く、“潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな”になって欲しいものだな」

「万葉集にございますな。詠み人は額田大王でございませうか。うまく初潮に潮を掛けられましたな。当意即妙のご返答、お見事にございます。」

「フフツ、相変わらず察しが良いな、そなたは。“熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もなかひぬ、今は漕ぎ出でな”から引用した。クツクツ、愚息の偽らざる望みそのままであろうが」

「犬夜叉殿の方が兄である若さまより先に身を固める仕儀になってしまいましたね」

「そうだな、だが、こればかりは仕方ない。半妖と巫女は殺生丸と小娘と違い、元々、年も外見も釣り合っていたからな。それに、半

妖の場合、今回、首尾よく巫女が戻ってきたから良いようなもの、下手をすれば、二度と逢えない可能性もあった。三年もの間、巫女に逢うことは愚か、消息を知ることさえ出来なかったのだ。その間の半妖の真情を思うとな。無碍むげには扱えぬ。よく耐えたものだ。如何に志操堅固な剛の者であろうと心が折れそうになる時もあったであろうに」

「それは考えるだに辛つらうございますな」

「巫女が戻ってくる保証さえあればな、待つのも、そう難しいことではなかっただろうよ。しかし、実際には何の確約もない。白とも黒ともつかぬ不透明な先行きの見えない未来。絶望ではないが希望も定さだかではない。それでも、唯ひたすらに巫女が戻ることを希こいねがい待ち続けるしかない。想像以上に辛い状況だったろうな。だが、それさえも天から兩名に課された試練だったのかも知れん。半妖が巫女を思う心が、どれほどのものか、同様に巫女が半妖を思う心もな。両者の互いを思う心がピタリと符号した時、異界とこの世界の通路は繋がり巫女は戻ってきた」

『愚息行状観察日記(35)』御母堂さま』』に続く

(35) お義兄(にい)さん

“遠見の鏡”に小娘に別れを告げ空中に浮かび上がる殺生丸の姿が映し出された。

小妖怪が例の如く殺生丸の毛皮にしがみ付いている。

「ンツ、此度の逢瀬は随分と短いな。殺生丸の奴、西国に急用でも残してきたか」

「そうかもしれませんが。恐らく・・・若さまの事ですから逸早く嗅ぎ付けられたのではないでしょううか」

「何をだ？ 松尾」

狗姫は“遠見の鏡”から視線を外し腹心の女房に向けた。
好奇心に耀く主の黄金色の双眸を思慮深い木賊色の双眸が受け止める。

松尾は考えを慎重に纏めつつ答えた。

「巫女の気配でございます。御方さまも御存知のように若さまの嗅覚の鋭さは尋常ではございません。西国でも三本の指に数えられる程の精度を誇っておられます。ですから、あの人里に下りられた瞬間、イエ、下手をすると、それ以前に巫女が戻ってきたことに気付かれたのではないかと」

「そうかもしれん。だが、それが、何故、殺生丸が小娘との逢瀬を切り上げることに繋がるのだ？」

「御方さま、思い出して下さいませ。奈落の体内で、若さまが、巫女と、どのように接していたのかを」

「ンツ、あの化け蜘蛛の体内でのことか。そうだな、云われてみれば、あの時、殺生丸は可能な限り巫女との接触を避けておった。隻腕の頃ならばイザ知らず、両腕が揃っておったにも係わらず、巫女を抱き上げることは愚か、頑かたくなまでに指一本たりとも触れるまいとしておったな。フム、つまり、それほどまでに殺生丸は巫女を忌避しておるといふ訳か」

「これまでの様子から判断して、若さまは巫女を『敵』とまでは思っておられぬようですが、極力、関わりを持ちたくない相手と認識されている節がございます。どう好意的に考えても、相性が良いとは、お世辞にも申せませんでしょう。寧ろ『天敵』に近い存在では

ないかと」

「確かに、巫女と小娘に対する殺生丸の態度は天と地ほどにも違うな。殺生丸の奴、冥界では、隻腕にも拘らず天生牙を握ったまま小娘を抱きかかえておったものな。それはもう見るからに大事そうに愛おしそうに」

「それはともかく、巫女は弟である犬夜叉殿の伴侶にございますから、若さまに取っては義理の妹に当たる訳でございます」

「ホホオ〜殺生丸の“義理の妹”か、成る程、云われてみればその通りだな。それは面白い！」

「御方さまには面白くとも若さまに取っては全く歓迎できない事態かと」

狗姫は、もう松尾の云う事など聞いていなかった。即座に“遠見の鏡”に向き直り命令を下していた。

「遠見の鏡」よ、殺生丸を映し出せ」

パツ、それまで、りんを映していた鏡面が切り換わった。

飛行する殺生丸の姿を捉える為、視点は上空から眺める俯瞰的構図を取っている。

徐々に視点が目標である殺生丸に近付いていく。

パツ、今度は視点が横からの観点に切り換わった。

比較的、低い位置で村を横切って飛ぶ殺生丸が映る。

そのせいだろうか、殺生丸の姿がハッキリと見える。

陽を弾いて煌めく白銀の髪、髪と同色の豪華な毛皮、妖鎧、腰に差

した世にふたつとない二本の名刀、天生牙と爆碎牙、風に靡く流水

模様の帯は飾り結び、額を飾るのは三日月の輪、頬に流れる二筋の

朱の妖線、さながら月の化身のような冴えた美貌の瀟洒な若武者姿

最近、殺生丸は己が姿を殊更に誇示するかのように村の上空を飛ぶ

ようになつた。

大方、小娘に懸想する人間の男どもへの威嚇と牽制を兼ねているのだらう。

草叢に座る半妖と巫女が殺生丸を見上げた。

次の瞬間、三年ぶりの再会に挨拶でもしようと思つたのか、巫女が

親しげに殺生丸に向かって何か呼びかけたらしい。

殺生丸の眉間に瞬時に皺が走り柳眉が逆立った。

見るだに不快そのものの表情をしている。

半妖も啞然として己が妻を見詰めている。

何だ！？

何を言つたのだ！？

「松尾よ、先程、巫女は殺生丸に何を言ったのだろう」

「御方さま、流石に、それは判りかねます」

「知りたいな」

「……………」

「権佐を呼んで調べるように申し付けておけ。小妖怪に聞けば判らるだろう」

後日、城を訪ねてきた権佐から事の次第が報告された。

小妖怪に酒を奢おごってやった処、ベロンベロンに酔っぱらって、権佐が聞きだすまでもなく自分からベラベラと喋り出したそうだ。

こちらの思惑通りではあるが、小妖怪め、ちと呆れたぞ、何と口の軽い。

殺生丸を、この上なく不快にさせた巫女の言葉。

それは『お義兄にいさーん！』の一言だった。

巫女の言葉のせいで上機嫌だった殺生丸の気分は一気に急降下し不

機嫌極まりない状態に陥ってしまったらしい。

嵐のような愚息の不機嫌は西国に戻ってからも延々と尾を引き、次回、小娘を訪問する日まで回復しなかったそうだ。

小妖怪は、その間、ズツと殺生丸に八つ当たりされ続けたと権佐に管を巻きながら、散々、愚痴を零していったらしい。

それにしても、殺生丸に『お義兄さん！』とはな。

あの巫女、たいそうな度胸の持ち主だな。

少しも殺生丸を怖れていない。

殺生丸から小娘を託された際の老巫女の態度も肝が据わっておったが、巫女とは、皆、あのような者ばかりなのか。

妖怪でさえ殺生丸に対して平常心を保てるのは極少ないものを。

クククツ、大したものだ。

半妖が妻に娶る訳だな。

殺生丸でさえ怖れない女だ。

半妖ならば、尚更であろう。

今後、あの巫女が間に立つ限り殺生丸と半妖の仲が決定的に悪くなることはないだろう。

兄弟仲良くとまでは些が無理があるが、少なくとも以前のように血で血を洗うような事態に陥ることだけは避けられるに違いない。

『愚息行状観察日記(36) 御母堂さま』に続く

(36) 急変

「いかんっ！」

長い白銀の髪を揺らし佳人が叫んで立ち上がった。

眸の色は金、頬に走る赤い一筋の妖線が白皙の美貌を更に際立たせている。

女としては長身、絶世の美女である。

立ち姿までもが女神のように麗しい。

妖界で最大領土を誇る西国の王、殺生丸の生母にして王太后の狗姫いぬきである。

そして、この天空に聳そびえる巨城の主でもある。

「松尾っ！ 松尾はおるか！」

「何事にございますか、御方さま」

常ならぬ主の声に慌てて筆頭女房の松尾が駆けつけてきた。

部屋に入るなり松尾は狗姫の様相に目を瞠みはった。

いつも鷹揚に構えている主が血相を変えていたのだ。

「説明している暇はない。権佐が来ておったな。大至急、呼んでまいれっ！」

「はっ、はいっ！」

三年前、人界を放浪していた狗姫の嫡男、殺生丸が、二百年ぶりに西国に帰還した。

そして、先代の鬪牙王亡き後、長らく空位であった西国王の位に就いたのは耳目に新しい。

二百年もの間、亡き夫の遺言を忠実に守り西国を狙う野心家どもに睨みを効かせてきた狗姫にとっては、やっと肩の荷が下りた慶事であった。

そんな狗姫の、ここ数年の楽しみは、“遠見の鏡”で人界を覗くことである。

何故、妖界ではなく人界なのか。

それは覗き見る対象が“りん”という幼い人間の娘だからであった。大妖怪の狗姫が、何故、人間などを具ついでに観察するのか。

答えは簡単である。

“りん”という人間の娘が殺生丸の許婚いいなづけ、所謂狗姫に取って将来の嫁だからに他ならない。

殺生丸が、極めつけの“人間嫌い”なのは妖界あまねに遍く知れ渡っている事実である。

だが、そんな息子が、どういう巡り合わせなのか、“りん”という幼い人間の娘を愛した。

いや、西国に帰還した今も尚、揺るぎない愛情を注ぎ続けている。

この三年間、殺生丸は、三日おきに欠かさず娘に逢いに人界を訪れているのだから。

その行動の一部始終を狗姫は“遠見の鏡”を通して見てきた。だからこそ、今回の異常事態も逸早く察知した。

鏡の中、りんが、突如、現われた異形の妖怪に襲われている。まるで滝のような雨が激しく降りしきる人里。

篠突く雨の中、濡れもせず女のような顔立ちの男が立っていた。女とも見紛う顔を彩る原色の紋様が何とも毒々しい。

男の背には蝶のような大きな羽根が、いや、あれは蝶ではない、蛾だ。

それも、恐らくは猛毒の鱗粉を撒き散らす毒蛾の羽根だろう。

男は薄い結界を全身に張り巡らしているらしい。

結界が雨粒を弾いて男の全身を白く浮き上がらせている。

鞭を振りまわし徐々に川の方へとりんを追い込んでいく毒蛾の妖怪。わざと鞭の狙いを外しているのが判る。

猫が鼠を甚振るように男はりんを弄んでいるのだ。

その証拠に鞭は髪の毛ひと筋の差でりに当たっていない。

怖ろしいほどの精度で繰り出される鞭。

相当な手練だ。

傷ひとつ残さぬよう敵命されているのだろう。

気付くべきだった。

あの鮮やかな蝶が、りんの前に現われた時に。

大雨で川の水嵩が信じられない早さで増している。

明らかにりんは誘い込まれている。

この襲撃の目的は“りんの命”。

増水した川に落として込んで溺死させる積りなのだろう。

それも偶発的な事故と思わせるよう証拠ひとつ残さぬように。

こうした巧妙かつ卑劣な手口を使うのは間違いなく・・・あ奴だ！

大した実力もない癖に欲だけは並外れて深い男。

己の欲の為、他者を陥れることに何の痛痒も感じない唾棄べき輩。

ギリッ・・・狗姫が唇を噛みしめた。

鋭利な牙が剥きだしになる。

ようも、この狗姫を出し抜いてくれたわ。

覚えておれ、この借りは必ず返すぞ、豹牙！

(37) 救出

「御方さまっ！」

権佐が松尾とともに部屋に飛び込んできた。

その時、鏡の中の毒蛾男が振り回した鞭が、りんの頭部に当たった。ごく軽く触れた感じだったが、実際には相当の衝撃だったのだろう。りんが増水した川に落ちた。

毒蛾男は、りんの髪紐を狙っていたらしい。

鞭で弾き飛ばされた紅白の髪紐が空中で弧を描き計算したかのようにポトツと男の手に落ちてきた。

川に落ちたりんが息をしようと必死にもがいて水面に顔を出した。

次の瞬間、上流から流れてきた太い丸太が、りんを……。

「りんっ！」 「りんさまっ！」 「

狗姫いぬきが、権佐が、松尾が叫ぶ。

狗姫達は知る由よしもなかったが、りんが落ちた川の上流には木材の切り出し場があり、そこには丸太が繫留けいりゅうされていた。

その切り出し場が、この大水で決壊し、繋がれていた木材が流れしてきたのだ。

矢のように川を流れ下る丸太が、凶器となって、りんに襲いかかる。避ける間もなく、丸太が、りんの頭部を直撃した。

りんの小さな顔が、ゆっくりと水中に消えていく。

それを見届けた毒蛾男は任務を完了したと思ったのだろう。

ニヤリと笑ったかと思うと背中せなかの羽根を飛ばたかせ雨の中へと消え

ていった。

非常事態に狗姫が眦まなじりを決して矢つぎばやに命令を出す。

「天鼓、おるかっ！返事をいたせっ！」

「一鼓いちこ！」 「きゅいつ」

「二鼓にこ！」 「きゅきゅいつ」

狗姫の要請に応え、突如、白い兔うさぎの形をした山彦の精が二匹、パツと空中から現われた。

「一鼓は権佐につけ。二鼓にこは妾わいわに」

狗姫の言葉のままに一鼓が権佐の右肩に、二鼓が狗姫の左肩に、スツと取り付いた。

「権佐、“遠見の鏡”の前に立て。そうだ、妾わいわの前にだ。事は一刻を争う。今から人界への道を開く。よいか、権佐、必ずや、りんを救出して戻れ」

「はっ！」

権佐への下知^{げち}を下すや否や、狗姫は“遠見の鏡”に向かつて、いや、実際には間に権佐を挟んで、印を組み呪^{しゅ}を唱^{とな}え出した。

「アモーガ オン アボキヤ シツデイ アク オン アミリタ
テイセイ カラ ウン オン コロコロ センダリ マトウギ ソ
ワカ、次元透過の術、“神点”、走波！」

狗姫が印を切り呪^{しゅ}を唱え終えた途端、“遠見の鏡”が光を発し始めた。

光はドンドン強くなり目も眩^{くら}まんばかりに輝きだす。

眩^{まぶ}しさが最大限に到達した瞬間、光は一気に収束し鏡の中に吸収された。

光が消えると同時に権佐の姿も狗姫達の前から消えていた。

人界へと転送されたのだ。

先程まで曇りなく人界の様子を映しだしていた鏡面が、今は全ての光を失った鈍^{にぶ}い闇の色に変わっていた。

りんの身が案じられてならないのだろう。

心配そうに松尾が口を開いた。

「御方さま、りんさまは大丈夫でしょうか」

「判らん。あの怪我と・・・大水だ。権佐が一刻も早く見つけてくれることを祈るしかないな」

鏡から発する眩い光に全身を包まれた。

そう感じた刹那、気が付けば権佐は叩きつけるように降る雨の中に立っていた。

目の前には大水で氾濫する川が流れている。

妖界から人界への転送は上手くいったらしい。

いつも“遠見の鏡”が映し出していた人里に権佐はいた。ハッ、呆けている暇はない。

即座に下流に向かって権佐は駆け出した。

一刻も早く、りんさまを助け出さねば！

傷を負った上、この激流に呑み込まれたりんさま。

急がねば御命そのものが危うい！

銀色の雨を突っ切って、黄、黒、焦げ茶色が雑じり合った斑の閃光が走る。

土を含んで流れ込む大量の泥水のせいで川の水は透明度を失い濁り始めている。

走りながら妖視で川を走査する権佐。

右肩には体毛を周囲の色に同化させた一鼓がピタリと貼り付いている。

すると信じられない光景が出現した。

川の流れに逆らうように、花が、薄紅色の花が浮き上がってきたのだ。

桜だ！ 何千、何万とも知れぬ桜の花びらが！

在りえない！ 桜は春に咲く花だ。

今は夏が終わったばかりの秋。

だが、現実には桜の花が川面を埋め尽くしている。

ザアアツ・・・無数の桜の花弁は意思を持つかのように川から浮かび上がった。

球体、違う、楕円形の塊りとなって。

桜の花弁の集合体は何かを包み込むような形をしている。

そしてフワリと地面に着地した。

桜の花が霞かすむように消え現われたのは・・・りんさま！

桜の花弁が変化した小さな扇が少女を守るように胸元むなもとに鎮座していた。

りんの頭部からは血が流れている。

権佐は慌てて駆け寄り、りんの胸に耳を当ててみた。

弱いながらも規則正しい心臓の鼓動が聞こえる。

(有難い、生きておられる！)

幸いにも気絶したせいで、りんは水も飲んでいない様子だった。

権佐は急いで血止めを施し主の大切な姫を腕に抱きかかえた。

『愚息行状観察日記(38)』に続く

(38) 桜の加護

「一鼓、伝送を頼む」

「きゅいつ」

権佐の言葉に右肩の一鼓が応じる。

それまで伏せられていた長いびしょ濡れの耳がピンと立った。雫が飛び散る。

激しく降りつける雨に権佐も全身ずぶ濡れである。

川に落ちたりんは言わずもがなである。

「聞こえますか、御方さま」

「ああ、多少、雨音が煩いがチャンと聞こえるぞ」

権佐の問いかけに僅かな時間差を置いて狗姫の声が返ってくる。

二鼓が送り返してきたものだ。

見事な送信と受信である。

二匹の天鼓の連携能力の賜物であった。

「りんさまを発見しました。御命に別状はないものの、かなり弱っております。至急、そちらに転送を願います」

「相判った。今直ぐこちらへ引き戻そう。アモーガ オン アボキ
ヤ シツデイ アク “神点” 終波！」

先程、権佐を人界へと送り出した強烈な光が権佐とりんを包み込んだ。
眩しいと感じた次の瞬間、権佐はりんを腕に抱いたまま元の場所に
戻っていた。

天空の城の中にある狗姫の私室に。

「りんっ！」 「りんさまっ！」

権佐が抱きかかえたりんに狗姫と松尾が駆け寄る。

りんの衰弱した容態を見た狗姫が即座に指示を出す。

「松尾、如庵を！判つておろうな。くれぐれも、今回の事は他言無
用ぞ！」

「心得ております、御方さま」

筆頭女房の松尾は同時に狗姫の乳母ちのめでもある。

謂いわば狗姫の育ての親である。

だからこそ阿吽の呼吸で松尾は狗姫の云わんとする事を察した。

話に出てきた『如庵』とは妖界きつての名医と名高い西国の御典医である。

その如庵を極秘に招請せよとの示唆なのだ。

大つびらに御典医を呼んだりしては、りんの殺害を企んだ者どもに、りんが生きている事が露見する恐れがある。

その危険を回避する為には、極力、りんの事を伏せておく必要があった。

松尾の采配の元、信用の置ける数名の女房が呼ばれ、りんを別室に運んだ。

その様子を見届けてから、狗姫は、ずぶ濡れの権佐に向き直り、今回の探索の労をねぎらった。

二匹の天鼓は用済みとばかりに既に姿を消している。

「ご苦労だったな、権佐。ゆっくり休んでくれ。それにしても、あの大水の中、よくぞ、りんを見つけてくれた。礼を云うぞ」

「御方さま、実は・・・」

権佐は狗姫にりんを助け出すに到った不思議な経過を詳しく報告した。

「そして、これが、りんさまを救った桜の扇にございます」

権佐は懐から小さな扇を取り出し狗姫に手渡した。

「これは・・・桜神老おうじんろうの物ではないか。この匂い、間違いない。そうか、桜の御老公が、りんを」

狗姫は手渡された小さな扇を鼻に近づけクンと嗅いでみた。
雅な桜の匂いに交じって、少々、不快な泥水の匂いがした。
そして、その中に、極々、微かながら血の匂いが雑じっている。

「りんの血の匂いがウツスラとするな。丸太に傷つけられた時のものだろう。ということは・・・血の盟約か!？」

「桜神老さまが、りんさまと血の盟約を!？」

ハッと権佐が驚いて狗姫に問い質す。

「ああ、この血の匂いが証だ。紛れもなく盟約は交わされたな。今後、この桜の扇は、如何なる危難からも、りんを守るうとするだろう」

そのまま扇を手に狗姫が桜神老に思いを馳せようとした時、慌しく松尾が駆け込んできた。

「御方さま、りんさまがつ!」

「りんが如何した、松尾!？」

「急に激しく震えだされ熱がつ!」

「松尾、如庵が、ここに着くまでに、どれほど掛かる?」

「少なくとも一刻(約二時間)は掛かるうかと」

切迫した雰囲気の狗姫と松尾の話に権佐が割り込んできた。

「御方さま、某それがしに如庵殿を迎えに行かせて下さい」

「そなたがか。しかし、権佐、お主は、人界でのりんの探索で疲れ
ておるうに」

「これしきの疲れ、何程の事でもございませぬ。それに私の速足な
れば如庵殿を半時(約一時間)でお連れ出来ます」

寸時すんじ、目を瞑つむって思案ふけに耽ひった狗姫が顔を上げた。

「よし、判った。権佐、如庵を迎えに急行してくれ。頼むぞ。恐らく、りんは毒蛾の毒に侵されている。すぐさま如庵に診せる必要がある」

「御意！」

云うが早いか、権佐は旋風はやてのように姿を消した。

「御方さま、りんさまが毒に侵されてるとは？」

「松尾、そなたも見ておっただろう。あの毒蛾男めが、りんを鞭打ったのを。多分、あ奴の鞭には毒が仕込んであったのだ。それも即効性ではなく遅効性の毒がな。仮に川に落ちたりんが運良く助かったとしても、今度はジワジワと毒が回り確実に命を奪う。全く、二重・三重の罟とは、この事だな」

『愚息行状観察日記(39)』 御母堂さま』』に続く

(39) 桜神老の最期

明言通りに権佐ごんざは半時（約一時間）で如庵を連れ帰った。権佐の背に負おぶわれた如庵は小柄で、その容貌は如何にも好々爺然ごごやぜんとしていた。

フサフサした金茶色の顎鬚あごひげと長く伸びた眉毛が如何にも優しげで見る者に安心感を与える。

道々、権佐から事情を聞かされてきたのだろう。

到着するなり、如庵は、挨拶もそこそこに、りんが寝かされている部屋へと急いだ。

りんの容態を目にした如庵は、早速、りんが襲おそわれた際の詳細を狗姫ぬきから聞き出した。

「御方さま、毒蛾妖怪の毒と伺いましたが、そ奴の風体ふうたいは、どのような感じでしたかな」

「そうだな、一見、女と勘違いしそうな男だった。顔に何ともケバケバシイ化粧を施しておつてな。それがまた、赤、青、黄、緑と、きつ過ぎる原色の紋様だった。異様なまでに毒々しかったぞ」

「成る程、それは、ちと厄介ですな。その種族の使う毒は極めて毒性が高い。ともかく善処いたしましょう」

「済まぬな、如庵、何としても、りんを助けてくれ」

「それにしても、御方さまが、それ程までに気に掛けられるとは・・・。一体、この人間の少女は何者なのですか？」

「如庵、それを聞いたら、そなたも我らと一蓮托生、此度の事ことに関して、今後、一切の他言無用を誓ってもらう必要があるのだが、覚悟は良いか？」

「何を今更、有無うむを言わせず、この城に連れてこられた時点で、もう、既に、そうなっておりますぞ」

「フム、それもそうだな。よし、そなたには話しても良かろう。りんはな、如庵、殺生丸いいなづけの許婚なのだ」

狗姫の言葉に、それまで医師らしく落ち着いた物腰だった如庵が目を見張った。

権佐から毒に侵された人間の治療を要請され、ここまで来はしたものの、内情までは知らされていなかったのだ。

「なっ、何と!?! それは真まことにごごさいますか」

「こんな事で嘘を言ってどつする」

「しっ、しかし……殺生丸さまは極めつけの人間嫌いのはずでは！？」

「確かに、数年前まではな。だが、今は、そうとは言い切れんのだ」

優れた医師は往々にして洞察力に長けている。

況して如庵は妖界きつての名医と謳われる医師である。

わずかな言葉のやり取りから如庵は凡その事を推察した。

「成る程、だからでございますか。わざわざ妖界から刺客が送られたのは。殺生丸さまが寵愛する人間の少女を亡き者にしよう」と

「フツ、流石に察しが良いな、如庵」

如庵は、つと居住いを正し真剣な表情で狗姫に向かい頭を垂れた。それは西国城に仕える御典医としての如庵の顔だった。

「恐れ入ります。では、この如庵、医師として当代さまの御寵姫、りんさまの治療に全力で当たらせて頂きます」

「頼んだぞ」

「はっ！」

如庵の懸命な治療の甲斐あって、三日後、りんの熱は下がった。話は前後する。

りんが生死の境を彷徨っていた頃、桜の精が、この世を去ろうとしていた。

神とまで称えられた桜の長老、二千年の樹齡を誇る神代櫻の樹仙、桜神老である。

今回の雨は、桜神老の長い膨大な記憶をもつてしても前例のない未曾有の大雨だった。

大量の雨水はアツという間に水路から溢れ出し陸地を侵略し始めた。地面に溢れ出した水は泥を溶かし黄土色の水魔へと変化する。

水、水、水、視界を覆いつくす濁った泥水が強大な水魔となって桜の大木に襲いかかってくる。

その様を桜神老は樹上から見下ろしていた。

立烏帽子、狩衣、髪も髭も全てが淡い薄紅色の老人である。

スラリと丈高い容姿は高雅で侵しがたい気品がある。

なにもかも全てが、以前、桜神老の予知したままだった。

この大水を予知した段階で水の流れを意図的に迂回させることは可能だった。

そうすれば桜神老の寿命は少なくとも、後二・三百年は延びただろう。

だが、水の流れを変えた場合、予知した以上の人命が犠牲になるだろうことは間違いなかった。

何より、りんと殺生丸の運命に許容量を超えた大幅な干渉をするこ
とになる。

過去から現在、そして未来に向けて張り巡らされた因果の糸、それは精妙にして複雑な重なり具合で縫り合わされている。

それを極わずかでも違えることを桜神老は畏れた。

何故なら、ほんの些細な要因で未来は全く異なる様相を見せることが多々あるのだ。

だからこそ、桜の老公は己の運命を甘んじて受け入れた。りんに扇を渡す以外、何もせず、静かに最期さいごの時を待っていた。

大量の泥水が、神代櫻の内部に隠された洞うらを直撃した。

限界を超える水圧が、遂に巨木の生命を断ち切った。

押し寄せる激流に耐え切れず、桜の大木は極太の幹の根元から折れた。

バキッ！バキバキッ！バキッ！バキ・・・バキ・・・

ズズ・・・ン・・・ドド・・・ン・・・バシャバシャ・・・

バシャ・・・・・・・・ンッ！

「皆の者・・・さらばだ」

薄紅色の老人の姿が次第に霞んでいく。

最後は大気に溶けこむように完全に消え失せた。

ひとひらの桜の花弁が風に乗ってヒラヒラと飛んでいく。

桜の花弁は辿り着く先を知っているかのように空高く上のぼっていく。

ひらりひらひら・・・ひらひらひらり・・・ひらり・・・ひらり・・・

・
気流に乗り桜の花弁は飛ぶ。

天空に浮かぶ巨大な城の中の一室に眠る人間の少女の許へと。

その枕元に置かれた小さな桜の扇。

桜の花弁は扇に描かれた桜の中にスツと吸い込まれるように消えた。

神代櫻の樹仙、桜神老が授けた扇、『惜春せしゆん』は、これ以後、数々の

危難からりんを守ることになる。

『惜春』、それは風に舞う桜から着想を得た桜神老が、自ら、扇につけた銘であった。

『愚息行状観察日記』40(御母堂さま) 』に続く

(40) 王母

パタパタ・・・パタパタ・・・パタ・・・パタパタ・・・
廊下を小走りに近付いてくる足音がする。

「御方さま、りんさまの熱が下がったそうでございます。如庵殿が、
もう大丈夫だと」

部屋に入ってくるなり松尾が微かに頬を弛ませ狗姫に告げた。
続いて権佐もやってきた。

「そうか、では、そろそろアチラを覗くとするか」

狗姫は覆いをかけていた“遠見の鏡”から掛け布を取り払った。
台座に据えられた大型の楕円の鏡“遠見の鏡”は数ある西国の宝物
の中でも出色の名器である。

本来ならば西国城の宝物庫の奥深く厳重に保管されるべき代物であ
った。

しかし、西国王妃だった頃の狗姫の「馬鹿馬鹿しい、それでは宝の
持ち腐れではないか」との鶴の一声で蔵から出され、以来、狗姫の
居城である天空の城に安置されている。

「“遠見の鏡”よ、隻眼の巫女の村を出してくれ」

ブウ・・・ン、暫し鏡面が歪んだ後、パツと人界の村の様子が映し出された。

二日二晩、降り続いた大雨のせいで村の大部分は今もスッポリと黄土色の泥水に囲まれている。

それでも少しずつ水が引き始めているらしい。

僅かながら泥塗れの地面が見える。

隻眼の巫女の家（小屋）は小高い丘の上にあるので今回の大水にも辛うじて無事だったようだ。

小屋の前に隻眼の老巫女、異界の巫女、半妖、法師、女退治屋が立っている。

どの顔も沈痛な面持ちだ。

行方の知れないりんの事を思い煩っているのだろう。

遠い空に双頭の竜が見えた。

殺生丸だ。

いつものように、りんに逢う為にやってきたのだろう。

アツという間もなく近づいたかと思うと竜を空中に滞空させたままフワリと地面に降りたつた。

毛皮には見慣れた緑色の小妖怪がしがみ付いている。

蝶が舞うように重さを感じさせない優雅な降り方が如何にも殺生丸らしい。

狗姫に良く似た秀麗な面差しは完璧なまでに無表情だ。

にも拘らず不穏な気配が“遠見の鏡”を通してさえビリビリと強烈に伝わってくる。

既に気付いているのか、りんが居ないことに。

あ奴は、まだ何も知らされていない筈。

だが、殺生丸は昔から異様なほど勘が鋭かった。

アレの第六感、本能が異常を告げているのかも知れん。

隻眼の巫女が憂愁に満ちた表情で殺生丸に何かを告げている。

もう、云うまでもなく、りんの事だろうな。

半妖と異界の巫女が、女退治屋が、法師が、それぞれ必死に殺生丸に訴えている。

殺生丸が腰に差した刀に手をかけた。

朱塗りの鞘の天生牙ではない。

荒削りな彫りが施されただけの白鞘の刀、爆碎牙の方だ。

殺生丸の顔は無表情が一転、今にも憤怒と苦悶が噴き出しそうだ。

そのまま地を蹴り待たせていた双頭の竜に跨り水の流れに沿って飛び始めた。

りんを捜しているのだろう。

遮二無二りんを探索する殺生丸の姿を見て権佐が口を開いた。

「御方さま、殺生丸さまに、りんさまは、この城においでだと、お知らせした方が宜しいのでは？」

「それは出来んな」

今度は松尾が口を挟んできた。

「何故にございますか、御方さま？」

「考えてもみよ。りんの殺害を目論んだ者どもは、今頃、首尾よく事を成し遂げたと陰でほくそえんでおろう。彼奴らを油断させる必要があるのだ。もし、りんが無事などと知れようものなら、せつかく旨い具合に気が緩んでいる奸物どもを忽ち警戒させてしまうではないか。そうなったら狡賢い奴らのことだ。直ぐにも証拠を隠滅

し何喰わぬ顔で地下に潜伏してしまっただろうな」

「ですが！」

抗議する松尾に狗姫が覆い被せるように言葉を重ねる。

「それだけではない。理由は他にもあるぞ。そなた達も知っておろう。りんが、この冥道石で二度目の蘇生を果たしたことを」

狗姫が首飾り仕立てにした冥道石を手に松尾と権佐に向き直る。

「勿論でございます。御方さまが直々（じきじき）に私どもにお話下さったのです。どうして忘れられましようか」

松尾が権佐と目を合わせて応える。

「ならば判ろう。りんは既に天生牙と冥道石で生き返った身。次に命に危険が迫った場合、もう、打つ手はないのだと。だから、妾は、あの時、殺生丸に言っておいた。『二度目はないと思え』とな。にも関わらず、此度の体たらくは何だ。もし、妾が“遠見の鏡”で、りんを見ておらなんだら、どうなっておったか。間違はなく、りんは、あの毒蛾妖怪に殺されておっただろうな。運悪く川に落ちたと見せかけて巧妙に“溺死”と思わされたらう。今回、このような

事態を招いたのは全て殺生丸の認識の甘さにある。己が寵愛する少女に、何故、政敵の手が届くと考えなかったのか。りんが人界にいるからなどという言い訳は通用せぬ。愛する者の身の安全も確保できないような愚か者に、どうして西国の王たる資格があるのか。これを契機に己の甘さを、トコトン認識するが良い。松尾、権佐、くれぐれも、りんのこと、一言も、アレに洩らすでないぞ。配下の者にも確と申し付けておけ」

そこには数々の政治的危機を強かに乗り切ってきた前西国王妃の姿があった。

松尾も権佐もハッと胸を突かれ、唯々、黙して主に深く頭を下げた。

『愚息行状観察日記（41）』御母堂さま』に続く

(41) 始動

プイ………

青空に小鳥の囀りが響き渡る。

とは云つても、ここは地上ではない。

下界を遙か下に見下ろす雲の上に浮かぶ巨大な城。

その中庭に細波のような笑い声が湧き起こる。

笑い声の中心は、まだ幼さが色濃く残る少女。

数名の女房衆に傳かれ少女は楽しそうに笑っている。

鈴を転がすような声は軽やかで柔らかい。

甘い声に相応しく少女の容姿は何とも愛らしい。

小さな顔を縁取る髪は艶やかな烏の濡れ羽色、白桃のような肌、絶妙に配置された小ぶりの鼻、花の蕾のような唇、なだらかな山を描く眉。

そして、何より素晴らしいのは闇に瞬く星を思わせる大きな瞳だ。

長いけぶるような睫毛が、それを更に強く印象付けている。

少女は大好きな養母を見つけると素早く打ち掛けをたくし上げ小走りに駆け寄った。

「お母さま」

養母が溺愛する愛娘に目を細める。

養女が花のように愛くるしい美少女なら、こちらは絶世の美女である。

光を弾いて輝く白銀の髪を頭頂近くで二つに分けて結び背に流す特徴的な髪型、白磁の肌、柳の眉、金の瞳、頬に走る一筋の妖線が宝玉のような美貌を更に引き立てている。

美女は妖界でも最大の領土を誇る西国の前王妃にして当代国主、殺生丸の生母、王太后の狗姫である。

傍らの美少女は三年前の或る日、突然、何処からともなく現われ養女に迎えられたりん、人間である。

とはいえ、りんの存在は、ある理由から極秘にされている。

知っているのは、この城でも狗姫と筆頭女房の松尾、それに、りんの身の回りの世話をする松尾配下の口の堅い女房衆、数名のみである。

そして、残る一名は西国お庭番の頭領を務める権佐であった。

「りん、そんなに走るな。転んで怪我でもしたら、どうする」

口調は厳しくとも狗姫は養女に甘い。

いつものように娘の黒髪を愛おしげに撫でてやりながら御転婆気味の行動を嗜める。

「はい、気を付けます、お母さま」

筆頭女房の松尾が習い事の時間を告げる。

「さあさあ、りんさま、お勉強の時間にごぞいますよ。今日は和歌にごぞいます。準備をなされませ」

遊び時間の終わりに、少女がプツと頬を膨ふくらませる。

「エ〜っ、もう、そんな時間なの。もっと皆みんなと遊んでいたいの……」

そんな少女の気を惹くように松尾が言葉を連つねる。

「お勉強が終わったら“おやつ”に致しましょう。美味しい金平糖にごぞいますよ。つい先程、権佐殿が、お土産に持って来てくれたのです」

「本当、嬉しい！」

それを聞いた途端、少女はニッコリ微笑み勉強用に割り当てられた部屋へチヨコチヨコと速足で歩いていった。

側仕えの女房衆もゾロゾロとりんに付いて移動する。

少女と入れ替わりに大柄な男が入って来た。

身体は人型、頭部は犬、先程の話に出てきた西国お庭番の頭領を務める権佐である。

毛皮に、黄、黒、焦げ茶色が雑じりあっている処から“斑の権佐”
という通り名を持つ。

妖界では三本の指に数えられる凄腕の妖忍である。

早速、狗姫が権佐に声をかけた。

「久し振りだな、権佐。その後、彼奴らに目立った動きはないか」

その件について報告する為に伺候してきた権佐は女主に一礼すると挨拶もソコソコに本題に入った。

「ハッ、御方さまにはご機嫌麗しゅう。ご報告いたします。流石に痺れを切らしたようにございます。この三年、当代様から色好い返事を貰えなかつたせいでございましょうか。殆どゴリ押しの形で大掛かりな紅葉狩りを催す次第に漕ぎつけました。紅葉の鑑賞とは口実、実際の処は体の良い花嫁選びにございましょうな」

狗姫のいう彼奴らとは娘や姪、または孫など、己の血筋に連なる者に、狗姫の息子、西国王、殺生丸の花嫁の座を射止めさせようと暗躍する古狸どものことである。

中でも殺生丸の父、先代、鬨牙王の母方の従兄弟に当たる遠戚の豺牙が、その最たる者であった。

「そうか、では、そろそろ潮時だな、こちらも動くとするか」

狗姫が筆頭女房の松尾と顔を見合わせニヤリと笑った。

松尾は狗姫の乳母めのと、即ち育ての親すなわ、腹心中の腹心である。

狗姫が何を思い考えるのか口にせずとも察することが出来る。

思慮深い緑の瞳が主に「諾たく」と頷うなづく。

それまで、どことなく物憂げだった金の瞳が不意に強い光を放つ。

口許に反し狗姫の目は全く笑っていない。

それは、この三年間、泳がし続けた獲物を仕留める瞬間を計る捕食者の笑みだった。

以前、りんは人界で暮らしていた。

六年前、西国に帰還する直前、殺生丸が犬夜叉に所縁ゆかりのある隻眼の巫女にりんを預けたのだ。

人界は未だ戦国の世だったが、巫女の村は平和で穏やかな暮らしが三年続いた。

それが崩れたのは三年前、未だ嘗かつてない大雨が人界に降った日のことだった。

西国王の殺生丸が寵愛する人間の少女、その存在を嗅ぎ付けた何者かが、りんの暗殺を企てたのだ。

りんは毒蛾妖怪の手で川の側へ誘おびき出され大雨で増水する川に落とされた。

もう少して危うく“溺死”に見せかけ殺されるところだった。

それを辛くも救ったのが狗姫と権佐だった。

狗姫は“遠見の鏡”を通して次元透過の大技『神点』を使い権佐を妖界から人界へと送り込み川に落ちたりんを救った。

気絶したりんを抱きかかえたまま、権佐は狗姫の『神点』で天空の城に戻ってきた。

しかし、城に連れて来られたりんは毒蛾妖怪の猛毒に中り高熱を出し、意識のないまま、三日、寝込んだ。

四日目に、やっと意識を取り戻した時、りんは何も覚えていなかった。

【りん】という自分の名前以外、全てを忘れていた。

これまでの生（お）い立ちは勿論、殺生丸のことさえも。それ以後、三年間、記憶を喪失したりんを狗姫は秘かに匿い、己の養女として、それはそれは大切に育ててきたのだった。

三年も親子として暮らし思いを掛け続ければ情も湧く。

況して、りんは、狗姫を母として、心底、慕っているのだ。どうして可愛いと思わずにいられるだろう。

溺愛する養女の敵を討つべく決意を固めた美女は、妖艶な笑みを、一層、深くした。

【紅葉狩り】……山野に紅葉を鑑賞に行くこと。

【伺候しうご】……？高貴な人の側近くに仕えること。？目上の人の処に
参上して「ご機嫌伺いをする」こと。

『愚息行状観察日記（42）』御母堂さま』』に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9246r/>

『愚息行状観察日記 = 御母堂さま = 』

2011年11月27日11時53分発行